

# 第1部

# 次の100年に向けた 新たな動き

## -- この10年の軌跡

ア式蹴球部の立ち位置を測る物差しとして、現役の活動、OBの活動、現役とOBの交流、そして大学内でのア式蹴球部の位置付け等がある。これらの視点でみて、戦後から一貫してあまり大きな変化がないまま、流れてきたといえる。例えば、現役は、大学の部活動として関東リーグ1部昇格を目指し、都リーグに落ちてからは、関東リーグへの復帰を目指す…。OBは、卒業後、企業のチームでサッカーを続ける者あり、サッカーから遠ざかる者あり…。創部90年を祝った時は、このような感覚で記念式典に臨んだ記憶がある。

しかし、直近の、わずか 10 年という短い期間に起きた変化は、単なる一過性の出来事ではなく、これからのア式蹴球部の在り方に大きなインパクトを与える要素を含んでいると思われる。

ここでは、その大きな動きを、生涯サッカー、国際交流、女子部 創設、地域交流という4つのくくりでまとめ、この10年間での主 要な動きを紹介する。

これらを全体として俯瞰すると、ア式蹴球部が次の 100 年に向けて、新たな歩みを踏み出す方向がぼんやりと見えてきそうだし、既に知らず知らずのうちに第一歩を踏み出しているのかもしれない。

こうした新たな動きの行き先には、これまでのア式蹴球部とは違う形での大学内での位置付けや社会との関わりがあるかもしれない。LB会としてもア式蹴球部を支えるべく様々な取組において、組織としての活動を一層強化していくことになるであろう。 (武田)

# 生涯サッカー

東大ア式蹴球部卒業生の大半は、日がな一日サッカーに明け暮れる生活には一応けじめをつけて、社会人としてそれぞれ新たな道を歩んで行ったが、現役時代に成し遂げられなかった夢を追い、またはサッカーの魅力が忘れられず、社会人になっても本格的なサッカーを続けた者もいる。そのような若い卒業生がどのようなサッカー活動をしていったのだろうか。そして、その後年齢を重ね、トップレベルのサッカーはできなくなったものの、強い情熱の下サッカーを継続していった卒業生は、年代ごとに、どのようにサッカーに関わっていったのだろうか。

若手 OB については、現役と一体となって日本サッカーを牽引した昭和初期から、社会人サッカーの発展により、意欲ある OB が社会人サッカーに活躍の場を求めた時代(勤務先の企業チームで活躍)、そして、平成になって以降、再び東大 OB としてチームを作り、本格的に上位のリーグを目指す活動と、そこまでのレベルは目指さないが、一定のレベルを維持する活動に分かれて行ったと総括できる。この若手 OB の活動については、吉澤他がこれまでの変遷を振り返り、今後の活動について展望した。なお、この 10 年での大きな動きとして、「文京区に根差した地域クラブ」というコンセプトのもと、東大ア式の枠を超えた東京ユナイテッドや、文京 LB レディースの設立、躍進があったが、これらについては、巻頭座談会「つぎの 100 年へのキックオフ」や福田監督の寄稿文「"ア式の未来 100 年モデル"」に詳しく語られている。

一方、会社の第一線から退く年齢になった OB サッカーマンの活動も平成時代になって本格化し、今では OB の結束を固める貴重な場になっている。

即ち、昭和の時代までは OB としてまとまった活動はしてこなかったと言えるが、早大 OB の呼びかけで、平成元年 (1989 年) に、早大、慶大、東大の 3 大学対抗 OB 戦が行われた (この大会は既に 30 年目に入り、途中から年 2 回になったこともあり、通算 50 回を超えている)。 その10 年後の 1999 年の京大定期戦 50 年記念大会を機に、LB50 が結成され、その後 LB60も結成され、今では、各種シニアの大会や親善試合に参加し、年間 30 試合以上をこなしている。更には、2013 年からは東京都サッカー協会シニア連盟主催の公式リーグ (通称クラウンリーグ) にも参加するようになった。

これらの OB 活動の発展に大きな役割を果たした、折原一雄 (S30 年卒)、樋口周嘉 (S40 年卒)、池森俊文 (S51 年卒) の 3 氏のインタビューを中心に、この 10 年で大きく発展した LB50、60 (含む 70 代) の活動を紹介したい。 (井田)

## シニアサッカー 50 ~ 70 代の活動 LB シニアの年間活動記録

井田 淳(昭和53年卒)

前文でご紹介した通り、現在のLBシニアは活動範囲を広げ、LB50、LB60、LB65、LB70というそれぞれのカテゴリー、あるいはその混在で多



2007年3月:7大学OB戦 (検見川)。

くの試合をこなしている。2015年を例にあげると、次頁の表の通り、各種大会、親善試合を含め、実に66の試合が組まれ、50歳以上のシニアが毎週のようにサッカーを楽しんでいる。うち、親善試合(含む藤枝大会)が47試合を占めるが、相手チームとの日程調整、場所、メンバー招集など、手間のかかるアレンジを、ボランティア精神で行ってくれている方々がいることを忘れてならない。古くは折原氏、近年では樋口氏、池森氏、中谷氏のお蔭である。



2009年11月:藤枝FC(紫)と LB50、60(藤枝総合運動公園)。



2015年7月: 京大OB (濃紺) との前哨戦 (農学部グラウンド)。



2017年5月: 東早慶3大学戦 (検見川)。



2018年1月: 初蹴り会。教育大附属のOBシラク(白)とLBシニア (農学部グラウンド)。



2018年2月:防衛大(濃紺)、北大(黄色)との3校対抗戦(横須賀・防衛大)。

#### 東大LB50/60の活動記録(2015年)

月日	対戦等	場所	備考
	年中クラブ	私学事業団G	110 3
1.10 (土)		農学部G	   一橋大OB、シラク
1.12 (祝)		西が丘G	東大LB会協力
1.17 (土)		市原スポレク	東大LB会協力
	市原マスターズ大会(2日)	市原スポレク	同
1.25 (日)		三菱巣鴨G	
2. 1 (日)		葛飾陸上G	対墨東秋桜
2. 7(土)		私学事業団G	
2.14 (土)	千葉大OB	フクダ電子A	
2.22 (日)	東京男組	三菱巣鴨G	
2.28 (土)	杉並60	私学事業団G	
3. 1 (⊟)		赤羽SM	対法政クラブ
3. 1 (⊟)	東京男組	農学部G	
3. 7 (土)	春季選手権大会(決勝T)	駒沢第二G	対むさしのゼファー、トキオ・ロホ
3. 7 (土)	七大学OB大会	市原スポレク	50は強力チーム、60は都大会と重なる
4. 4 (土)	LAZOS	葛飾陸上G	
4.12 (日)	ベイ60、文京 L	農学部G	
5. 3 (土)	3大学OBサッカー大会	検見川G	早稲田・慶応
5. 4 (祝)	東京シニア大会予選	武蔵野苑G	死の予選Dグループ3位
5.16 (土)	千葉ミニサッカー大会	フクダ電子S	
6. 6 (土)	カップ戦	にいじゅくG	
6. 7(日)	筑波大付、広大付	農学部G	
6.27 (土)	墨東60	私学事業団G	PK戦も
7.5(水)	一橋大、学芸大	農学部G	国公立大戦再現、心筋梗塞発生/対応
7.11 (土)	東京シニア大会順位戦	駒沢第二G	3位グループ順位戦1位、全体で15位
7.18 (土)	京大戦前夜祭	農学部G	現役と合同で懇親会
7.19 (日)	京大戦	御殿下G	
8. 2 (⊟)	B+、墨東	東金町G	炎天下
8. 9 (⊟)	埼玉60、シラク	私学事業団G	
8.22 (土)	栄光学園OB	農学部G	
9. 3 (木)	藤枝大会(第一日)	藤枝総合G	予選2位
9. 4 (金)	藤枝大会(第二日)	藤枝市民G	順位戦8位
9.12 (土)	刈谷大会(第一日)	総合運動公園	
9.13 (日)	刈谷大会(第二日)	同	人数不足にLB70の皆様が奮戦
9.19 (土)	江東五区、練習	農学部G	
10. 3 (土)	ACちば、ベイ60	検見川G	以下、予定
10.12 (祝)	東京シニア秋季大会	舎人公園G	
10.17 (土)	ホームカミングデイ	御殿下G	東大スポ愛OB
11. 3 (祝)	3大学OBサッカー大会	検見川G	早稲田・慶応
11. 7(土)	藤枝遠征	藤枝市民G	
11.15 (日)	関東国立大OB戦	農学部G	千葉大・埼玉大・福島大
12.19 (土)		農学部G	
12.27 (日)	最終戦	私学事業団G	年中クラブ

#### LB御殿下 S 60FC公式戦記録 (2015年)

#### (1) 春季シニアサッカー選手権大会(予選)

月日	対戦	場所	備考
2. 1 (日)	墨東秋桜	葛飾陸上G	○5-0
3. 1 (日)	法政クラブ	赤羽SM	○2-0

#### (2) 春季シニアサッカー選手権大会(決勝)

月日	対戦	場所	備考
3. 7(日)	むさしのゼファー	駒沢第二G	○3-1 (準々決勝)
3. 7(日)	トキオ・ロホ	駒沢第二G	●0-1 (準決勝) →ベスト4

優勝はトキオ・ロホ

#### (3) 東京都シニア大会(予選) Aグループ~Gグループ

月日	対戦	場所	備考
5. 4 (祝)	三鷹	武蔵野苑G	△1 – 1
5. 4 (祝)	トキオ・ロホ	武蔵野苑G	● 0 - 1
5. 4 (祝)	墨東60	武蔵野苑G	△0-0 →Dグループ3位で順位戦へ

#### (4) 東京都シニア大会 (順位戦)

月日	対戦	場所	備考
7.11 (土)	FCW	駒沢第二G	○3-1
7.11 (土)	杉並リベルタ	駒沢第二G	0
7.11 (土)	多摩中	駒沢第二G	○ →全体で15位

#### (5) 藤枝大会

月日	対戦	場所	備考
9. 3 (木)	藤枝FC	藤枝総合G	△1-1 (予選)
9. 3 (木)	各務原F	藤枝総合G	△1-1 (予選) →2位グループ
9. 4 (金)	焼津飛び魚	藤枝総合G	●0-0 (PK2-4)
9. 4 (金)	墨東60	藤枝陸上G	●2-3 →総合8位

#### (6) 東京都リーグ (クラウンリーグ)

月日	対戦	場所	備考
4.19 (日)	墨東60	日本工学院G	● 0 - 1
5.10 (日)	東京シニアクラブ	日本工学院G	△1 – 1
5.17 (日)	江東五区	清瀬内山G	△0-0
5.30 (土)	マジョール	江戸川臨海G	○2-1
6.20 (土)	LAZOS	多摩FC	●0-2
7.12 (日)	トキオ・ロホ	日本工学院G	● 0 - 1
8. 8 (土)	四十雀クラブ東京M	大井第二G	○2-0
9.27 (日)	大田区シニア	日本工学院G	○2-0
10.24 (土)	四十雀クラブ東京	大井第二G	●0-5 →最終6位

# シニアサッカー 50 ~ 70 代の活動 東大サッカーが日本サッカーの発展に寄与したもの

#### 折原一雄

昭和5年(1930)東京・本郷の生まれ。88歳。地元の小・中・高校を経て東大を卒業。 赴任先の名古屋で社会人チームに所属したあと、若者や小学生チームを作った。後年、東京 で出身高やLBのチームでプレー、神奈川の超60歳チームにも所属、70歳のころ子供チームをふたたび作った。現在は超70歳と超75歳のリーグ戦でプレー、宮城・松島や大阪・ 堺などで毎年開かれる超80歳の全国大会にも出場している。

#### 東大サッカーが日本代表へ与えた影響

---東大サッカー部へはいつ入部されましたか。 **折原** 昭和26年、入学して間もなくの春合宿からですが、仲間がいたので、それで自分も入るのは普通の流れでという感じでした。

サッカーを始めたのは中学1年生、昭和18年でした。中学・高校時代には東大でも仲間となる岡野俊一郎が一年下におり、彼とは一緒に中学校全国大会(現在の全国高校大会)へ行きました。彼は上手かったけど、僕は本当に下手でね(笑)。

── 両野さんとは中学時代に出会われていたんですね。当時、大学1年生で入られた時ですが、 部員は何人くらいだったのですか。

折原 ざっと20人。僕の学年は少なくて4人だった。僕の年だけガクッと減っているんです。しかも4人のうち1人が退部して、代わりが入ってき



折原一雄(2018年6月8日 駒沢補助競技場にて)

て、仲間としては卒業するまで結局4人でした。 部員は卒業する頃で約40名でした。

一一岡野さんとのご関係は長いものとなったわけですね。

折原 そうです。実は大学の入学は、彼のほうが早いんですよ。その後お互いに留年したりして、もうどっちが先輩か後輩か分からない。てっきりね、岡野は彼の家が商売をやっているから、本人は卒業する気がないんだろうとこっちが勝手に思っていたら、ちゃんと卒業している。それをかなり経ってから知って、「えーっ…」と大変驚いた(笑)。

一ちなみにポジションはどこだったのですか。 折原 フルバックでしたね。今の表現ではサイド バックです。当時の東大のプレースタイルは何と 言うんですか、割と技巧派でしたね。パスをきち んと通すスタイルでした。そう考えると、逆の意 味で目立ったのは早稲田でした。要するに力任せ。 つまりイングランドスタイルですよ。ボールを大 きく蹴って力任せにゴール前に放り込んでいく。 昔から百姓一揆って言われているものです。

一一今でも言いますね(笑)。東大サッカー部の 強さはどれくらいだったのでしょうか。

折原 強かったですよ。関東の大学の中では、ちょっと下がり目でしたが。戦前はずっと優勝を争うチームでした。戦争直後の昭和23年、関東リーグ1部で優勝しているんです。

――戦後間もなくのリーグ戦での優勝校が東京大 学。素晴らしいですね。

折原 本当に。僕が入部する前までは強くて上手 い選手が多かった。だから、その年代が抜けた後 は厳しくなるというのは、誰も感じていましたけ れど…。それで、東大は弱い弱いと言われながら、 昭和27年度の全国大学選手権第1回大会で優勝した時は大騒ぎでした。まさに最初にして最後でしたが…。

所謂インカレですよね。第1回目の記念すべき優勝、歴史にも永遠に残ります。折原さんの世代の時の強さ、どのあたりが強みだったんですか。折原さんの分析で結構ですのでお教え下さい。

折原 中心選手の岡野は確かにうまかったし、他の人もそこそこ出来ていた。岡野のように学生選抜に選ばれている人もいたし、候補に入っている人もいた。でもね、強みは団結心というか真面目さだったと思います。海老原主将の統率力は見事で、部内で揉め事などはなかったね。皆仲が良くて。頑張ろうって。

ちなみに岡野はセンターフォワード、点取り屋です。浅見は左のサイドハーフでした。フォーメーションはWMの頃です。私はサブで、試合にはほとんど出場していません。

一一同じチームメイトからみて、岡野さんのキャプテンシーはどうだったのですか。リアルに体験した方でないと分からないと思います。

折原 家庭が裕福なのでお坊ちゃん的な性格で「ワガママ坊主」と呼ばれていたんです。本人も自覚していたと思いますよ。高校でも、先輩によく呼ばれて注意されていましたね。ちょっと独特なキャラクターで、理論派だから自らの理論に合わない人はあまりお呼びじゃなかったです。当時サッカーの勉強と言ってもサッカーの本なんてないんです。本当に口伝で、昔の練習方法をそのまま実践している。だから今から思うと非合理的な練習が多かった。だけど岡野は、それにとらわれない独自の方法で練習していた。

それともう一つ。岡野は耳が良かったんだろうと思っています。学生代表でヨーロッパ遠征に行ったのですが、帰ってきたら一皮むけた感じになっていました。外国語の面でもです。耳が良いっていうのは三半規管の発達がよく、正確に音を聞きとる力が良かったのでは、ということです。身体のバランスが良いことにも繋がります。プレーでの身体の動き方もいいですが、語学の習得も早い。浅見も岡野さんは頭が良いと言っていました。

少し深く聞かせて下さい。早稲田と東大のプ

少し深く聞かせて下さい。早稲田と果人のアレースタイルの違いのお話がありましたが、 このルーツは何なのでしょうか。



2001年1月に開かれた「岡野俊一郎君を励ます会」に出席した岡野本人(中央)と折原(左)。

折原 ルーツといわれても、ちょっと説明しにくいですね。昔、旧制高校があった時代は、そこでキャプテンをやっていたような人たちが東大に集まってきていて、みんなある程度基礎技術を持っていた。それで理論的で技術尊重のチームになったと聞いています。

一方、早稲田は上手い選手もいたけれど、体力 に自信のある選手が揃っていたので、粘り強いチ ームになったようです。

大正の初めに東大サッカー部をつくった大先輩の方々は、しばらくのちに日本サッカー協会を立ち上げた方々でもあるのです。その先輩方は、ヨーロッパのサッカー理論を勉強して積極的に取り入れていて、「頑張れ、頑張れ」一点張りの精神主義尊重ではなかったようです。あと、戦争前は東大・早稲田・慶應の三大学がビッグスリーとして代わりばんこに優勝していたんです。大正から昭和にかけて早稲田、慶応、東大が一位でしょ。プレースタイル的には早稲田は前へ放り込んでいくみたいなイングランド的でした。慶應は華麗、技術が上手くて技巧派でしたね。

一極めて科学的ですね。研究熱心なのも、パイオニアという意味においても、東大らしいです。1936年のベルリンオリンピックで、日本は優勝候補のスウェーデンを撃破するじゃないですか。イギリスで当時のラジオ音声の録音を聞いたことがありましたが、実況は日本代表を絶賛しています。皆で研究して日本人に最も合うスタイルを短いショートパスだと見抜きました。そのメンバーの何人かは東大の選手です。

折原 ベルリンには東大から3人の選手が参加しています。竹内悌三(S7卒、29歳、BK)、種田(お



三大学対抗戦にて。前列左より3番目に折原、前列左端に樋口周嘉(58頁)、後列左より6番目に池森俊文(62頁)。

いた)孝一(S13卒、23歳、HB)、高橋豊二(S14卒、22歳、FW)の三氏です。とくに竹内さんはキャプテンを務め、守備の要として活躍されたようです。また非常に研究熱心だったようで、大会終了後、チームから離れて1人ヨーロッパ各地を回って観戦し、いろいろ見聞を広めたようです。当時は3B制が採用されてまだ間もないころだったので、それへの関心も深く、帰国後、協会の機関誌に報告記を書いています。

――指導者のお話を伺いたいと思います。折原さんが印象に残っている監督は。

折原 僕らの頃は横山洋三さんという方が監督で してね。OBで昭和16年卒です。本郷で学生課長 をされていたんです。指導に関しては、そもそも 東大は監督がいないようなものなのです。学生が 練習メニューを監督と相談して考えて実行する。 だから監督が技術的に、ああだこうだ言うことは あまりありません。竹腰重丸さんも東大の庶務課 におられましたが、この方は技術派です。もっと いえば理論派で技術派でした。竹腰さんは話をし だしたら何時間あっても足りないくらいですね (笑)。一言では言えないですが、身体の使い方と か、相手をブロックするときの話が多かったです。 竹腰さんはセンターフォワードですから相手のバ ックを抑えるとか。それと「侍の心構え」を持っ ていましたね。本人は口には出されなかったけれ ど。

――「侍の心構え」。素晴らしいですね。

**折原** 竹腰さんには、そういうものが流れていた と思います。お母様が江戸の末期生まれで武家の 出身だったので、竹腰さんは「お前は侍の子供だから」と言われて育ったそうです(『東京大学のサッカー 闘魂90年の軌跡』36ページ参照)。

だから、厳しさを持たれていました。プレーが 甘いと厳しい言葉が出ました。岡野なんかは頭脳 派であり技能派で、凄く上手くてプレーも華麗で したが、見込みがあるから相当怒られていました ね。

私はね、選手兼マネージャーで、戦力にならなかったのですが、ただ、これは現役の人たちにも言いたいのです。東大は弱いという印象を持たれていますが、相当強かった時代もあったんです。だから、大正年間に野津謙(のづゆずる・通称ノヅケン)さんなど日本サッカー協会をつくった人たちは、当時の日本サッカーを強くするためにはどうすればよいかを真剣に考えられた。その一つとして、大学サッカーを強くせねばならず、そのためには東大が中心にならなければならないと結論付けた。これからの100年を考えるなら、こ大サッカーができることは、まだたくさんあるはずです。

一折原さんが卒業されてからですか、2部に落ちたのは。

折原 僕が卒業した年の翌32年に落ちました。 僕の最終学年の時を挟んで前後3年間、関東リー グ1部の最下位でした。当時は入れ替え戦があり、 そこで勝って残留したこともありました。

── 折原さんは先輩からの寄付集めに苦労され たと聞いておりますが。 折原 寄付金集めを主としたマネージャーの役目を果たすため、先輩と現役とのパイプを太くしようと、しょっちゅう先輩に手紙を出したり、電話をかけていました。OBは300人くらいいたでしょうか。全員とは言いませんが、多くのOBの名前や卒業年、電話番号は覚えていました。

──話は飛びますが、東大・早稲田・慶應3大学 の超 OB による現在の大会はどのようにして 始まったのですか。

折原 それはね、僕より4つ5つ上の先輩方が平成元年(1989)に始めたんです。東大が昭和23年(1948)に優勝した当時の方々が早慶と相談して、「昔のユニフォームを着て、また試合をやろうじゃないか」と言ったのが始まりのようです。最初は1回だけのつもりで始めたらしいんですが、たまたま東大が2-0で早稲田に勝った。そしたら後日、元気のいい東大の先輩が、酔った勢いで早稲田に電話をかけて、「どうだ、悔しいだろ。もう一丁やるか」と水を向けたら「おう、やるぞ」と乗ってきて、それから続いて今日に至っているという次第です。

実はこの話の発端には前段があって、その前から旧制高校の OB が大会を開いていたんです。これがなかなか盛大で、全国的な規模で開いていました。この大会に出場していた早慶東 3 大学 OB の間で「高校 OB だけじゃなく、大学の OB 同士でもやりたい」という気分があったようで、関東大学リーグ戦1部で優勝を争った間柄だったので話が円滑に進んだようです。この 3 大学戦のほか、刈谷大会が平成 6 年 (1994) から始まり、東大LB は第1回から参加しているのですが、私は初期の数年間、3 大学戦と並行する形で世話役をやっていました。

──折原さんは東大や大学サッカーに関する大量 の資料の整理にあたられていますね。東大サ ッカーばかりか、日本サッカー界においてた いへん貴重な資料です。

折原 資料はね、当初まとめた時には農学部の部室に置こうと思ったんだけど、汚れてダメになっちゃうのではと思い、日本サッカー協会に寄贈しました。所有権は僕にあるぞって思っていますが、そんな形にはならないでしょうね。いつか遠い将来、資料の紙は劣化してダメになっちゃうので、できたらデジタル化しておいたほうがいいのではと思っています。なぜかと言うと、そろそろ

『100年誌』なんかを出したいと思っている大学は結構あると思うんですが、どこも大正末期から昭和初期にかけての資料がほとんどなくて困っていると聞いています。それでこの資料を早くデジタル化しておけば、誰でもいつでも気軽に利用できるのではというわけです。大げさに言うつもりはないけれど、東大サッカーだけではなく、黎明期の日本のサッカーに関して、これだけまとまった資料は他にはないのではと思っています。

#### これからの東大ア式蹴球部

──最後に、これは言っておきたいという事は何 でしょうか。

折原 現役の時に第1回全国大学選手権で優勝していますが、その後に現役だけじゃなくて若いOBも一緒になったLBクラブが、昭和34年の天皇杯で3位になっているんです。これはとても素晴らしい記録で、我々が誇りとすべき思い出です。それが戦前からある東大サッカー部が記録として残したものとしては最後の華々しい活躍です。今後もずっと語り継いでいってほしいですね。

若き日の仲間との切磋琢磨は後年になって生きると思っています。現役としていろいろ苦労はあるだろうけれど、みんなで協力して、実りある部員生活を送ってください。

2018年1月28日、東京・世田谷区にて 聞き手:上野直彦



折原、1990年前半のころ。

# シニアサッカー 50 ~ 70 代の活動 1964 年の東京オリンピックを目の当たりにした衝撃

### 樋口周嘉

昭和17年2月17日東京生まれ。昭和36年4月東京大学理科一類入学。昭和40年3月工学部航空学科卒業、三菱重工業入社。平成3年3月までロケット、宇宙ステーションの設計業務に従事。平成3年4月本社技術本部に転勤となり、平成7年から特許契約部長。平成10年4月三菱重工業を定年退職(財)日本宇宙フォーラム常務理事就任。平成14年3月退任。

#### 大学2年の時から将来のマネージャー候補に

──ア式蹴球部にはいつ頃に入部されたのでしょ うか。

**樋口** 東大ア式蹴球部には昭和36年に入って4年 間過ごして昭和40年卒業です。4年間ア式にいた んですけども、公式戦にレギュラーとして出場し たことはありません。4年生の時には主務(マネー ジャー)になり、世話役に徹していました。

主務になる下地が作られたのは2年生の夏でしたね。京都であった京大戦に参加するメンバーに同じ2年生の中で上手い奴が3人くらい選ばれたのですが、彼等に加えて私が「主務の目で京大戦をちゃんと見ておけ」ということで連れて行かれまして。結局その流れで4年生になって主務をやりました。

今のア式のスタッフはいろいろな役目を分担していますが、当時の私は全部1人でやっていました。学内の各部署や学連の対応にはじまり部内の部員への連絡や試合のアレンジなど、とにかく全部1人でやっていました。

それに加えて一つ特徴的なことがありました。



2013年11月30日、国立霞ヶ丘陸上競技場(当時)にて。第 8回ロイヤル(O-70)サッカー東西対抗戦。71番が樋口。

私が4年生の昭和39年というのは、東京オリンピック開催の年だったのですが、組織委員会の方から学連に関東の1部、2部の大学からサッカーの補助役員を出してほしいとの話がありました。当時はまだ都リーグはなくて関東リーグ一本で1部から7部だったのですが、東大は数年前に2部に落ちてそのままでした。オリンピックの補助役員は五輪のサッカー会場の整理やボール拾い、そして記録係を担当しました。1部の学校は7、8人出したと思うのですが、2部からは1人でよいというので1人だったら俺が出ていくよと言って手を挙げました。そこで担当したのが駒沢競技場での記録係、日本代表の予選リーグでの試合全部です。

一歴史的なアルゼンチンとの試合もでしょうか。 樋口 そうです。世界の強豪アルゼンチンに勝った試合でしたが、もちろん記録していました。試合が終わったら周りの皆がワーッと騒いでいるじゃないですか。でも私は一生懸命下を向いて集計をしていましたので、ワーッと騒ぐ中には入れませんでした。良い思い出です。

一卒業後はどのような方向に進まれましたか。 樋口 そのまま大学を卒業しまして、サッカーは 終わりかなと思っていたんですけど、三菱重工で 名古屋へ行きまして、秋になり会社のサッカー部 に入りました。仕事は人工衛星打ち上げ用のロケットの設計をやっていました。入部以来ずっと 30代後半くらいまで会社でプレーしていました ね。その後、会社のサッカー部長になれと言われ て、実際プレーは1年に1回くらいとなりました。 そして、49歳で東京転勤になり、また、定期的 にボールを蹴るようになりました。

#### LB-50 の結成へ奔走

――その後、東大サッカーとの関係はどのような

ものでしたか。

樋口 転勤で東京に帰ってきた49歳の時から関係復活の動きが始まりました。それまでの26年間ずっと名古屋にいたんですが、東京へ戻ってきて三菱重工本社で周りを見渡したら昔一緒にサッカーをやっていた人がいたので、話しているうちに本社チームに入りませんかと言われ入部しました。毎週水曜日の夜、巣鴨にある三菱養和グラウンドでミニサッカーのリーグ戦があり、そこで結構やっていましたね。その後も会社でのサッカーを続けながら京大戦など東大ア式蹴球部OB会として平成11年(1999年)、57歳の時にア式のOBでLB-50というチームを作ることになりました。

----チームを作ろうとなったきっかけは何だった のですか?

**樋口** きっかけは東大・早稲田・慶応の3大学のOBのサッカー対校戦なんです。第1回が平成元年(1989年)に開催されており、それ以来この大会に参加するア式OBの取りまとめを折原(一雄・昭和30年卒)さんがされていたのを、私が引き継ぐことになったのです。

以前から旧制高校の OB 達が集まって楽しく蹴る会として「SOI」という集まりがありました。 SOI とは「サッカー OB インターハイ」の略です。 そこに参加していた東大、早稲田、慶応の先輩達が話し合う中で、東早慶は戦前の日本のサッカー 界を引っ張って来た伝統を有しており、その伝統を引き継いで3大学で集おうということになり、 平成元年にスタートし、何回か会を重ねるうちに 5月3日と11月3日の年2回開催となりました。 それで今年の5月で52回になっています。

大会が始まった当初の参加資格は旧制高校卒に限っていたのですが、何年かして、確か平成5年(1993年)の秋に、大学卒業が昭和36年までの新制高校出の人にまで広げられました。この時、昭和36年卒の人たちは54歳以上ということになります。それから6年後の平成11年(1999年)、活動している人達は年齢が上がってきますよね。早稲田と慶応は毎年若い人に声をかけて集めていたのに、東大は昭和36年卒までしかいないわけです。ところが早稲田と慶応は昭和45年卒くらいまでいるわけ。こんなのとやっていたら勝負にならない。それで折原さんが下の年代にも声をかけたいと思われ、昭和40年卒の私にお話がきたのです。下の世代に声をかけて3大学の大会に参

加させて欲しいという話があり、やりましょうと なりました。

──そこから樋口さんが LB-50 を作っていかれ るのですね。

樋口 平成11年 (1999年) ですが、僕の3年や5年下くらいの連中に声をかけて50歳代のチームを組織することを始めました。第一の目的は自分たちでサッカーを楽しむ集まりとするが、60歳以上の超OBチームへの継続的な選手供給源となることを重要な目的として掲げました。活動としては年に2回行われる早稲田・慶応との超OB戦をメインに。50歳になったばかりの若い人から60歳までを対象とし、3年ごとに幹事役をおくと決めました。これがLB-50のスタートです。

その年の5月に手紙を出して、7月の京大との定期戦で50歳以上のOB戦をやりましょうと呼びかけました。呼びかけ人は樋口と小川(恭二・昭和43年卒)と手島(直幸・昭和47年卒)の3人としました。7月11日の京大戦には15人が集まりました。この京大戦はちょうど50回目の記念だったので、検見川グラウンドでの50回記念にと皆を集めるのに良いタイミングだったのです。それ以降、9月と10月に試合をやり11月3日の3大学大会に臨みました。3大学大会に出た人は30人近かったです。

その後、LB-50 の活動は同年代のチームとの親善試合を中心として、徐々に数が増え、いくつかの"草サッカーレベルの大会"(東京都シニア大会、古河市マスターズサッカー大会、スーパーエイジサッカー in 刈谷等)に参加するようになり、年間 20試合程度をこなすようになりました。

年と共に参加メンバーの年齢も上がっていくわけで、数年後には60歳以上のメンバーだけで、LB-60と称するようになり、他の60歳以上のチームとの試合に臨むようになりました。

LB-50 をスタートさせて数年経ったころから、東京都シニアサッカー連盟が主催している 50 歳以上のメンバーによるリーグ戦に参加しないかという呼びかけを受けるようになりましたが、リーグ戦で勝ちにこだわるようになると、楽しむサッカーから離れてしまうのではないかとの思いから、参加を見送ってきました。

そうこうしている内に、2008年から60歳以上のリーグ、クラウンリーグというリーグですが、を行うという話が出てきました。これに対しても私の思いは変わらず、チーム登録や選手登録をきちんとして、ある程度メンバーを決めてしまう形

は嫌だと言って動かなかったのです。

ところが 2011 年になって、昭和 23 年 (1948年) 生まれ中心の昭和 47 年卒組から参加したい との声が上がってきたのです。

そこで、47 年卒組の代表者との話し合いを持ち、私が考える問題点として、登録メンバーと非登録メンバーの壁や、能力のない人が試合に出場させてもらえないとか、試合に出てもピッチの上で怒られちゃうとかいうようなことがあると伝え、とにかく勝つことを目的としたリーグへの参加に向けて動く気はないが、誰かが中心になって、これらの問題点が生じないようにやっていこうと見事に解決してくれて、チーム運営の体制もしっかり作って、2012 年からクラウンリーグに「御殿下シニアフットボールクラブ(GSFC)」の名前で参加し始めました。その後2年くらいして、チーム名をLB御殿下シニアと称するようになりました。

#### 各年代への普及

──そこから他の世代にも普及していったのでし ょうか。

**樋口** 一つは2013年から70歳以上のリーグが出来たんです。SFLリーグ、サッカーフォーライフリーグです。5チームでスタートして2018年には11チームまで増えました。

そして、2017年には75歳以上のリーグ戦がスタートしています。このリーグはSFLリーグに参加している各チームの中の75歳以上のメンバーで希望する人を集めて、20人ほどの混成チームを4つ作って戦っています。東大LBの連中も、スタートの時から7人入っていて今年は11人になってます。私はそこに参加する権利があるんだけど、入ってないです。何れにしても、そういったリーグ戦の活動に繋がっていますね。

この間 2014 年には 60 代のリーグのほうもクラウンリーグ 60 に加えて 65 歳以上のメンバーによるクラウンリーグ 65 がスタートしています。

SFL70 に特化して話すと、2013 年は5 チーム中4位、2014 年は6 チーム中最下位。15 年前期は7 チーム中5 位、後期は7 チーム中6位。要するにスタートしてから13、14、15 と低迷したんですよ。それで2016 年でやっと8 チーム中の4位になり、2017 年は8 チーム中の2位になれました。この2位はものすごく口惜しさが残る2位で、トップの武蔵野70とは勝ち点1差、唯一

の負け試合だった WKU (早稲田慶応ユナイテッド) にせめて引き分けなら優勝だったのにと…。まあ 2 位になったため東京都シニア連盟から 11 月に 那須で行われる東日本サッカー大会に派遣される ことになったのは良かったのですけどね。

今僕らの SFL70 で戦っているチームは「LBクラブ」と言っていまして東大を冠していません。実は東大以外の人が入っているからなんです。スタート時に人数が足りなかったのでア式 OB 以外の助っ人が必要だということになった時に、当時の主要メンバーだった山本(修・昭和 36 年卒)さんが湘南ペガサスというチームでプレーしていらしたんですけど、そこから 2 人の助っ人を連れて来て下さって、東大じゃない人が入るので「東大しB」ではなく「LBクラブ」に名称を変えました。ただ、こだわっているのは国立大学出ということです。助っ人は北大と横浜国立大出です。あと1名、2シーズンくらい京都大学 OBの伊藤(庸夫・昭和41年卒)さんが入っていたことがありましたね。

──各年代に広がっていきましたが、樋口さんは かなり忙しくなられたのでは。

**樋口** そこは大学のOBチームの良いところで、いつまでも全ての年代の面倒を見なくてはいけないということではなく、順次下の年次に引き継いでいけるので、2012年には、LB50・60を池森(俊文・昭和51年卒)に任せるようになり、2013年からのSFLリーグ参加チームの面倒見も、この4月から宮路(康利・昭和47年卒)に任せるつもりでいます。

一つ話をしておかなければならないことに藤枝遠征の話があります。実は昭和47年卒の金丸(仁)君がずっと藤枝で病院の院長をしていたんです。彼から声を掛けられて2003年に、50歳代を中心に藤枝に遠征しました。二つの病院チームと試合をしたんですが、皆さん若くてどうしようもなかったんです。若手とシニアでは勝負にならなかったのですけど、藤枝は素晴らしいなと感じた遠征でした。

翌年も病院の若い人たちとの試合だったのですが、その流れで2005年から藤枝FCというチームと試合をするようになりました。ここは静岡県のシニアの中では強くて各年齢層で全国優勝しているチームです。金丸君が藤枝FCのメンバーであり、東大LBと藤枝FCとの交流を図っていこうということで藤枝FCの幹部に話をして、呼んでくれることになったのです。その後2009年に

は東大のホームカミングデイに藤枝 FC を呼んで 御殿下グラウンドで試合をしました。LB の藤枝 遠征とホームカミングデイに藤枝 FC を呼ぶという交流が何年か続きましたが、今はこちらからの遠征だけになっています。この藤枝 FC との交流 も我々のシニアチームの大きな行事ですね。金丸 君は残念ながら 2016 年の 3 月に亡くなってしまったのですが、亡くなる前の 2015 年に LB と藤枝 FC の対抗戦に「金丸仁杯」を提供してくれました。このカップは金丸君と同期の手島君の提案で金丸君が出してくれたものです。

ちなみに 2015 年は藤枝 FC、2016 年は何とか 東大 LB がカップを手にしました。ただ去年はま た完敗してしまいましたが。

──資料にあります「ロイヤルサッカー」についても教えて頂けますでしょうか。

樋口 これは実を言うとLB会の事業として始めたものじゃなくて、僕が個人的に関わったことにLBのメンバーを引き込んじゃったというものなんです。

SOIの主催者であった小野津さんという方、僕 より10歳くらい上なのですが、その方が2006 年に全国の70歳以上に声をかけて国立競技場に 集まってもらって試合をやろうと言い出されたの です。そして小野津さんの下で動いていた僕の中 高の同級生だった日比野からちょっと助けてくれ という話が来たのです。そこで彼らと一緒に動い て、三菱東京 UFJ 銀行(当時)にお願いをして、 協賛ということでプログラムに行名を記させても らい、大会の運営にも広報室やサッカー部の若手 のメンバーを出してくれたのは良かったのですが、 小野津さんは、集まった人でどうやって試合をや るのかを全く考えていなかったので、僕が東と西 に分けて、年齢順に並べて上から16人ずつで区 切ってチームを5つ作って、東西対抗戦をする ということを提案しました。各チームで5人余 った人を半分しか出さないという形ではなくて全 員が3分の2ずつ出ようという選手交代のやり 方を池森君が考えてくれて、そのマネージをする ためにチームに誰かつかなきゃいけないというこ とになったのです。そこで東大 LB の 50 代、60 代の連中に助けてくれよとボランティアで集めて、 毎年各チームに2人ずつ付くようにしました。そ してチームマネージャーの総指揮者を池森君にや ってもらったんです。

そして、2007年の1月に第1回の「ロイヤル (O-70) サッカー東西対抗戦| が国立競技場で行 われたのです。2013年11月の第8回まで国立競技場で続けましたが、オリンピックに向けての工事が始まり、その後は第9回を2015年1月に味の素フィールド西が丘でやったのを最後に幕を閉じました。

最初の2回は、主催:東京都サッカー協会、運営協力:東大LB会という形でやりましたが、3回目からは主催を、ロイヤル(O-70)サッカー東西対抗戦実行委員会(委員長:東大LB会理事長)とし、主管を東大LB会としました。この時から、東大LB会が取り仕切る形となったのです。

――ちなみにこちらの資料の写真(58 頁)、背番 号 71 は樋口さんですか。

**樋口** そうです。毎年ユニホームを作って渡すんですね。僕の「71」はちょうど71歳だったから。そして隣の72番は日比野、その隣の73番は2人の高校の1年先輩です。それぞれの背番号は試合当日の年齢となっています。新聞には岡野さんが出場した時の写真が掲載されたこともありましたよ。また、かつて日本協会の審判委員長をやっておられた浅見(俊雄・昭和31年卒)さんが東大LB会理事長だったこともあって、国際審判員クラスの優秀な審判が何人か笛を吹いてくれました。

#### 今後のシニアサッカーの活動

今後の東大LB会のシニアサッカーへの取り組みについて、一言だけ言いたいことは、大学サッカー部のOB会であるという特徴を生かし、毎年50歳となる卒業年次から、確実にLB-50に参加する人を確保すると共に、チームの取りまとめを行う人をうまく下の年代に引き継いでいってもらいたいということです。

―― 100 周年を迎えた東大ア式蹴球部。こらからの 100 年に期待することや御要望あればお教え下さい。

戦前のように、多くの日本のサッカー界に寄与していくことができる人を期待することは現実的ではないが、どこかで要となる人物には出現してもらいたい。一般的には、ア式の卒業生には、ア式で体験したことが社会に出てから何らかの形で役に立っているのだと感じる時を持ってもらいたい。

一本当に多岐にわたってシニア世代のサッカー活動に尽力されてきたのを実感しました。貴重なお話、本当にありがとうございました。 2018年3月5日、東京・渋谷にて聞き手:上野直彦

## シニアサッカー 50 ~ 70 代の活動 シニアサッカー大会への挑戦と変遷

#### 池森俊文

昭和28年7月7日広島生まれ、52年3月東大理学部数学科卒業。52年4月日本興業銀行に入行後、金融技術開発を担当。平成19年1月みずほ第一フィナンシャルテクノロジー(株)社長。平成25年4月一橋大学大学院特任教授、平成30年3月退任。

#### 昭和 50 年度は主将、 悲願は関東リーグ 1 部復帰!

---現役のころは東大ア式蹴球部にどのように関わられましたか。

池森 ア式蹴球部(以下、サッカー部)を卒業したのは昭和51年の3月、大学を卒業したのが52年の3月です。つまり1年多めに勉強しています(笑)。50年度にはサッカー部の主将をやりました。

当時、関東学生サッカーリーグの2部にいて、毎年残留するのがぎりぎりの状態だったのですが、OBにとっては1部復帰が悲願でした。今でも思い出すのですが、年末のOB・現役合同の納会で、新年度の主将として次年度の目標を「少なくとも6位以上の成績を上げること」と述べたところ、OBから「なぜ2部優勝、1部復帰と言わないのか」とのチェックが入り言い直しを命じられました。予め同期で話し合って2部残留のための最低ライン(6位)を目標としたのですが、OBの熱い気持ちを強く感じた出来事でした。結果として

2部に残留することができて何とか責任を果たしました。

――卒業後はどうされましたか。

池森 銀行に就職しました。学部で数学を専攻して、本当は研究者になりたかったのですが、ちょっとサッカーをやり過ぎてしまいましてね(笑)。銀行では金融技術開発の仕事を担当して、金融技術開発の子会社で社長を6年半ほど務め、その後、縁あって一橋大学で金融工学を教えました。

#### LB 会の世話役で大事なことは二つある

──樋口さんから東大 LB シニアの世話役を引き 継がれた経緯は。

池森 それは樋口さんに目を付けられたからです (笑)。2010年5月の早慶との3大学戦の時だった と記憶していますが、「まあ座れ事件」というの がありまして。試合が始まる前に用意されていた ブルーシートのところで「まあ座れ」と言われて、取り敢えず座ったら「これから少しずつ東大LB



写真1 藤枝市で開催された「第1回藤枝シニア草サッカー大会」に「LB御殿下シニアFC」としてO-60の部に参加し、2013年9月4日(水)に藤枝総合運動公園サッカー場で「茅ヶ崎FCえぼし」と決勝戦を戦って、見事1-0(0-0、1-0)で優勝したときのもの。藤枝商工会議所(主催者)のホームページにも、しばらくの間、掲載されていた。写真中央が筆者。 (池森)



写真2 藤枝大会優勝 2013年9月4日 (藤枝総合運動公園グラウンド)

シニアの世話役を引き継ぎたい。一緒にやってくれ」という要請がありました。以前から樋口さんが一人で奮闘されているのを見ていて、大変だなと思っていたのでその場で了解したという次第です。1年半ぐらい樋口さんと一緒にやって2012年から独立して東大LBシニアの世話役をやることになりました。

――世話役になってから気を付けたことは何だったのですか。

池森 二つあります。一つは樋口さんからの精神である「東大LBとしてできるだけ皆で参加できるような形で活動する」こと。もう一つは公式戦などで東大LBとして戦うならば「勝ちたい」ということです。場合によっては相容れないこの二つの事項を、組成するサッカーの試合を親善試合と強化試合に分けることで対応しようと思いました。

──前者はシニアサッカーの輪を拡げること、生 涯サッカーの理念のような形ですね。

池森 その通りです。樋口さんから引き継いだ理念ですね。歳を取ってからも東大LBとしてサッカーを続けて行こうということです。年間50試合ぐらいの試合をアレンジしてきました。サッカーがしたくなったらいつでも東大LBとしてサッカーができるという環境作りです。

また、それとは別にできたらシニアの活動の中で「強い東大を復活させたい」とも思っています。かつてのように現役が日本一になるのはとても難しい状況にあります。昔と違って今はJリーグが出来たり他大学の強化が進んだりしています。そこに東大現役が入っていくのは大変です。しかし東大LBシニアだったらそれはできるかも知れな

いと思っています。

そう思うようになられたきっかけはどのよう なものだったのでしょうか。

池森 40歳代になった頃に地元の浦和スポーツ クラブという地域密着型クラブでシニアサッカー を始めて「生涯スポーツ」という理念に出会いました。そこでは毎週土曜・日曜に20歳代の若者 から60歳代のシニアが集まって、サッカーの基 礎的な練習を行ったり適当に組み分けをして試合を楽しんだりしていました。

また「強い東大の復活」という目標については、 東京都の代表チームとして 50 歳以上の全国大会 に出場する機会があって、そこで一緒にプレーし たかつての日本代表の皆さんとの差が、学生時代 に感じていた差と較べて小さくなっていると感じ たことによります。うまくやれば、東大LBシニ アとして全国優勝を目指せるのではないかと。

年間 50 試合ぐらい東大 LB シニアの試合をアレンジする中で、10 試合程度は全国大会に行くような強豪チーム・試合運びの上手いチームとの対戦を組んで、彼らとの試合を通じて東大 LB シニアの実力の底上げを図りました。その甲斐があってか、2013 年の東京都シニア選手権大会で優勝し、東京シニア大会では準優勝し、その年から始まった藤枝草サッカー大会で初回優勝を果たして大いに夢が膨らみました(写真 1、2)。この勢いで全国優勝をと思ったのですが、残念ながら長くは続きませんでした。

---長く続かなかった原因は何だったのでしょう か.

池森 東大LBシニアの戦い方として、じっくり

パスをつないできちんと組み立てるサッカーを目指したのですが、東大LBシニアサッカーの二つの理念を同時に追い求めるあまり、その戦い方が全体に浸透しなかったことが一つの原因だと思います。またシニアの世代が若返る局面で、体が動く若手が入ってくると、元気が良くてどんどん前に行ってしまって。そうすると組立てが上手くいかなくなり、また元に逆戻りしてしまったというような経緯がありました。

#### 東日本大震災、そして 7大学サッカー大会の幹事校へ

――世話役として苦労したことはありますか。

池森 そんなに苦労をしたことはないです。ただ一つ大変だったのが、2011年3月12日に開催予定だった7大学サッカー大会でした。ご存知の通り、その前日に東日本大震災が起こって中止になってしまいました。その時会社で社長をやっていたのですが、緊急対策本部長として様々な判断をしたり指示を出したりしなければならない状況下で、帰宅することができず、東大LBシニアに大会中止の連絡ができませんでした。何とか樋口さんに連絡がついて、樋口さんを通じて皆さんに連絡して貰うことができました。

――翌年は開催されたのですか。

**池森** はい。震災の年に幹事校だった東北大学があらためて幹事校をやりました。

――そして 2013 年に東大が 7 大学サッカー大会 の幹事校になった訳ですね。

池森 試合後の懇親会で東北大学から「次の幹事 校」ということで紹介があったのですが、そこで 挨拶に立った東大LB会の某理事から「次回の大 会の幹事はこいつにやらせる」と言われて任命さ れました(笑)。しかしながら、東大LB会として 実施しなければならない7大学サッカー大会の幹 事長を、このような形で任命するのは法人組織と しておかしいとして、理事会で決議してもらうこ と、サポートしてもらうスタッフは私が自分で人 選することを要請しました。判断力を持ってきち んと動いてくれる人が必要でした。それから4つ の組織化を行いました。参加するその他の6大学 幹事の組織化、参加者としての東大内の組織化、 開催までに準備を整える幹事としての東大内の組 織化、そしてグラウンドや懇親会会場、市原市 (市長・体育協会・サッカー連盟など)、タクシー・

弁当などの関連業者の組織化です。彼らには7大学サッカー大会開催という一つの目的に向けて動いてもらわなければなりません。これらのことを約半年かけて行い、最後に準備状況を浅見理事長と宮路事務局長に報告して了解を得て実施にこぎつけました。懐かしい思い出です。

#### 活発化する東大 LB 会の地域活動

──東大 LB としてのサッカーの運営に難しさは あるのでしょうか。

池森 東大LBシニアは50歳を過ぎたころから人 が集まり始めるのですが、例えば毎年夏に開催す る東大・京大定期戦や先ほどの7大学サッカー大 会などでは、40歳代以下のメンバーを集めるの に苦労をしています。現役から若手OB、シニア OBに亘って自然に繋がっていくような東大LBの 流れができればいいなと思っています。卒業して 間もない若手OBは別途にチームを作っていて社 会人リーグなどで活動しているのですが、それが 30歳代後半や40歳代になると集まりにくくなり ます。会社や家庭での役割が大きくなってくる年 代に入ることが原因かと思いますが、サッカーを したくなった時に東大LBに行けばいつでもサッ カーができるような流れができればよいと思いま す。大学のOB組織を中心とした生涯スポーツの 実践の形です。

その他に、私の担当ではないのですが、東大LB会として御殿下少年サッカースクールの運営をやっています。近くの子供たちに毎週日曜日にサッカーを教えています。また、最近では東大ア式蹴球部に女子部ができて、文京LBレディースという文京区の女子サッカーの活動にも関与しているようです。これらはいずれも大学を中心にした地域スポーツ活動の実践の具体例です。

昨年11月に東京大学は指定国立大学法人の指定を受けて、所有する不動産やインフラを様々に活用することが可能になり、そこから上がってくる収益を大学の運営に活かすことができるようになりました。大学がもっと経済的に自立することが求められているということかと思いますが、東大LB会の地域活動についても大学と協議して体制を整えてより充実した形で実施する余地があると思います。

――大学側のメリットもありそうですね。他の大学もシニア活動に熱心なのでしょうか。



写真3 国公立戦(東大vs一橋vs学芸大)2016年10月22日(農学部グラウンド)

池森 他の大学のサッカー部もシニアOBが熱心に活動をしています。早慶との3大学戦、先ほどの7大学サッカー大会、京大との定期戦のほか、一橋大・千葉大などとも定期的に親善試合を行っていますが、東大LB会に倣ってサッカー部OB会を法人化する動きなどが起きています。そのような動きを受けて、都内の国公立大OB戦や首都圏国立大OB戦などを東大LBが主催してやり始めています(写真3)。また、大学サッカー部のOB会のほかにもシニアのサッカーチームが沢山できていて、東京都のシニアサッカー連盟ではO-40、O-50、O-60のリーグに続いて、O-65、O-70のリーグが組織されたところです。

#### 創部 100 周年はア式蹴球部の 今後を考える良い機会

OBの活動が徐々に広がってきているのを感じます。東大ア式蹴球部は創部 100 周年を迎えた訳ですが、これからの 100 年、東大サッカーはどのようにあるべきでしょうか。

池森 東大ア式蹴球部のこの100年を振り返ると、さまざまな形で日本サッカーに貢献をしてきたことが判ります。かつては日本代表選手や監督・コーチ・審判などを多数輩出してきました。しかしこれからの時代はそのような形での貢献は難しいと思います。

東大サッカーが新しい形で日本サッカーに貢献できるとすれば、2016年にJFAと東京大学との間で締結した「連携協定」をベースにした貢献です。具体的には、これまでにやってきたスポーツ医学やスポーツ生理学などに加えて、試合から得られるビッグデータを解析して、チームとして最

適な戦術や課題を描き出すような手法の開発は、いかにも東大らしい貢献になるのではないかと思います。この分野はまだまだやるべきことが多い分野だと考えています。

一その他にはどのような活動が考えられますか。 池森 1993年にJリーグが開始してからもう25年 になりますが、それまで日本サッカーの頂点であった学生サッカーを今後どのように位置付けて、 どのような活動を行っていくのか、あらためてその哲学づくりを行う必要があるのではないかと思っています。また、指定国立大学法人となった東京大学の中で、東大ア式蹴球部や東大LB会の諸活動の位置付けを再定義することが必要だと思います。その中には、東京大学のインフラを活用した地域活動としての御殿下少年サッカースクールや文京LBレディースの活動、生涯スポーツの実践としての東大LBシニアの活動も含まれてきます。

日本サッカーの 100 年を考えると、特にここ 20 年間の動きには目覚ましいものがあると思います。Jリーグの発展、日本代表のワールドカップへの継続参加、ヨーロッパの名門クラブへの日本人選手の進出、子供達のサッカー熱やシニアによる生涯サッカーの実践などです。

東大サッカーは日本サッカー100年の中で、これまで間違いなく様々な形で重要な貢献をしてきた訳ですが、これからの100年に向けて東大サッカーは何をしていくべきなのか、それに合わせて我々OB(東大LB)はどのように対応していくべきなのか、東大ア式蹴球部創部100周年にあたって考え方を整理するよい機会なのではないでしょうか。

2018年3月5日、東京・渋谷にて 聞き手:上野直彦

# 若手 OB の活動の歴史 御殿下クラブに始まり、 Jリーグをのぞむ

吉澤伸明(昭和50年卒) 井田 淳(昭和53年卒) 胡内健一(平成15年卒)

#### 卒業後も本格サッカーを

東大がまだ日本のサッカーのトップに君臨していた戦前は、卒業間もない OB が現役に交じって東大 LB として対外試合で活躍した時代もあった。終戦直後の全日本選手権に優勝したチームも、現役・OB 連合チームである。竹腰重丸さんや竹内悌三さんなどが、現役・OB 両方で日本代表として活躍された(竹内悌三さんは 1936 年ベルリンオリンピックの日本代表で、優勝候補のスウエーデンに勝利し、後に「ベルリンの奇跡」と称された試合

にも出場)。また、1950年代後半にも、現役・OB 混成チーム「東大LB」の下、岡野俊一郎さんや 浅見俊雄さんが日本選手権や天皇杯で活躍された ことが、本誌の岡野さん追悼文(浅見さん筆)に 書かれている。

このような時代は別として、卒業後も東大 OB というチームで本格的にサッカーを続けようという活動は、1963 年の「御殿下クラブ」をもって嚆矢とするようである。「御殿下クラブ」は 1963 年の創立で、前年の関東 2 部リーグ戦で全勝優



チームDiego 2002年 8月18日 東京都社会人リーグ2部 最終戦

表1 チームDiegoから東大LBに引き継がれたチームの2007年以降の戦績

20 1	ムDiegoが 9米人に同じ引き心が 10だり ムい2007 千以件の栽積
2007年	東京都社会人リーグ2部3ブロックで優勝、同1部昇格
2008年	同1部14チーム中13位で2部降格
2009年	同2部2ブロック5位
2010年	同2部2ブロック 13チーム中11位で3部に降格
2011年	同3部8ブロック 11 チーム中5位
2012年	同3部7ブロック 11チーム中2位
2013年	同3部1ブロック 12チーム中1位で2部昇格
2014年	同2部1ブロック 13チーム中1位で1部昇格
2015年	同1部 14チーム中12位

勝しながら、入れ替え戦で負けて一部昇格を果たせなかった悔しさから、引き続き真剣勝負をしたいという面々が設立したクラブ。設立後クラブリーグで連戦連勝し、1967年に始まった東京リーグにおいても勝利を続け、1968年には関東リーグ昇格を果たしたが、その後は、東大は優秀なOBを輩出したものの、企業サッカーが隆盛してきた時代で、卒業生は就職した企業のチームに所属し、「御殿下クラブ」に集まってこなかったために衰退し、残念ながら、何年か経って自然消滅となってしまった。

しかし、当時の須賀監督が高らかに謳った構想は、東大サッカーが目指す一つの方向性を示したものとして、今の若手 OB にも連綿と引き継がれている。『闘魂』2号に中村紀雄先輩がこう書いておられる。

須賀監督のご構想では、(御殿下クラブは)将来はグラウンドとクラブハウスを持ち、YCACのように家族全部が一日を楽しく過ごせるクラ

ブを作ろうとのことである。資金一つを考えても全くの夢であるが、これはこれからの夢である。見果てぬ夢からは今年で醒めて、「日本リーグ加盟チームを頂点に持つ御殿下クラブ」という新しい夢を見始めたいものである。

残念ながら「御殿下クラブ」は、上記の通り自然消滅してしまったが、卒業後も本格サッカーをやりたいという若手 OBの動きは 1994 年の「チーム Diego」設立に結びついた。同チームは1997 年には東京都社会人リーグ 2 部に上がり、2007 年度には1部昇格を果たした。以降、戦績が振るわず、3 部リーグまで降格したが、2013年に、東大サッカー部公式 OB チームとして活動する為、「東大 LB」と名を改めた(東大 LB の名称は、1958 年の全日本選手権 3 位のチーム以来 55 年振りの復活となった)。更に 2015 年には、本格的に Jリーグを目指す、東京ユナイテッドの活動に結びついていくのである。

なお、チーム Diego から東大 LB に引き継がれ



2013年12月22日に行われた 東京カップ戦で優勝 (茨木県/つくばアカデミーセンター)



同上のスターティングメンバー

たチームの 2007 年以降の戦績は表 1 の通りである。

#### 当時の胡内監督のコメント:

現役時代は、大学サッカーでサッカー人生は終わる、そう思っていた選手が多いと思います。しかし大学4年間など人生のほんの一瞬にすぎません。また我々の先輩には、卒業後何十年もサッカーを続けてきた方がたくさんいらっしゃいます。若いLBの皆さんには、時間や体が許す限り、いつまでもサッカーができる喜びを感じてもらいたいと思っています。

今年は、昨年度積み上げたものと今年度取り入れたものがうまく融合し、好成績を残すことができました。勝利こそがすべてのチームではないですが、いつまでも上を目指すチームとして、来年度も戦っていきたいと思います。「各人の貢献のもとに成り立ち、信頼関係によって力を集結させる。」仕事や学業、その他の事情により、入れ替わりの激しい状況ですが、そんなチームを目指しています。

#### 当時の福田代表のコメント:

LB復活から2年。2年連続昇格という最高の結果を残すことができました。このチームを支えてくれた、中島、佐藤、大沢、川瀬には、この場を借りて感謝の意を表したいと思います。LB復活の理由は二つあります。まず、卒業後もサッカーを続けて欲しいという思いです。大学卒業後の長い人生においてサッカーに真剣に向き合うことで得られる大きな財産があると信じています。その場を後輩たちに用意したいと思います。二つ目は、東大ア式蹴球部現役の強



2014年東京都社会人リーグ2部(1 ブロック)の優勝メンバー(東京都社会人サッカーリーグ 1部昇格時)

化です。言うまでもなく、東大ア式蹴球部は OBの有形無形の支援によって成り立っていま す。卒業すると自然にグランドから足が遠のき、 自分が知っている選手がいなくなると、まず足 を運ばなくなります。物理的な距離が心理的な 距離を生むのは人間の性。私自身もそうでした。 ア式への思い入れを薄れさせないために毎週毎 週グランドに足を運び現役と接触する必要があ ると思います。これからも途切れることなく皆 でタスキをつないでいきたいと思います。

#### 活動は価値観やレベルに応じて多様化

2015年から、新たな動きが始まる。即ち、文 京区をホームタウンとする初めてのJリーグ加盟 を目指すチームの創設である。強い OB チームの 復活を目指す慶應義塾大学ソッカー部 OB チーム 「慶應 BRB」と思惑が一致し、慶應 BRB および 東大LBの有志が、2015年2月に「一般社団法 人LB-BRB東京 | を設立し、活動を開始した。 慶應 BRB と東大 LB を主体としてすでに活動し ていた「慶應BRB」を引き継ぎ、「LB-BRB TOKYO| として東京都社会人リーグ1部に参戦 し、関東社会人リーグに昇格を果たした。翌 2016年には、東京都社会人リーグ1部に所属し ていた「東大LB」を引き継ぐ形で「LB-BRB Bunkyo| が誕生した。現在では、それぞれ「東 京ユナイテッド FC |、「東京ユナイテッド FC プ ラス| と名称を改め、関東社会人リーグ1部、東 京都社会人リーグ1部で活動中である。また、東 京都女子サッカーリーグに所属する「文京 LB レ ディース」(現役東大生と文京区選抜の混合チーム) も傘下に置いている。(LB-BRB東京、東京ユナイ テッドFC、文京レディースの創設経緯については、



2015年に東京社会人リーグ1部に昇格 4月5日対セルベ戦の スタメン

本誌 91 頁に、創設者の一人である福田雅氏による詳細記述があるので参照願いたい。)

一方の東大LBにおいては、東京都社会人サッカーリーグにおいて再スタートし、現在は、同3部に「東大LB」、同4部に「東大LBセカンド」の名称で所属している。現在の東大LBおよび東大LBセカンドは、ア式(現役)の3軍、スタッフ、若手LBの混成チームとして活動している。この動きを、創設時の東大LBセカンドの責任者張さんが以下のように説明している。

東大LBセカンドとは、東大ア式蹴球部の勝利という目的に対して、自分がトップチームでプレーする以外の方法でアプローチしようという集団です。サッカーでは、試合に直接的に関わる事の出来る人数が限られています。それでは、試合に直接的に関われない人がわざわざ東大でサッカー部に所属する意味とは何なのか。この問いに対して、正面から向き合った結果出来たチームが東大LBセカンドです。その問い

に対する答え方は人それぞれです。選手を諦めて、運営、データ、コーチ、トレーナーという道を選ぶ人もいれば、それでも上を目指そうとして、四苦八苦する人もいます。それが成果に繋がるのかどうかは分かりません。ただ、その姿勢によって周囲の人に伝えられる事があります。試合に出られなくても、勝ちたい、もしくは勝たせたい気持ちでは他のカテゴリーにも引けを取らないでしょう。そういった姿勢や気持ち、情熱によって、このチームの一人一人を突き動かすこと、これが東大LBセカンドの存在意義です。

こうやってみてくると、若手 OB の活動は、それぞれの OB がサッカーに求める価値観が多様化しており、求めるレベルに応じて活動が分散しているが、御殿下クラブ創設時の「J リーグチームを頂点としたクラブ作り」や「生涯サッカー」という構想が、東大ア式蹴球部の中に脈々と引き継がれているような気がする。



2015年東京都社会人リーグ1部 第5節 対青梅FC (青梅FCエスコートジュニアと一緒に入場)



2016年東京都社会人リーグ3部(若手チーム) 最終戦 (富士通厚木総合G)

#### 次の 100 年に向けた新たな動き2

# 国際交流

ア式蹴球部の国際交流は唐突な感じで始まった。

2014年某日、京大サッカー部 OB の伊藤さんから、

「今年の秋にオックスフォード大学のサッカー部が日本に遠征をする予定である。東大と 試合をしたいと言っているのだが、どうだろうか」

という打診があった。伊藤さんの話によると、彼らは、毎年、海外遠征をしていて、その国の有力な大学のチームと交流をしている、とのこと。

断る理由は全くない。オックスフォード大学との親善試合はこういう思いもよらぬ形で 実現した。

そして、この貴重な体験を踏まえて、2015年には、タイのチュラロンコン大学との交流を目的に、バンコクへと旅立った。創部 100年の今年(2018年)も、再びタイ遠征を目論んでいるところである。 (武田)

## オックスフォード大との国際親善試合(2014年12月)

(『LB 会報 No.14』 2015 年 5 月号より転載)

試合、レセプション、ワークショップの他に彼らをホームステイさせる等まさに異国の友と親しく交流した貴重な機会となった。初めての国際交流であり、得るものがたくさんあった。利重監督日く「我々の理想としては、ア式ファミリーの持つ力を極大化させていくこと。その為に現役が果たす役割は、やはり勝てる集団となることであろう。一方で、12月のオックスフォード大との交流戦を通じて、新鮮な気付きを得たことも事実。オックスフォード大の部員は週3日の練習で公式戦も多くないが、毎年ヨーロッパに遠征し、3年に1回は地球規模の遠征をする。どちらが将来の

国を担う学生を輩出する大学のサッカー部として、よりふさわしい活動なのか、と考えた時に正直彼らのやり方もありだなと感じた。プロを目指す人も多くいる、本格的な大学サッカーのフオーマットの中で、東大がサッカーをするのは、外から見ればだいぶ無理をしているようにも見えるだろう。どちらが優れているという話ではないが、こんなモデルもあるのだなとは思った。ただ東大サッカー部として関東昇格を果たす事で、その過程の中に意義を見出し、大きな達成感を得る事ができるのは確か。今後もア式の理想像に関しては柔軟に考えていきたい。|



御殿下グランドで両チーム集合



両キャプテンのエール交換



ゴール前での緊迫感あふれるヘディング争い



山上会館でのレセプション





ワークショップは利重監督のもと、両大学の学生が、自分に とってのサッカーとは?学業との両立は?等を語り合い、貴 重な交流の機会になった。

### タイ遠征レポート(2015年11月)

坂本晋吾 (平成28年卒)

空港のゲートを開けた瞬間、体中にムッと湿った熱気がまとわりついた。その熱気に混ざってどこからか漂ってくるのは、強烈なスパイスの香りと、様々な人種が混ざり合った独特の雰囲気。日本の11月とは大違いだ。日本では銀杏が美しいその葉を赤らめ、日々夏の終わりを実感する頃合いであるが、ここでは真夏の御殿下グラウンド以上の暑苦しさを感じる。そう、我々がはるばるやってきたのは、タイ王国の首都バンコクである。

ア式蹴球部は10月に東京都大学サッカーリーグ2部の全18試合を戦い抜き、無事1部昇格を決めた。11月と言えば、多くの部員がサッカー漬けの日々から解放され、卒論執筆・アルバイト・旅行等、「非日常的」な大学生的日常生活へと戻っていた時期だった。夏あたりから話が挙り始めていたタイ遠征が、遂に決定した。かく言う私もリーグ戦期間にサボっていた卒論執筆に追われ、直前までその存在をリアルなものとして意識していなかった。それでもいざ行くとなるとそれはもうワクワクした。ただ旅行に行くのではない。今回は遠征である。オックスフォード大学・ソウル大学との親善試合に続く、国際交流試合に行くのだ。相手は、チュラロンコン大学。読者の

皆様、チュラロンコンという名前はどこかで聞いたことがないだろうか? チュラロンコンは、タイ近代化の父と言われるラーマ5世の通り名であり、ラーマ5世とは、かの有名なミュージカル『王様と私』の王様ラーマ4世の息子にあたる人物である。奴隷制の廃止・学校教育制度の導入など現在のタイの礎を築いた人物。しかし、何と言ってもサッカー以外に教養のない私たちは、タイの街中にあるしょぼめの大学だろうとタカをくくっていた。ノリ的には引退後の修学旅行。記念的な卒業旅行の1つだと考えていた輩も少なくなかったはずだ。実際に試合がはじまるまでは。

無事1人も欠けることなく、バンコクで2日目の朝を迎えた我々は午前中に、三井物産の方々に、事業所の案内と、タイ経済情勢についての説明をして頂いた。タイ三井物産は、雑多な印象のバンコクの中でも、ひと際綺麗な建物に事業所を構え、綺麗なタイのお姉さん(?)を受付に配置していた。一同は、「これが日本の商社の財力か…」と舌を巻いた。経済情勢に関するご説明の中で幾つか面白い話があった。

タイの警察に関する話はその1つである。タイはご存知の通り、成長著しい東南アジアのなか



三井物産タイ事務所の受付にて

三列目左から;伊藤 (H28)、八田 (H27)、鎌田 (H28)、藤岡 (H28)、平野 (H28)

二列目左から;利重監督、佐藤 (H28)、安達 (H28)、中西 (H28)、坂本 (H28)、辻 (H28)、金瀬 (H28)

前列左から;近松(H28)、荒井(H28)、松田裕(H27)、武田理事長、松田健(H28)、奥野(H27)

チュラロンコン大学の 立派なスタジアムにて



でも、ひと際その経済成長力がとびぬけている国 である。多くの日系自動車メーカーが進出し、一 大製造拠点としている。街中を走る自動車のプレ ートをよく見れば、スズキ・ホンダ・トヨタとい ったロゴが目に入るのは有名な話だ。そんな自動 車大国のタイでは、当然のことながら交通事故が 頻繁に起きる。一度あの交通量を見れば納得だ。 毎日あれで事故が起きないはずがない。タイでは、 事故が起きた際、加害者=警察にお金を払わなか った側、という恐ろしい暗黙のルールがあるよう だ。事故が起き、警察がやってくると、ぶつけた 側が当たり前のように警察に賄賂を握らせ、解決 してしまうのである。つまり、治安維持が経済成 長に追いついていないのだ。平和な日本に慣れて しまっている我々には新鮮な話だった。他にも、 国王への不敬に対す罰が非常に重いことや、男性 より女性が一生懸命働く、など日ごろ生活してい ないと知ることができないような話も聞かせて頂 いた。

三井物産の事業所を後にした我々は次にチュラロンコン大学へと向かった。遠征のメインイベントである国際 A(?)マッチを戦うためである。バスに揺られること 10 分程度だろうか、突如視界に飛び込んできたのはスタジアムである。単なるグラウンドではない。れっきとしたスタジアムである。なんでもチュラロンコン大学は一部法人クラブ化しており、プロリーグに参戦しているカテゴリーもあるようだ。道理で立派なわけだ。観客もチラホラいる中、タイの女の子に良いところを見せてやろうという不誠実な理由からやる気を



見せていた近松(経済4·DF)は、試合開始直後 から驚きを隠せなかった。上手いのだ、タイの大 学生がとても。足元の技術にそれなりに自信のあ る私も上手いと感じた。ガタイが大きいが少し動 きの遅いソウル大とは異なり、俊敏でパス回しも ドリブルも早い。試合中はなぜか、懐かしいよう な感覚を覚えていたのだが、後日その理由がわか った。日本のサッカーによく似ているのだ。タイ のサッカーが日本をモデルの1つとして目指し て発展してきたからだった。日本のテクニック重 視のサッカーに似ている。早いパス回しや密集エ リアを打開するドリブルテクニックといった良い 面だけでなく、アタッキングエリアに侵入しても なかなかシュートを打ってこないあたりに、とて も似たところを感じた。純粋に東南アジアのサッ カーのレベルが、大学でもここまで高いのかとビ ックリすると同時に、日本がアジアの中では優位 にあるという根拠のない自信は、思っているより も脆いものかもしれないと感じた。それはサッカ ーだけではない。経済においても同じことが言え る。日本が製造大国としてアジア経済を引っ張っ

てきたのは事実だが、変わりゆく世界に遅れていてはいずれキャッチアップされることは間違いない(あるいは、何を変えないのか、を考えることも必要だ)。自分たちのスタイルを深く考え、長い時間かけて醸成していく。そんなことがサッカーでも経済・政治・文化でも求められている。私はそんなことを試合中に考え…る余裕はなかったので後日考えた。結果は1-2で東大が敗れた。

試合後はレセプションパーティーを開催していただいた。遠征前に「これからは君たちがスポーツや経済を通して日本とタイを結ぶ懸け橋になるんだぞ」と武田会長に檄を飛ばされ、興奮気味だった我々は、不慣れにもチュラロンコン大生との積極的なコミュニケーションを試みた(※こうした交流はア式選手が非常に苦手とする分野でございます)。しかし驚くべきことに、まさかとは思ったがチュラロンコン大生の方がシャイだったのだ。話しかけても仲間内でウジウジしており、なかなか返事が返ってこない。その上、英語の理解にやや難ありだった。こうなると、パーティー冒頭の利重監督のウィットに富んだ挨拶もまるで理解できていなかったのではないか、と不安になりつつ、その日を終えた選手一同であった。

翌日はUCCのコイル工場、タイ新日鉄住金の 見学をさせて頂いた。コイル工場はバンコクから バスで1時間強離れた田園地帯に位置していた。 そこにあったのは、我々が思い描く『工場』その ものだった。広い土地の中に、大きな工場・運動 用の広場・開放的な食堂が整備されていた。少し 曖昧な記憶だが、女性が多かった気もする。やは りタイは女性が支えている国なのだろうか、興味 深い。工場の方には現地での生産体制やタイの情 勢などをご説明頂き、更には工場内で食事までご 馳走していただいた。これがとても美味しかった。 部員は余りのおいしさにトムヤムクンを何度もお かわりしていたほどだ。夜には新日鉄住金の方々 にタイおすすめのレストランで夕食をご馳走して いただき、楽しい時間を過ごすことが出来た。

改めて今回のタイ遠征に関わり、様々な手配・調整をしてくださった方々にお礼を申し上げたい。 学生を卒業し、社会人として働いていると、こうした遠征の手配や調整にどれほど手間がかかるか身に染みてわかる。本当に多くの方が関わっている。自分は特に現役の頃、それが分かっていなかった。反省である。強いチームになるためには、サッカーの技術はもちろん必要だ。しかしそれだけではサッカーの上手い学生止まりだ。日本・外国の政治・経済・文化など、サッカー以外のこともしっかり勉強し、サッカーをできる環境を準備してくれる人間に感謝の念を持つ。それが最終的に強さにつながる、と私は近年特に強く思う。それを知る非常にいい機会なので、ぜひこれからも外国遠征を続けられるといいと思った。



東大の遠征メンバー16人。笑顔が見える。

### オックスフォード大学へのサッカー?留学

角田貴大(平成27年卒)

東大ア式を引退してから2年、私はOxford大学大学院に進学した。大半の人が私を研究者の卵として英国に送り出す中、林健太郎コーチは渡英直前の私にこう囁いた。「お前、イギリスサッカーの方が向いてるんじゃん?」

高い志で臨んだ博士留学はかくしてサッカー留 学に変わってしまった。

Oxford University Association Football Club (OUAFC) の門戸は広い。OUAFC は Oxford 大学体育会サッカー部にあたるが、学部生だけでなく博士課程を含む全ての大学院生全員を受け入れる。しかし、70人ほどの部員のうち国籍は殆どがイギリス人で、外国人は全員合わせても1桁しかいない。欧州クラブユース出身のドイツ人やスペイン人が1軍にすぐさま召集される中、クラブ唯一のアジア人はセレクションの結果4軍で2年ぶりの復帰を果たした。

OUAFC は約70人の部員から成る Oxford 大学 体育会サッカー部にあたるが、多くの学生が OUAFC に惹きつけられるのはその伝統と豊富な 海外遠征によるだろう。サッカーが歴史上に登場 した当初から存続する OUAFC は、Cambridge 大学の CUAFC とともに英国サッカー協会 (FA) に議席を持つ数少ない大学サッカー組織である。 両校による伝統の一戦 Varsity Match は 134 年存 続する世界最古のダービーマッチであり、FA の 公認試合として運営される。さらに、Oxford と Cambridge ではボート、ラグビー、サッカーのよ うな伝統的なスポーツの Varsity Match 出場選手 のなかで、その他のスポーツでも秀でた成績を収 めた学生に対して、Blue と呼ばれる文武両道の 称号が与えられる。Varsity Match に出場するこ とは最大の名誉である一方、両校間の関係は評判 通り劣悪で、ピッチ内はともかくSNSや試合後 のナイトクラブでは部員同士の小競り合いが度々 発生する。すれ違っても目を合わさず、京大戦の ような和やかな打ち上げなど存在しない。

過去四年間 Varsity Match で負けを知らない OUAFC にとって、近年の海外遠征は膨れ上がっ

た自尊心を諌める良い機会となっている。2014 年に日本に訪れたように、OUAFC では海外遠征 が毎年企画される。1軍から3軍までそれぞれ 別々の場所に遠征に行くが、やはり1軍の遠征 が最も豪華だ。今年参加したアイビーリーグツア ーでは、Harvard、Yale、Princeton、Columbia な どのトップ校との試合や交流、ホームステイを経 験した。サッカーの水準は、アメリカの大学サッ カーの方が高く、ボールスピードやフィジカル面 での差は関東リーグのチームとの試合を想起させ た。多くの選手は MLS や欧州のユースチーム出 身であり、アイビーリーグであっても、入学以前 にスカウトされて学力基準も甘く見られるらしい。 プロチームのオファーを蹴って大学に来る選手や プロを目指して再起を図る選手などもいた。スポ ーツ施設や選手へのサポート体制なども目を見張 るものがあり、チームを運営するために雇われた スタッフの数から見てもプロチームさながらであ った。

また、OUAFCは2年前から毎年中国で開催さ れる World Elite University Football Tournament (WEUFT) にも参加している。嫌味ったらしい名 前の本大会はその名の通り、米英中独加豪蘭の世 界大学ランキング上位に位置する 12 校が中国で 一堂に会してボールを蹴り合う。大会期間中には 各大学によるシンポジウムが開かれ、強いチーム を作るためにどのようなリクルーティングやサポ ートシステムを用意しているか、学業とサッカー をどのように両立しているか紹介される。2050 年に W 杯優勝を目指す習近平体制下の中国では、 海外のサッカー育成論や教育機関との融合を学び 取ろうとする中国人たちの鼻息が荒い。国が違え ば大学生のサッカーに対する価値観や組織の制度 も異なり、例えば、カナダの University of British Columbia ではサッカーをすることで奨学金を得 ている選手が多数いた。また、ドイツにはまとま った大学サッカーリーグがないらしく、ドイツか ら来た University of Tubingen はセミプロチーム で活動している個々人を集めて大学代表チームを

編成していた。サッカーのレベルもこの2チームが圧倒的で、Oxford と Cambridge は準決勝で敗れた。三位決定戦が Oxford の勝利に終わったことは言うまでもないが、いつもは憎み合う両校が国際舞台で支え合う場面をいくつか見られたことは嬉しかった。例えば、ドイツの University of Tubingen と準決勝で戦う Cambridge に対してOxford 側から国内では許されないような熱い市援が送られ、閉会セレモニーで出し物に困っていた Oxford を一緒に歌を歌おうと助け舟を出したのは Cambridge だった。圧倒的な実力差と広い世界を前に、下らない内輪揉めを忘れて同胞として団結することに目覚めた瞬間に立ち会えたのは貴重な経験だった。

OUAFC はサッカーの戦術やレベル、部員の学 業とスポーツへの姿勢、学生主体の運営体制など の点において、これまでサッカーを通じて国際交 流をしてきた8ヶ国19チームの中で東大ア式に 一番近いと思った。両チームとも天皇杯やFA Cup優勝など、その国のサッカー創成期に栄光 を味わったが、サッカーが専門化しスポーツ大学 が台頭することによって衰退を余儀なくされた状 況は変わらない。文武両道を目指す大学生による サッカーにどのような価値があるのか、30年前 に Varsity Match を Wembley Stadium から追わ れてから OUAFC と CUAFC が考え続けてきた ことだろうが、東大ア式同様に未だ答えを出せて いない。東大ア式と OUAFC に違いがあるとす れば、参考に出来るお手本の数と幅広さではない かと思う。東大ア式にとっては日本国内の他大学 を参考することも大事だが、自分達の置かれてい る状況に近い他国のエリート大学生がどうサッカ ーに向き合っているのかを学ぶことはチームの方

向性について幅広い視野を持たせてくれるととも に各部員の将来にも役立つだろう。この数年で動 きつつある東大ア式の国際交流がより活発になる ことを願ってやまない。

私個人として OUAFC に意味を見出すとすれ ば、それは異国での組織内競争の経験とそれに打 ち勝つ自信を得たことだろう。1軍に上がるまで 1年もかかったが、日本人初の Blue としてサッ カーの Varsity Match でフル出場を果たすまで、 言語的、文化的な理解度で現地人に劣る自分が監 督や周りの選手の信頼をどう勝ち取るかを考える 場面に多く恵まれた。アピールの仕方や競争にお ける禁じ手などは文化の違いによって異なる作法 があって、イギリスにおける作法の幾らかはサッ カー部で試行錯誤することが出来たし、他の選手 が使ってくる手を間近で学びとることも出来た。 Varsity Match と Blue の名誉は選手間の競争を激 しくすることと Oxford 大生としてサッカーをす る意義を与えるのに十分な役割を果たしていたと 思う。趣味といえども、自分の最も得意とするこ とで競争に身を投じることは自分の本業に近いレ ベルで競争の作法について学ぶ機会を与えてくれ る点で価値があり、その国の社会に馴染む格好の 学習材料にもなるとも思った。

これらの貴重な機会とこの環境を生き抜く力は、 東大ア式での経験を抜きには得られなかったと改 めて感じる。ア式時代に支えて頂いた監督、コー チ、チームメイト、スタッフ、図らずも OUAFC に導いてくれた林コーチ、OUAFC Japan Tour 2014 の企画に携わったメンバー、私の無謀な現 役続行を暖かく見守ってくれた全ての人にこの場 を借りて感謝を申し上げたい。



CambridgeとのFootball Varsity Match 2018。 Oxford の勝利、3-0。前列右から3人目が筆者。

## ソウル大学との交流戦

元学連幹事長 張 暎洙

韓国・ソウル大学校(以下ソウル大)との交流 戦が行われたのは、「2015 World University Football Cup」「注 出場のためのアモイ遠征出発 を 3 日後に控えた 2015 年 8 月 4 日(火)のこと であった。ソウル大サッカー部の日本遠征は元来、 筑波大学蹴球部との定期戦のみを目的としたもの であったが、この機会に是非自分たちも混ぜて頂 こうと東大ア式側からオファーを出したのが交流 戦開催のきっかけである。当初は筑波開催の三つ 巴交流戦を視野に交渉を進めていたものの、ソウ ル大の「東大のグラウンドで試合を」という何と も嬉しい要望から、我々のホーム御殿下で試合が 開催される運びとなった。

キックオフ予定時間の午前 9 時、御殿下にソウル大サッカー部の姿が見当たらない。彼らを乗せたバスが渋滞に陥っていたのだ。ようやく到着したバスから降りてくるユニフォーム姿のソウル大選手たち。スパイクまで履いている選手もおり、彼らの慌て具合も明らかである。決して十分とは言えないウォームアップ時間を提供し、キックオフは小一時間遅れることに。こうしてハプニングに見舞われた当日の試合前であった。

しかし何はともあれ貴重な貴重な国際試合。試合前の整列時には集合写真撮影とともに、この日のために準備したペナント・記念品交換が行われた。試合は、ア式は体格で勝るソウル大に苦戦。先制を許してしまう。しかし、なんとかリズムを掴んだア式は多田(2年)と坂本(4年)のゴールで逆転を果たす。しかし後半終盤、ソウル大の立て続けの猛攻。ソウル大ベンチから激しいゲキが飛び、ソウル大が勢いを増す。それでもなんとか勝ちきれるかと思われた後半ロスタイム、セットプレーからソウル大に押し込まれ、同点に。これがラストプレーとなり試合終了。2-2の引き分けに終わった。

午後には筑波大の引率学生と東大ア式の部員有 志でソウル大の東京観光に同行した。私は上野、 浅草、そしてスカイツリーを廻った。観光のみな らず、カフェでの休憩や食事の際、彼らから色々 な話を聞くことができた。特に驚いたこととしては、彼らが皆体育学部の学生であるということ、運動部があってサッカーができる高校はごく限られているということ、部員に卒業後スウェーデンのプロリーグでサッカーを続ける選手がいるということ、などがあった。

日本ではしばしばソウル大に対し、「韓国の東 大」というメタファーが用いられる。これは韓国 でも同様で、「日本のソウル大」と言えば「東大| という言葉が持つ独特のニュアンスは大方伝わる ものである。この背景にあるのは、類似した受験 戦争及び大学間の序列の存在だろう。そして「東 大生|「ソウル大生」というラベルもまた、それ ぞれの国でよく似たニュアンスをもって受け取ら れている。時に肯定的に、時に否定的に……。東 大生自身、ソウル大生自身が互いを隣国のカウン ターパートとして認識できるのも、大きくこのお 陰ではないだろうか。そして何よりこの関係性は、 交流戦を戦った両サッカー部の間にも通ずるだろ う。両者の間には、「東大サッカー部」「ソウル大 サッカー部 という自らの性質を相手にも投射す るような眼差しがある。それはお互いに対するリ スペクトでもありえるし、一歩間違えれば侮りと 油断にもなりうる。しかしひとたび試合が始まれ ば、両者のプライドはぶつかり合い、最後の瞬間 まで気の抜けない好ゲームが繰り広げられた。真 夏の御殿下に相交わった隣の国の似た者同士、白 熱しない理由などなかったのだ。

[注] 「2015 World University Football Cup」は中国アモイにて2015年8月8日から16日に開催が予定されていた世界12カ国の大学サッカーチームによる国際大会。開催地を直撃した台風の影響でスタジアムが使用できなくなり、出発予定日前日に大会の中止が知らされた。渡航費、宿泊費は全額主催者負担という条件であったため金銭面での損失はなかったが、突然の変更にこの夏の東大ア式は大きな混乱を強いられた。東大ア式からは25名の部員が遠征に参加予定だった。

# 女子部創設

2013年の春に、利重副理事長(当時ア式蹴球部総監督)から、東大の女子がサッカー部を創設したい、ア式蹴球部の中に女子部という形で構えることはできないか…という話があった。それは、同好会のことじゃないのか? …そもそも東大生でサッカーチームを編成することができるのか? …現役はどう受け止めているんだ? …正直、運動会の正式な組織として女子サッカー部が成り立つとは、俄かには信じ難かった。

利重総監督(当時)の言によれば、彼女らは、運動会の正式な活動としてやりたい、そのためにはア式蹴球部の一員として位置付けられることが必須なので、是非お願いしたい、とのこと。そこで、浅見理事長(当時)とも相談し、ともかく彼女らと会って話を聞こう…となり、某日、東大正門脇にあるスターバックスで面会することとなった。

利重総監督(当時)と共に現れたのは、成瀬、大多和の二人。二人は、東大女子のサッカーチームをつくり、関東女子大学リーグに参戦し、東大女子の新しいコミュニティをつくりたい…緊張しながらも真剣な眼差しでこちらを見つめながら熱弁を奮う。その熱意に打たれない者はいないだろう。しかしながら、メンバーは、というと総勢4~5名。それじゃあ大学リーグ参戦はできないじゃないか…いや、来年の新入生をリクルートします、頑張ります、大丈夫です、絶対にやります。…こんなやり取りが交わされて彼女らとの初顔合わせは終わった。ともかく、そのやる気に満ちた情熱に気おされる形であった。

浅見理事長(当時)に報告した。浅見さんは、「いいじゃないか、そこまで本気なら、LB会としてもしっかり取り組んで行こう」と。かくして、LB会理事会にも事の次第が報告され、大学内の手続きを経て、晴れてア式蹴球部女子部の誕生となった。

初年度、2年目と苦労しながらも、知恵を絞り、周囲の協力を得ながらなんとか組織として持ちこたえ、今年(2018年)は5年目を迎えた。そして、ようやく自前での東大女子チームが編成できるようになった。LB 会も 2017年のシーズンから女子部のユニフォームをプレゼントして応援を目に見える形で示すことができた。これにより、名実ともに自立したチームとして内外にアピールできたともいえる。

また、女子部を中心として誕生した「文京 LB レディース」は、いまや、東大と地元文京区とを繋ぐ貴重な架け橋として、その活動が定着している。文京 LB レディースのメンバーは、13歳から60歳までの総勢60名の会員で成り立っている。(2018年現在)中学生からママさんまで、女性たちが世代を超えて、サッカーボールを介して見事なコミュニティを形成している。そして、その運営を東大女子が担っているのである。

サッカーというスポーツを楽しみ、そして、それを介して世代を超えた仲間が、さらに大きなコミュニティに発展していく…この先、また何か別の形に進化していくのであろうか…全体をとりまとめ、大枠の指導をしているのは福田理事 (現監督)である。

2018年現在、女子部は、関東女子大学リーグで、そして文京 LB レディースは、東京都リーグで活動している。この両者が一体となって大学の部活動の枠を超えて、地域を代表するクラブ(コミュニティ)として更に発展していくと思われる。将来が大いに楽しみである。 (武田)

### 創部 ----「東大 | × 「女子サッカー | の可能性

大多和 愛(創部メンバー、2015シーズン主将)

#### 「本気じゃないなら、やめてくれ」

2013年11月、大学1年生だった私は東京大学 運動会ア式蹴球部のスタッフを辞めた。奇しくも 同じ日、「東大で女子サッカー部作りませんか?」 という一通のメールが届いた。そして2018年3 月現在、東京大学運動会ア式蹴球部"女子"は5 シーズン目を迎えようとしている。

東大女子部の創部について語ろうとすると、このメールの差出人の人物像の話になってしまうのを許していただきたい。

成瀬明一「東大に運動会の女子サッカー部を作って、リーグ戦に出よう!」という素っ頓狂な考えの持ち主であった。そんなことをやっている間に自分が大学卒業してしまうのでは?とか普通考えそうであるが、というか実際まず私もそれを懸念したが、彼女は違った。通常運動会の部活を作るには部員とある程度の活動実績が必要ということだが、彼女の前では常識は役に立たない。

とにかく私がそれは常識的にはちょっと、とか、 急ぎすぎなんじゃないか、とか言っている間にど こから見つけてきたのかもわからない協力者を見 つけてきていた。道が合ってるのか確かめてない ようにしか見えないながらも、それでも前に進も うとしていた。 現私しまとこ。スで走て、気を、生敬福っろビンチい前のでルフをたたからのあの口御だち?

本気じゃない んだったらやめ



筆者(2016年6月)

てくれ、と言われたのが最初にお話しした時である。当時の私には全く腹が括れていない状態だったが、ここで引いたらどうにもならないと思って本気です!と言って、後々とても怯えた。その後も何度か新丸ビルにお邪魔することがあったが、今でも最初の待ち合わせ場所だったエントランスの赤いソファを見ると心臓が勝手に早くなる。

#### 部員確保は高度な情報戦

かくして、「東京大学運動会ア式蹴球部」の



公式戦初勝利(2014年9月20日、成城大学戦)

「女子部」として組織を立ち上げることで、言い出してから4カ月で運動会として設立、関東大学女子サッカーリーグの参戦をもくろむこととなったのであった。次のハードルはとにもかくにも「部員」である。大学内の経験者はかき集めて4人、大学院生を1人、部活には入りたくないが試合には出てもいいという人が3人、ホッケー部からの助っ人が2人、という状況であった。

そんな 2014 年の 3 月、2 人の 1 期生との出会 いがあった。東京大学の女子の勧誘は3000人の うち600人に満たない少ないパイを合格発表の3 月10日から4月末まであの手この手で奪い合う という非常に激しい戦いであり、高度な情報戦だ。 そんな中、できたばかりの私たちが通用するはず もなく、苦戦を強いられた。「広島の高校から、 ずっとサッカーをやっていた女の子が文科一類に 来るらしい」という精度のわからない情報をもと に彼女を捜索したが出会えず意気消沈。偶然彼女 が私の語学クラスの後輩ということが判明し、そ の足で着替えも持たずオリ合宿の行われている千 葉県へ終電で向かい彼女を口説いた。のちに10 番としてゴールを量産した大坪である。もう1人 は「体育のサッカーが面白かった」というのがき っかけで入部を決めてくれた周。彼女はのちに女 子部史上ファーストゴールを挙げる。この2人 が経験者1人、初心者1人としてその後入部し

てきた2期生以降の良い手本となり、先日無事 に卒部した。

#### 見えない力に押された 1 年日

90分のサッカーの試合を9週間で9試合こな すにはまだ人が足りない。見かねた福田監督が、 新たな縁を提案してくださった。監督と親交の深 い岩崎さんが監督を務める慶應義塾大学体育会ソ ッカー部女子との提携、である。こちらとしても 受け入れるにあたって不安が大きく、また大事な メンバーを2名9週間東大に"貸し出し"、東大 のユニフォームに袖を通させるということには慶 應の部員の抵抗感も非常に強く、当初お願いに日 吉の練習所へ行ったときは刺すような視線を浴び たことを記憶している。幾度かの話し合いを経て、 大学からサッカーを始めた2年生の選手2名を 迎えることが決定した。当初互いの不安は大きか ったが、初年度の見えない力に押され、そして2 人の活躍は目覚ましく、この年のチームは10チ ーム中4位と好成績を収めることが出来た。中 でも私の人生でもベストゲームの1つに数えら れるのが、9月28日、農学部グラウンドで行わ れた茨城大学戦である。この日は慶應ソッカー部 女子の面々、そしてア式男子の面々が応援に来て いた。前半を0-1で折り返し、迎えた後半、慶應 竹内がCKから2点を挙げ、1年エース大坪がダ



2014年9月28日、茨城大学戦



2014年11月2日、最終節山梨学院大学戦。横断幕は部員の家族からの寄付。

メ押しの3点目。今までのサッカー人生でこんなに多くの人に応援されたこともなかったし、グラウンドもユニフォームもないところからスタートしいろんなところで関係者をお騒がせしてきたア式女子であったし、慶應の部員たちをかなにをきるさせたし、そんな自分たちが今こんなにとって、そして白星を挙げることができた。慶應の他の部員からも、2人が大きく成長して帰ってきたので非常に感謝している、と言葉をいただいた。同期のいない私にとって、当時同じ学年だいた。同期のいない私にとって、当時同じ学年だいた。名と、私たちを支えてくれた慶應の同じいた2名と、私たちを支えてくれた慶應の同じているし、今も親交が続いている。かくしてギリッの人数でなんとか凌いだのが1年目のシーズンであった。

#### 「好きだがやる場所がない」という声から

2014年に活動する中で頭を悩ませたのが、学内での潜在的女子サッカー人口の少なさ、そして周辺地域・大学での意外な女子サッカー需要である。学内の勧誘活動には苦しさがある一方で、複数の大学や本郷周辺の高校生など、「サッカーは好きだがやる場所がない」と感じている女性からの連絡が少なくなかった。日々の練習は10数名いるかいないかの自分たちが、「東大生じゃないから」と外部からの問い合わせをお断りする苦しい日々が続いた。

そんなジレンマがきっかけとなって持ち上がったのが、「文京 LB レディース」構想である。東大ア式女子が文京区で女子サッカーチームを運営し、日々の練習を一緒に行うとともに、地域の女子サッカーニーズを満たす――2014 年末から動き出したこの構想は、今現在総勢 60 名ほどのクラブへと成長し、4シーズン目を迎えようとしている。今の東大ア式女子にとって、なくてはならない姉妹チームとなった。

#### お下がりのボールと砂の公園から

始まりにあたるこの1年は、今から考えればとんでもないことばかりで、それだけに私にとって一番面白いシーズンでもあった。グラウンドではなく砂の公園で練習したり、ボールもマーカーもお下がりだったり、ユニフォームは男子のお下がりで全員が袖の長さを持て余したり。今現在ある環境は全て所与のものでなく、見つけてきたものである。自分の過去を振り返れば、小学生の時から高校生になるまで、所与だと思っていた環境はそうではなかったとやっと気が付いた。書き残したいことは少なくないが、ここで一旦筆をおく。「東大」に「女子サッカー」を掛け算するとかなり小さな数字になるような気がしていたが、ひょっとしてひょっとすれば、未来には思った以上に可能性があると信じて。

## ア式女子 4年間のキセキ

**大坪 佳夏子**(1期生 2016年度主将)

#### 運命的な出会いと 熱い思いに突き動かされて

私が東京大学ア式蹴球部女子に入部したのは、 幾つもの偶然が重なってのことだった。今考えれ ば、もはや決まった運命だったのかもしれない。

小学校一年生からずっと続けてきたサッカーを、大学でも部活に入って続けることは正直想像もしていなかったし、そもそも東大には女子サッカー部がないと思っていた。それでもなぜか引っ越しの荷物には、スパイクとサッカーウェアをしっかり入れて上京した。入学して最初の新歓イベントに参加しなかった私は、各部活・サークルのチラシが入った分厚い封筒を、広島に一時帰省する新幹線の中で一枚一枚見ていき、その中からア式蹴球部女子のチラシを見つけた。サッカー部なのに写っていたのはたった五人だった。チラシだけしか見ていなかったら、入部していなかったかもし



筆者(2016年4月)

れない。

そんな中、科類と第二外国語で分かれたクラスごとに、新入生同士の交流を深める合宿が行われた。この合宿はそのクラスの二年生の先輩方が企画・引率してくださるのだが、なんとその中に大多和愛さんがいらっしゃったのだ。運命的な出会いに感動した私はすぐに体験練習に参加した。その後成瀬さんの熱い思いに突き動かされ、そして今まで所属していた大規模クラブとは違い自分が"絶対に必要な選手"になれる気がして、入部届を提出した。

当初入部した同期は三人いたのだが、一人は事情があって部を去ってしまい、田中周と二人で四年間を過ごすことになった。田中の最初の印象は、運動をするタイプには全く見えず、この子も辞めてしまうかも、と思ったこともあるくらいだ。しかし、記念すべきア式蹴球部女子の初公式戦、ア式女子史上初ゴールを決めたのは彼女だった。これが田中の大学公式戦最初で最後のゴールとなってしまったが、サッカーを初めて半年ほどの彼女がゴールを決めたことに感動を覚えるとともに、一抹の悔しさを感じたことは、一生忘れないだろう。

#### 助っ人という良い縁を得て

先程述べた公式戦、正式名称は「関東大学女子 サッカーリーグ」である。東京大学は一番下のリ ーグである三部リーグに参入した。創部一年目に 公式戦に出場、それだけ聞くと順調な滑り出しの ように見えるが、そこに至るには本当にたくさん の方のご協力と、様々な葛藤があった。

実は当時、ア式蹴球部女子のメンバーはわずか 七名。とても公式戦をできる状態ではなかった。 そこで監督である福田さんが、ご自身の人脈を使 い、慶應ソッカー部女子から助っ人をお借りする ことを提案してくださった。当時の主将だった成 瀬さんや大多和さんはとても悩まれたと思う。福 田監督とも話し合いを重ねられたと聞いている。 私自身も、他の大学の方の力を借りてしまうと、

「東大」という看板を背負って試合に出るのにふ さわしくないのではないか、普段一緒に練習でき ない方と試合でうまくいくのか、慶應の方は本当 に東大として出てもいいと思っているのか、と言 う不安が拭えなかった。しかし現実的に、人数を 確保しなければ公式戦に出場することは難しく、 最終的にア式女子全員で慶應ソッカー部女子の 方々のところへスーツで出向いてお願いをし、二 名の方に東大のユニフォームで大学リーグに出場 していただくことになった。大切なチームメイト を送り出してくださったソッカー部女子の方々に は、感謝してもしきれない。先程これを「苦渋の 決断 であるかのように書いたが、振り返ってみ れば慶應の方々とご縁ができて良いことばかりだ った。東大チームに来ていただいた方々の、練習 に取り組む姿勢やチームへの思いに学んだことは 本当に多く、創部当初にソッカー部女子という最 高のロールモデルが身近にあったことはア式蹴球 部女子にとってかけがえのない財産となった。

他にも、入部はしなかったけれどサッカー経験者だった東大生や、東大女子ホッケー部の方々の力も借りて、一年目の公式戦に出場することができた。結果は10チーム中4位。言ってしまえば寄せ集めのチームでここまで勝利を挙げられたのは、ア式女子メンバーの初年度にかける思いと、一緒に戦ってくださった方々のそれぞれの思いが強く結びつき、チーム全員が出せる力を出し切った結果だったと思う。

こうして公式戦が無事に終わった後、感慨に浸る暇もなくビッグイベントの話が持ち上がった。 ア式蹴球部男子が元々行っていた、高校サッカー部を東大に招いて親善試合を行う「高校生大会」の女子版をやることになったのだ。成瀬さんの命名で「東大なでしこサッカーフェスティバル」と 社大に銘打たれたこのイベント、第一回から都内三校の女子サッカー部が参加してくださり、受験勉強や大学生活について部員と話す交流会、高校同士の親善試合、ア式女子部員も交えてのミニゲーム大会を通して、高校生と交流を深めた。成瀬さんが当初から言っていた、「ア式女子に入りたくて、東大を目指す女子を生み出したい」という願いを叶える第一歩となった。

一年間の活動を終え、創部メンバーから二名が 卒業を迎え新たな道へ進まれた。その方々から見 て、苦労して立ち上げてよかったと思えるような 部にしていきたいと決意を新たにした。一方、同期の方が卒業される中、成瀬さんはもう一年大学に残り、サッカーを続ける決断をされた。今自分が同じ立場になってみて、どれほど難しい決断だったかを思い知らされる。成瀬さんのサッカーへの思いの強さに改めて尊敬の念を抱き、私も少しでも追いつきたいと思った。

こうして成瀬さん、大多和さん、大坪、田中の四名で二年目の新歓に臨んだ。十一名で行う競技の部活で、現部員が四名。存続の危機と隣合わせの新歓活動となった。努力の甲斐あって四名が入部を決めてくれた。人数が揃わず公式戦に出場できるかも不透明な部に入る決断をしてくれた彼女たちには本当に感謝しかない。入部が一番ためらわれる年度だったと思う。ただ四名のうち、一名は早い段階で部を去ってしまった。運動部に限らず魅力的な活動がたくさんあって、自分の将来も真剣に考えなければいけない年代で、一つのことを四年間続ける、大学女子運動部の活動の難しさを感じた。

#### ア式女子の可能性を広げた文京レディース

二年目の活動で特筆すべきは、文京LBレディースの創設である。「文京女子の、文京女子による、文京女子のための女子サッカークラブ」として、ア式蹴球部女子を中心に包含する形で創設された文京LBレディース。このチームの詳細はこの部史の該当部分に譲り、ここではア式女子としての視点から述べたいと思う。

まずこのチームの創設が計画されている段階で、福田監督との白熱した話し合いが行われた。ア式 女子の人数が少なすぎてこのままではチームが保 てないこと、指導者も試合の機会も確保できないことは理解していたが、それ以上に「東京大学ア式蹴球部女子」というアイデンティティがなくなり吸収されてしまうのではないか、創設メンバーとして利用されているだけでそのうち用済みになってしまうのではないかという不安が大きかったのだ。私自身、まだ二年目の段階で廃部通告を出されたようで最初は抵抗を感じたことを覚えている

結果的にわだかまりは解消され、大多和さんの 活躍もあり文京 LB レディースは大学外でも注目 されるほどのインパクトを持って創設された。 様々な年代の方と一緒にサッカーができること、



試合中の文京レディース

指導者の方にきちんと教えていただけることなど、ア式女子にとって利益となることが多くあり、今後もピッチ上と運営の両面で東大生が貢献していくべきで、それが部員のためにもなると感じた。この年、文京 LB レディースは東京都女子サッカーリーグ五部に参戦し、四部昇格という結果を残した。私個人も得点王と優秀選手賞をいただき、大学リーグだけでは得られない学びと成長を実感した。

しかし創設前のあの話し合いを忘れることはない。新歓活動により一層力を入れ、ア式女子単体でもチームが作れるようにしたいと強く思うきっかけとなった。

関東大学女子サッカーリーグ三部では、一年目に引き続き慶應ソッカー部女子のお力を借りることとなり、五名の方が東大チームの一員として出場してくだった。この年は新たな試みとしてソッカー部女子の練習に参加させていただき、夏には合宿を同じ場所で行い早朝のフィジカルトレーニングに参加させていただいた。慶應の方々のサッカーに賭ける情熱やプレーの質の高さにとても刺激を受けた。更にこの年は文京LBレディースの大学生メンバーにも加わってもらい、前年よりも多くの勝利をと臨んだリーグ戦だったが、結果は11チーム中8位に終わった。個人としては三部

リーグベストイレブンという賞をいただき一つの 結果を残すことはできたが、上位大学との試合で は二桁失点を喫する試合もあり、どうすれば格上 の大学とも戦えるのか、翌年主将を務めることが 決まっていた私はリーグ戦後も日々模索していた。 またこの年、大多和さんが関東大学女子サッカー 連盟の副幹事長を務められ、リーグ戦の運営にお いて大きく貢献された。

前年に引き続き開催した「第二回東大なでしこサッカーフェスティバル」は、私が初めてア式女子の代表として臨んだ行事だった。準備不足・連携不足な点も多くあり翌年度への反省も多かったが、交流会やウォーミングアップ、ミニゲームに前回との変化が出るよう工夫を凝らし、参加してくれた高校生から「楽しかったです」「次も楽しかった。

この年をもって、創部発起人である成瀬さんが 卒業された。プレー面はもちろん、部の雰囲気を 良くするためいろいろと企画してくださったり、 部のためになると思えば新しいことをどんどん始 めていったり、成瀬さんにしかできなかったこと がたくさんあり、ア式女子にぽっかり穴が空いて しまうように感じていた。成瀬さんが播いてくれ た種を、自分たちが枯らさず育てていかなければ



いけないという責任感を持った。

#### 「まだその時ではない」

ア式女子創部三年目、この年私は主将、田中は主務となり部を引っ張っていく立場になった。この年から、創部当初から女子部理事としてご支援くださっている大里さんのご協力により、主将就任時に年間目標を発表し、他の部員が主将に求めることを伝え、全員で今年一年目指すべき姿を考えるキックオフミーティングが毎年行われることとなった。私が打ち出したスローガンは「感謝・勝利・成長」。「支えてくださる全ての方に感謝し、貪欲に勝利を目指し、全員がピッチ内外で成長できるチーム」を目指した。実現できたかどうかはともかく、全員で目標を共有して活動することでチームとして結束が強まったと感じた。

部として三回目となった新歓活動においては、 大幅にテコ入れが行われた。新歓にかける時間も 労力も格段に増え、部員には無理をさせてしまう 部分もあり、金銭面でも身の丈に合わなかった部 分もあった。しかし反省はすれども、後悔はして いない。勧誘する対象を拡大できたことで、過去 最高の五名が入部してくれることになった。部員 の確保という点に加え、シーズン初めに共に困難 を乗り越えることで部員間の団結力が一気に高ま



第二回東大なでしこサッカーフェスティバル

るという点でも、新歓活動はア式女子にとってリーグ戦の次、もしくは同等に重要事項である。今後もそれは変わらないだろう。

新歓を経てア式蹴球部女子の学部生部員は十一名となり、始めて競技人数に達した。そこで私と田中は大きな決断を迫られた。東大生のみで出場するという夢を叶えるため、初心者である一年生含め全員がフル出場しなければならないというリスクを負ってでも人手を借りずに出場するか、これまで通り大学院生や文京LBレディースの方々の力を借りるかという選択である。

大学院生とは、創部メンバーであり東京大学院 生の戸枝さんのことである。戸枝さんは早稲田大 学ア式蹴球部出身で、圧倒的な実力でこれまでプ



新歓イベント用立て看板(2017年3月)

レー面では頼りきりだった。できるだけ早く戸枝さんから「卒業」し、自分たちで試合を成立させられるようにならなければと焦る気持ちもあった。田中とこれまでにないほど二人で話し合い、大里さんにも助言を仰ぎ、部員たちの意向を聞き、部の将来も考えた結果、「今はまだその時ではない」という結論に至った。最終的に戸枝さんと文京LBレディースの大学生四名に出場をお願いし、計十六名で関東大学女子サッカーリーグに出場した。主将として臨むシーズンということもあり、またリーグ戦前にア式女子全体について深く考える機会があったからこそ、それまでより一層の責任感と、勝負へのこだわりを持って戦った。

リーグ戦序盤こそ格上相手に歯が立たず六連敗を喫したものの、チームとしての完成度は試合を経るごとに上がっていった。文京LBレディースメンバーの頼もしい活躍や、四月にサッカーを始めたばかりの一年生が急成長したこともあり、後半には内容も結果も満足のいく試合をすることができた。後輩部員が公式戦初得点を上げて勝利した試合は、自分が点を取る以上に嬉しかった。

このシーズンは、忘れられない試合がある。農 学部グラウンドでのホーム最終戦、実力の伯仲し た相手であった埼玉大学に対し、前半二点のリー ドを奪いながらも後半に立て続けに失点し、逆転 負けした試合である。リードした後の試合運びに 明らかに問題があった。完全に主将である自分自 身の責任で負けた試合であり、これまでのサッカ ー人生の中でも一番悔しい試合となった。

個人としては、私はこれまでで最高のリーグ通算五得点を上げ、田中は学生連盟の庶務部長として大学リーグの運営面で貢献し、力を発揮できたと思う。しかし最後の最後で、チームとしての、そして私達二人のリーダーとしての未熟さが現れてしまった。勝利の喜びも、敗戦の悔しさも、一番深く心に刻まれたシーズンだった。

リーグ戦後には、三回目を迎えた「東大なでし こフェスティバル」が行われた。ア式女子の部員 も増え、また文京LBレディースのメンバーも参 加してくれたことで、三回目にして初めて、ア式 女子がミニゲームだけでなく親善試合にも加わる ことができ、部が着実に発展していることを感じ た。

一方文京 LB レディースは創部二年目を迎え、部員数も更に増え、チームの活動が軌道に乗っていった。東京都女子サッカーリーグでは四部準優勝、三部昇格を決めた。大きな出来事だったのは、公式戦で初めて敗戦したことだと思う。そのため四部優勝を逃したのである。文京 LB レディースの一員として、練習をもっと充実したものにするために私が貢献できることはないか、ア式女子の活動とどう両立しながらチーム運営に貢献するかといったことを常に考えていた。

こうして三年目の活動を終え、大多和さん、戸枝さんが卒部された。これを持って、創部メンバーが全員卒部したことになる。創部当初、どのような思いで、どんな困難があって、どれだけ多くの方に助けていただいたか、直接語ることができる人がいなくなってしまった。私は傍らで見ていただけではあったが、先輩方の思いを後輩たちに伝えていかなければならないと決意を新たにした。

#### ア式女子を目指す女子が来た

創部四年目のシーズン、鬼門の新入生勧誘が始まる前にも二つ、記しておきたいことがある。まず一つは、慶應ソッカー部女子OGの方が、次のステップへ進まれるまでの短い期間ではあったが、私達ア式女子のコーチをしてくださったことだ。前年のリーグ戦では、慶應の方に東大として出て



文京レディース、東京都女子三部リーグに昇格(2016年11月3日)。

いただくことはなくなったものの、日程が被っていない時には慶應の試合を観戦しに行き、たくさんのことを吸収させていただいていた。しかしそれには飽き足らず、ア式女子に直接ご指導いただきたいと図々しくもお願いしたところ、快く引き受けてくださったのだ。ア式女子だけで誰かに練習を見ていただくことがほぼ初めてだった私たちには、頂いたアドバイス一つ一つがどれも新鮮で、プレーの中身から練習への取り組み方まで短期間でたくさんのことを吸収することができた。新生活の準備でお忙しい中コーチを引き受けてくださったことを、心から感謝している。

二つ目は、ゴールキーパーの問題である。初年 度は創部メンバーの中のお一人が、二年目・三年 目は私の一つ下の後輩である小尾真里奈がゴール キーパーを引き受けてくれていた。他のポジショ ンとのバランスなどを考え、この年は二年生の中 からゴールキーパーをする人を決めることになっ た。ゴールキーパーの大変さを知ろうと、文京 LBレディースのキーパーの方を講師に招き、部 員全員でキーパートレーニングを体験した。単純 にボールをキャッチする動作一つの中にも、細か い技術が必要で、目の前にボールが飛んでくるだ けで怖いと感じることもあり、キーパーというポジションの難しさを実感した。そういったポジションを引き受けるということは大変な決断だったと思うが、当時二年の松田真優が最終的にゴールキーパーを引き受けてくれた。私と田中が大学リーグ最後のシーズンを戦い抜く事ができたのは、彼女のおかげと言っても過言ではなく、本当に感謝している。今後もこの問題は必ず付きまとうが、その時の部の状況に合った最適な選択をしていくしかないのだと思う。

四度目を迎えた新歓活動、最終学年として果たすべき役割は大きいにも関わらず、私は就職活動を言い訳にしてあまり貢献することができなかった。しかし、後輩たちがそれぞれ百パーセント以上の力を発揮してくれ、五人の新入生が入部してくれた。ア式女子史上初のスタッフ、スポーツ女子、元演劇部、サッカー経験者、インドからの留学生とバラエティに富んだ面々で、ア式女子のこれからの活動がより充実したものになっていくだろうと感じた。なかでも中学までサッカーをしていた小倉優香は、大学入試において東京大学を受験すると決めた際に、女子サッカー部があることも大きな決め手となったと語っている。創部者で



UNIV.OF TOKYO と入った、ライトブルーの新ユニフォーム。

ある成瀬さんの、「ア式女子に入りたくて、東大を目指す女子を生み出したい」という願いが叶った瞬間であった。

プレーヤー四人の入部によって、東大生だけでの大学リーグ出場が現実的になったかと思われたが、怪我人が多く、リーグ中に離脱者が出ることも懸念されたことから、文京 LB レディースの大学生メンバー三人の力を借りて出場することとなった。忙しい中、毎週リーグ戦のために時間を割いてくれた三人には心から感謝している。この三人がいなければ、私と田中はリーグ戦に出られずに引退することになったかもしれない。

またそれまでは男子部のユニフォームをお借りしたり、文京LBレディースのユニフォームを兼用させて頂いたりして試合をしていたところ、四年目にして初めて、ア式蹴球部女子オリジナルのユニフォームを着て試合を戦うことができた。決して安くはないユニフォーム作成を快く支援してくださった東大LB会の皆様には、この先の活動を通して感謝を伝え続けなければならないと思っている。左胸にア式蹴球部のロゴマーク、胸に「UNIV. OF TOKYO」と入ったユニフォームは、まさに四年間憧れていたものであり、それを着て初めてピッチに立った瞬間には身が引き締まる思

いだった。

試合にも毎回足を運んでくださった東大LB会の方々に、勝利をお届けすることが一番の恩返しになるはずだったのだが、この年の成績は12チーム中10位、二勝九敗という結果に終わった。二部リーグから降格してきた相手に全く刃が立たず、十七失点を喫した試合もあった。「実力で圧倒的に上回る相手に、粘って引き分けに持ち込む」という試合をするのが、私が入部以来密かに持っていた野望だったのだが、それは果たせずに終わった。戦術面や練習内容面では伸び代しかないア式女子、まだまだ工夫の余地はあると思うし、部員の努力で解決できることもたくさんあるが、サッカー初心者が中心なためどうしても自力ではどうにもならない部分がある。今後の大きな課題の一つである。

十一試合の中からどれか取り上げるとすれば、やはり埼玉大学戦だろう。チームは初戦の勝利から九連敗と勝利から遠ざかっており、しかも相手は前年に逆転負けを喫した埼玉大学である。何としても勝ちたい試合だった。しかし防戦一方で中々ゴールネットを揺らせない時間が続いた。そんな中躍動したのは、当時三年の横堀ミラノだった。入った当初はスポーツを本格的にやること自

体初めてで、ボールの蹴り方どころか走り方すらままならず、怪我にも悩まされた彼女が渾身の力でゴールを奪った時、試合中にもかかわらず涙目になってしまった。横堀はこの年、関東大学女子サッカー連盟の幹事長も務めて運営面でも大きく貢献してくれており、ピッチ内外で積み重ねた努力は決して裏切らないのだなと思った。その姿は大学からサッカーを始めた後輩たちにも大いに勇気を与えたことだろう。この試合、横堀の二得点でア式女子は本当に久しぶりに勝利の喜びに浸ることができた。

#### 大学リーグと文京レディース

文京 LB レディースにはこの年大きな変化があ った。東京都女子サッカーリーグ三部に加え、五 部リーグにも参戦し、二チーム体制となったのだ。 五部のチームはよりサッカーを楽しむことに重き を置き、出場機会が全員に平等にあるのが特徴で ある。ア式女子部員は、先ほど紹介したサッカー 経験者の小倉と私は三部、その他は五部と都リー グでは二つに分かれて出場することになり、正直 に言うとチーム運営上難しい面もあった。しかし、 結果的には良い影響の方が多かったように思う。 五部リーグに出場した部員は主力としてしっかり 活躍し、公式戦初ゴールを決めた部員もいた。私 と小倉は三部チームで精一杯力を発揮し、チーム は二部昇格を決め、三年連続の昇格となった。そ れぞれの場所で成長しつつ、互いの試合はできる だけ応援に行き、試合運営で手伝えることがあれ ば積極的に手を挙げた。全員が大学リーグ以外で 試合に出る機会を確保することができ、また分か れることで逆にア式としての一体感を意識するき っかけにもなった。メンバーも増え、クラブとし て完成しつつある文京 LB レディースにおいて、 いかに大学リーグと両立しつつア式女子が役割を 果たすかが今後も重要となるだろう。

私と田中にとって最後の行事、四回目を迎えた「東大なでしこフェスティバル」は、過去最多四つの高校の女子サッカー部の皆さんに参加していただいた。参加人数も増え、親善試合・ミニゲーム・交流会はより充実した内容となり、ア式女子部員も全員が全力で楽しんでいた。このイベントがずっと続いていき、いつかは参加者の中から東京大学に合格してア式女子の部員になる女子が現れてくれることを祈っている。

シーズン全ての活動を終え、卒部式をもって私 と田中は部を引退し、頼もしい後輩たちにバトン を渡した。私にも田中にもそれぞれ少し頼りない ところがあり、先輩にも後輩にも数え切れないご 迷惑ご心配をおかけしたと思う。支えてくださっ た全ての方々に、「ありがとうございます」とい う言葉しか出てこない。一期生として、初めてア 式女子で四年間を過ごし、たくさんの貴重な経験 と学びを得ることができた。四年間の活動の中で、 なぜ東大に入ってまでサッカーをしているのか、 運動会の活動は将来に役立つのか、意味があるの か、と問われることもあった。今私はア式女子に 入部してよかったと自信を持って断言できるが、 現時点では説得力がない。これからの私の人生を もって、ア式女子が魅力ある団体であるというこ とを、微力ながらも証明していきたいと思ってい る。

#### キセキは続く

途中何度も存続の危機を迎えたア式蹴球部女子であったが、こうして五年目を迎えることができ、しかもそれが男子部の創部百年と同じタイミングであることに感動を覚えずにはいられない。

途中で部を去った人、一緒に大学リーグに出てくれた人、いつも声援を送ってくれる保護者の方々、大学リーグパンフレットなどにいつもご協賛くださる方々、創部当初から女子部の活動に温かい声援と多大なるご支援・ご協力いただいている男子部や東大LB会の方々、創部メンバーの方々、同期の田中、新歓で入ってくれた後輩のみんな、誰一人欠けてもこの4年間の軌跡は実現しなかっただろう。

そして、成瀬さんの思いつき、私と大多和さんの出会い、慶應ソッカー部女子の方々との出会い、文京LBレディースの創設など、様々な偶然が重ならなければ、東大で女子がサッカーを思い切りできる場が続いていくという、この奇跡は起こらなかったはずだ。その奇跡の中に少しでも参加できたことを嬉しく、誇りに思う。

ア式蹴球部女子は、これからもたくさん"奇跡"を起こし、"軌跡"を刻んでいくだろう。微力ながら OG としてそこに関わり続けていきたいと思っている。

後輩たち、未来の部員たちが、ア式女子を更に 魅力的なチームにしてくれることに期待を込めて。

# 地域交流

ア式蹴球部のこの 10 年は、これまで見てきた通り、シニア層の活躍、若手 LB の活動、女子 部創設、国際交流など充実した取り組みを積み重ねてきた。

一方、東京大学自体も、2014年に国立大学法人となってから大きく変わろうとしている。すなわち、「大学の資産を社会の発展のためにより有効に活用すること」、「そのためには、産業界や地域社会に開かれた大学でなければならない」…と。実際、「東京大学ビジョン2020」で目指したものの中に「知の協創の拠点として大学が社会変革の主軸を担う」というものがある。

ア式蹴球部はこの点では、まさに先鞭をつけていると自負するところである。この項の(1)で福田監督がまとめている、一般社団法人 LB-BRB TOKYO の設立と、TOKYO UNITED、文京 LB レディースの活動がその一つである。ア式蹴球部と連携したこれらの活動は、文字通り、地元文京区と東京都という地域を背負い、大学スポーツの将来のあり方を象徴する存在として注目されるところである。ア式蹴球部と LB 会は、今後、これらとどのような関係を持っていくのか、発展的な展開が期待されるところである。

また、もう一つの柱は、御殿下サッカースクールの活動である。1969年に設立されたこのサッカースクールは、当初から地元文京区の子供たちに、サッカーを通じてスポーツの楽しさを教えようと、当時の浅見監督が発案し、実施したものである。現在は、LB会の管理下で、実質的な運営は、ア式蹴球部員が担っている。まさに東京大学が言うところの「地域とのつながり」そのものである。

すでに50年の星霜を経ようとしている御殿下サッカースクールと、新たな挑戦であるLB-BRB TOKYOの活動が、今後、どのような形で発展し、融合していくのだろうか。またその際に、ア式蹴球部とLB会はどのような役割を果たすのであろうか。最終的には、「ア式蹴球部が、大学の部活動の枠組みを超えて、大学の資産を最大活用しながらサッカーを通じて、社会発展の一翼を担う存在となる」ということこそが目指すべき道なのではないか。 (武田)

# 地域交流 LB-BRB TOKYO の設立と東京ユナイテッド、文京レディースの活躍"ア式の未来 100 年モデル"

ア式蹴球部 監督 福田 雅 (平成 12 年卒)

#### 東大ア式蹴球部との出会い

私のサッカーの原点は、暁星高校サッカー部に おける経験にある。

「日本一の努力をして日本一になれ」、「勉強でも サッカーでも日本一になれ」、そんな言葉をかけ 続けられ、常に目線と志は高く3年間を過ごした。 そこでの経験が今の自身の礎となっているといっ ても過言ではなく、そこで出会った恩師と友人、 支えてくれた家族への感謝の念は今でも絶えない。

高校三年時に東京都代表として全国高校サッカー選手権大会に出場するも、3年間で公式戦出場はゼロ。チームとしての戦いと個人としての戦いの狭間で大きく揺れた3年間であったが、達成感とは程遠い感情を自身の心の中にしまい込み高校サッカー人生を終えた。

同時に、競技者としての自身の限界を知り、サ



筆者

ッカー人生そのものを終えたつもりであった。

二浪の末に文科 II 類に合格した頃には、すでに サッカーに対する熱は冷め、また、父の闘病生活 も重なり、とてもサッカーをもう一度真剣にやろ うとは思えなかった。

しかしながら、入学して間もない7月に父が 他界し、いざ充実した大学生活を送ろうとしたと ころで、サッカー以外に打ち込めるものを探すの は意外に困難な作業であった。

今さら東大のサッカー部に、ましてや高校の同級生や後輩が大学サッカーの第一線でプレーしているのを横目に東京都リーグ2部でやる意義とは何なのか。揺れに揺れたものの、サッカーの魅力とは恐ろしいもので、気が付けばア式蹴球部(以下、ア式)の門を叩き、四年時には主将を務めるに至っていた。

自身の行動を正当化すべく意義を見出してから 行動に移すという東大生の習性は、改めなければ ならない。

「東大ア式蹴球部は如何にして強くなるか。」 学生時代から向き合ってきた極めてシンプルな 問い。

競技団体にとっては「強さ」こそが最大の魅力であり、逆にそれ以外を追求することは、穿った見方をすれば、勝てなかったときの言い訳と捉えられかねない。だからこそ、競技団体として追求すべきは勝利のみ。勝利を追求する過程に多くの学びがあることは言うまでもないが、学生時代から、チームとして「勝つことがすべてではない」と掲げることには抵抗があった。

再度サッカーの世界に身を投じるにあたり、決 定的な意識の変化があったことを記憶している。 初めてア式の練習を見た時の印象は「何だかピ リッとしないチームだな」とか、「まともな監督やコーチもいないのか」とか、どうしても充実した高校時代のそれと比較してしまっていた。しかし、ある時から、大学サッカーとは高校の部活のようにカリスマ指導者に用意された環境を求める場ではなく、むしろ、各自が自身の経験を持ち寄り、そこに自分達なりの創意工夫を加えて、自ら「集団を創り上げる」ということを追求する場でもあるということに気付き始めたのである。私自身も初めて「チームマネジメント」を意識したのはこの時期かもしれない。

とはいえ、大学三年時に故服部一郎氏が監督に 就任され、我々のことを厳しくも温かく見守って くださっていたのだが、そのありがたさを深く理 解することもなく、また、泳がされていたことに 気付くこともなく、「俺たちが自分達でチームを つくる」と思い上がっていた日々を思い出しては 恥ずかしく思う。

この時点での自身の興味はただ「強くなるこ と」。もっと言うと、「自身の力で強くすること」。 そしてゴールは大学日本一。同じ土俵に立った以 上、東大生だからといってサッカーで負けること が正当化されるはずがない。確かに、そこに至る までの人生において、ボールを蹴ってきた絶対量 は強豪校の学生達に比して圧倒的に少ない。その 代わりに多くの時間を机上の学習に費やしてきた ことは紛れもない事実である。その積み重ねが大 きな差となることは、学問の世界のみならずサッ カーの世界においても必然であることは重々承知 している。しかしながら、周りが何と言おうとも、 自分達がそれを言い訳にすることはできない。そ れまでの人生のサッカーというフィールドにおけ る努力の絶対量の不足を、この4年間でいかにし て埋めるか。

主将としてチーム全員にその現実を認識させたうえで、その厳しい現実にただただ向き合い挑戦し続けようとした。とはいえ、当時は東京都リーグ2部に所属していたため、現実的にインカレに出場し日本一を獲得する機会に恵まれることはなく、しかしながら、常に日本一を目指し努力する姿勢を持ち続けることは意識していた。その不断の努力の姿勢が後身にも引き継がれ、いつか本当にア式が日本一を窺う日が訪れることを信じて。

大学サッカー人生においても日本一という目標を達成することはなく、また、結果を手にすることができなかった集団の価値を正当化することもできぬまま大学サッカー人生は幕を閉じた。

#### 卒業後のサッカー人生

2000 年に大学を卒業してから後に、私がア式 に関わることになったのは 2006 年の春。先代の 故服部監督の御遺志を継ぐ形で監督に就任した。

卒業と同時に不思議と大学サッカーに対する熱は冷め、社会人生活を送りながら、もう一度グラウンドに戻ることなんて想像したこともなかったというのが正直なところである。ましてや、忙しい盛りの歳である。当時は、いち早く社会に認められ身を立てることに必死で、自身の時間を大学サッカーの指導に振り向ける時間的・心理的な余裕はとてもなかった。さらには、卒業後6年も経てば、知っている顔もいない。こうしてOBという生き物は皆、グラウンドから足が遠のく。

しかし、やるからには「東大ア式蹴球部を日本ーにする。」という学生時代と変わらぬ断固たる 決意を持ってグラウンドに帰還したつもりであったが、私には当時のア式を強くする術を持ち合わせていなかったし、今思えば、強くしたいという本気の情熱も持ち合わせていなかったのかも知れない。おそらく、歳をとり現実が見え過ぎてしまったのだろう。「ア式を日本一に」という言葉を口にすることさえ憚られた。

また、専任ではなく、あくまでもボランティアとして週末のみグラウンドに足を運ぶだけの監督が、 学生と信頼関係を築くには限界があることも思い知らされた。現役時代にチームの一員として寝食を共にしていたときとはあまりに状況が異なる。

一方で、現役時代に気付かなかった運営面の実態を知ることができたのは、今の自身の活動に大いに役立っている。改めて説明するまでもないが、現役の活動費はLB会で集められたOB会費でまかなわれている。当時のOB会費総額が約300万円程度。これを専任のコーチの報酬に充ててしまうと、OB会費は底をついてしまうという財政状態にあった。これでは、リクルーティング活動や施設の整備・補修等といった将来への投資ができない。にもかかわらず、ア式として外部からスポ

ンサーを獲得するということは営利活動に該当する可能性が高いという観点から大学が了承してくれない。

ア式の運営を一つのクラブの経営ととらえたときに、収入を増やすことに制約・限界があり、将来への投資に振り向ける原資を獲得することさえできないという状況は、クラブとしての成長性を期待できないということを意味する。ましてや、私の現役時代に比して、大学サッカー界はよりコンペティティブな世界になっており、強化に必要とされる投資額は確実に増えつつあったが、その競争に呑み込まれざるを得ない状況を鑑みると、財政面から見たクラブのサステナビリティにさえ疑問符が付いた。

いわゆる「課外活動」としての大学の部活動のあり方に限界が訪れていたのであろう。その制度的な限界は日に日に顕著なものとなり、近時盛んに議論されている「日本版 NCAA」へとつながっていくことになる。

ア式が競技団体として日本一を目指すことは無駄ではない。むしろ、日本一の努力をして日本一を目指すというチャレンジには意味がある。しかしながら、昨今のプロ化の波が大学サッカー界にも押し寄せてきており、関東リーグで活躍する選手はほぼ100%がJリーグの下部組織出身者か名門高校出身者で固められ、毎年のJリーグ新入団選手の約半数が大学サッカー出身者であるという事実からも、大学サッカーという舞台はプロ入りの登竜門と化していることがわかる。

一方で、現在ア式が属するカテゴリーは、東京都リーグ2部(実質的には4部リーグ)ということからも、ア式が大学日本一を掲げることは現実的ではない。

そんな現実をふまえたときに、他の大学と同様にただただ勝利だけを追い求める集団であることに意味はあるのか。極論すると、Jリーガーを一人でも多く輩出することを目指すべきなのか。

一方で、勝利以外の他の価値を追い求めること は勝利に対する妥協ともとらえられないか。

選手という立場を離れてア式に関わることで、 多くのことを考えさせられた。そして、ア式の監督を一年で辞すと、自身のサッカー人生の原点である母校暁星高校サッカー部のボランティアコー チを始めた。

しかし、卒業後およそ15年のときを経て、抗えないプロ化の波は高校サッカー界にも押し寄せており、サッカーエリートの選手で固められた強豪校とその他大勢の弱小校の構図は、私の時代よりも歴然としていたのである。いわゆる「課外活動」としての部活動の限界が、高校サッカー年代においても明らかになりつつあった。

#### 日本のサッカー文化

日本のスポーツ文化は、いわゆる学校の部活文 化として発展してきたと言っても過言ではない。 学校対学校の構図。身近なところでは「双青戦」 や「早慶戦」。そこには常に教育的要素とは切り 離せないものが存在した。プロ化が進んだ今日に おいても、部活を通じてのスポーツが教育のコン テンツであることには変わりない。

一方で、止まらないプロフェッショナリズムの 波。

そんな時代のうねりの中で、我がア式が追求すべきは「強さ」だけであっていいのか。

最高学府としての東大は、もしかしたら競技団体としての存在感の発揮は社会から求められていないかもしれない。むしろ、社会が東大に期待する役割から敷衍して、多様化しつつあるスポーツの価値を体系化し、そこから広がる無限の可能性を世に訴求するという役割を担う必要があるのではないか。

ア式を含む学校の部活動が教育の貴重な場であると認識されていながら、昨今の教育改革や教師の働き方改革が叫ばれている中で、部活動はかつて担ってきたものを担えなくなってきており、その存在意義は低下しつつある。

これに対し、日本におけるプロサッカーの歴史は、遡ること 25 年の 1993 年に J リーグが発足したことから始まる。誤解を恐れずに言うと、従来の学校部活文化の日本に、地域コミュニティに立脚した欧州型のクラブチーム文化がトップダウンで導入されたという構図であった。加えて、「教育」に軸足を置く部活と「興行」に軸足を置くプロクラブという構図もあり、その狭間で自らの立ち位置を見失いかけたのが大学サッカーであったと言える。

将来が有望な選手は高校卒業後に即プロ入りと

#### 東大LB

1925年 創設(帝大アヅサ) 1931年 天皇杯優勝 (東京帝大LB) 1946年 天皇杯優勝

1946年 天皇杯優勝 1949年 天皇杯優勝

2013年 チーム再結成 2014年 2 部優勝

#### 慶應BRB

1921年 創設 1936年 天皇杯優勝 1940年 天皇杯優勝 1951年 天皇杯優勝

1951年 天皇 作 後 勝 1954年 天皇 杯 優 勝 1956年 天皇 杯 優 勝

2010年 チーム再結成

4部優勝

2011年 3 部優勝 2012年 2 部優勝

2015年



2015年

LB-BRB TOKYO 設立

2015年 東京都社会人リーグ1部・優勝2016年 関東リーグ2部・優勝

2017年 関東リーグ1部へ昇格



# TOKYO UNITED Football Club

名称変更

東京ユナイテッドフットボールクラブ発足までの流れ(東京ユナイテッドのHPより)

いうルートが用意され、その一方で大学サッカー界には、「プロにいけない選手」いわゆる「実力的に中途半端な選手」が集まり、大学サッカーの存在意義が迷走する中で、人気も凋落していった。

昨今はプロ化の波、すなわち「サッカー選手のゴールはプロサッカー選手である」という価値観が浸透する中で、大学サッカーも自らの存在意義を再定義しつつあるように思える。すなわち、どれだけ多くの選手をプロの世界に送り込むか、それが全てと謳ってはいないものの、そこに重点を置いていることは傍からも見てとれる。その証左として、近年のJリーグ入りする新人選手の約半分は大卒選手で占められており、大学サッカーはプロクラブの育成機関化してきているのである。

しかしながら、いまだに大学発のプロクラブは 存在しない。海外では大学がプロクラブまで保有 するという形態はよくあることなのに、日本では いまだ存在しない。 「教育」に軸足を置く学校組織が、「興行」的要素の強いプロクラブを自らの組織内に取り込むことを体系的に整理できさえすれば、それもいずれ現実のものになろうと思うのだが、『日本版NCAA』さえ実現しない状況においては、東大がそれを実現することは何年先になるか不明である。

#### 東大初のクラブ、東京ユナイテッド構想

2009 年、高校時代からの友人の人見秀司(現慶應義塾大学ソッカー部コーチ、東京ユナイテッドFC 共同代表)を中心とする慶應義塾大学ソッカー部OB有志らとともに、クラブ発足を決意。

現在の大学サッカー界におけるポジション、参画する有志の数、ならびに、大学が有するコミュニティの強固さを勘案し、形としては、天皇杯最多優勝を誇る慶應ソッカー部 OB クラブたる慶應BRB の再結成に私が参画することとなった。

30年以上生きてきて初めて「慶應」の看板を背負う経験である。理念と目的さえ共有できれば、

ンバーとなる東大女子サッカー部 「文京しBレディース」の中心メ



文京レディース誕生を報じる新聞(2014年1月21日 毎日新聞)

チーム名に大きなこだわりはなく、また、個人的 にも「慶應」が有するポテンシャルに強い興味を 持っていたこともあり、そのコミュニティに身を 置くことを楽しんでいた。むしろ、よそ者の私を 快く受け容れてくださった当時の慶應ファミリー の懐の深さに敬意を表するとともに、心より感謝 を申し上げたい。

かくして、まずは「東大」という枠を越え、理 念を同じくする「東大×慶應」のコミュニティが 出来上がり、2010年に慶應 BRB は東京都 4 部リ ーグ(250超のチームが在籍する東京都アマチュア サッカーリーグにおける最下層のリーグ) に参入す ることとなった。

順調に昇格を重ね、2013年に東京都1部リー グ昇格と同時に私が慶應 BRB の監督に就任、時 を同じくして、天皇杯三度の優勝を誇るア式OB チーム「東大LB」も再結成、次へのシナリオに 向けて着々と手を打っていった。

さらに翌2014年、成瀬明 (平成27年卒)、大 多和愛 (平成29年卒) らを中心に東京大学ア式蹴 球部女子(以後、ア式女子)が結成され、私が監 督に就任することとなったが、このア式女子こそ が、東大と地域の架け橋となっていくのである。

いつまでも大学の看板を掲げ、選手も特定の大 学 OB に限定したチーム編成をしていては、単な る学閥クラブに堕してしまう。それが決して本意

ではない我々は、2015年にクラブのモデルチェ ンジを図る。

東京23区を拠点とする初のJクラブとなるべ く、「文京区からJリーグ参入」を掲げるととも に、地元有力企業のフクダ電子様の協賛を得て、 「大学OBクラブ」から「文京区に根差した地域 のクラブ」へと変貌を遂げようとした。具体的に、 選手は両大学 OB に限定することなく、理念に賛 同したものであれば誰でも受け容れることとし、 その一方で、慶應 BRB と東大 LB 両者の冠をつ なげてチーム名を「LB-BRB TOKYO」と改称。 慶應と東大の両校 OB 有志達による共同プロジェク トであるというメッセージをチーム名には残したので ある。同時に、クラブの運営母体となる一般社団 法人 CLUB LB&BRB を設立。人見と私が共同代 表理事に正式に就任し組織面の整備も図った。

同年、ア式女子と文京区との共同事業である 「文京女子の、文京女子による、文京女子のため のサッカークラブ 文京 LB レディース」が誕生。 ア式女子は設立以来一年を通じて部員が11人 に達することはなかったが、「東大に女子サッカ 一部ができた」という反響は思いのほか大きかっ た。

都心で女性がサッカーを楽しむ環境、いわゆる 「女性の生涯サッカー」の場がないのである。そ もそも女子サッカークラブが都内には少なく、女 の子は小学生年代までは男子に混ざってボールを

蹴ることが多い。むしろ、小学生年代までは男子と一緒にボールを蹴ってサッカーを楽しめるのだが、中学生以上になるとそうはいかない。体力差も顕著になり、また、思春期を迎えることで互いに敬遠し合い、とても女子と男子が一緒にサッカーなんてやれる環境にない。結果、大部分の女子がサッカーをやめてしまう。ましてや、初心者がサッカーに挑戦する環境なんてありはしない。

そんな中、ア式女子ができたことで、その練習環境を求めて「練習だけでも一緒にやらせてもらえませんか」という問い合わせが数件舞い込んできた。

ア式女子もいつ部員が11人揃うかわからない。いつまで経っても揃わなければ、それこそ存続の危機である。一方で、女性の生涯サッカーの場が少なくともここ文京区には存在しない。そうであれば、いっそア式女子を地域に同化させて、地域クラブ化させてしまえばいいのだ。つまり、ア式女子を包含する地域クラブをつくり活動を共にし、ア式女子がそのクラブの核となりつつクラブの運営に責任を持つ。そこに文京区と東大の両者から施設面等で支援を受けるという仕組みである。

これにより、ア式女子の存続は担保され、同時 に地域女性のニーズにも合致する。

すぐに成澤文京区長、小野澤アカデミー推進部 長(当時)、古矢スポーツ振興課長(当時)に相談 してみたところ、皆さんが賛同してくださり、急 ピッチでクラブ発足の準備に入ると、発案から創 設まで約半年のスピードプロジェクトとなった。

募集をかけた当初は、「本当に人は集まるのだろうか…」と不安であったが、蓋を開けてみたら、13歳から58歳までの女性が50人超(現在では70人に迫る大所帯)。当初は募集対象者を厳密に文京区在住、在校、在勤に限定したため、中には他区から引っ越してきてまで応募してくる女性まで現れた。中学生からシニア層といった幅広い世代が、互いに名前で呼び合いながらボールを蹴るさまは、新しい地域コミュニティの形を想起させる。

クラブにとって大きな転換点となった2015年。 男子部「LB-BRB TOKYO」は東京都1部リーグから念願の関東リーグ2部に、女子部「文京LBレディース」は東京都5部リーグから4部リー グにダブル昇格を果たすのである。

LB-BRB TOKYO の関東リーグ昇格一年目となった 2016 年。終盤に破竹の六連勝で一気にリーグ優勝と、わずか一年で関東リーグ 2 部から 1 部へ昇格を果たす。

一方で文京 LB レディースも東京都 4 部リーグから 3 部リーグへと二年連続の昇格を果たすこととなった。

大きな転機は2017年。2月にクラブは文京区と相互協力協定を締結(https://tokyo-united-fc.jp/en/news/club-2017-223)することで、「東大×慶應」コミュニティに立脚したクラブから、「大学(東大と慶應)×地域(文京区)」コミュニティに立脚したクラブへと変貌を遂げ(当該協力協定締結団体としては、日本サッカー協会、読売ジャイアンツに次ぎ、三番目の団体)、次に見据えるのは「東京を代表するビッグクラブ」という姿。

そこで、チーム名を「東京ユナイテッド FC」に改称し、元日本代表の岩政大樹を選手兼コーチとして J2 のファジアーノ岡山から獲得。新たなオフィシャルスポンサーとして、サッカー日本代表のサポーティングカンパニーであるみずほフィナンシャルグループ様にも加わって頂くこととなった。

#### ア式と東京ユナイテッドの未来

ア式の強化には、オンザピッチ面とオフザピッチ面の両面からのアプローチが不可欠である。オンザピッチ面の強化とは言うまでもなく、サッカーの競技力の向上、より具体的には、技術面、体力面、戦術面の強化が必要となる。前述のように強豪校は全国からかき集めた優れた選手をさらに鍛え上げることでプロ予備軍としてのポジションを築き上げている。

それに対してア式は、サッカーの競技力が優れているという理由だけでは選手を集めることはできない。厳しい入試を乗り越えてきて、受験勉強のブランクを克服する勇気を持ち、かつ、貴重な4年間の大学生活をサッカーに捧げる決意をした者のみがア式の門を叩く。その数、毎年15人から20人程度。毎年東大に入学する学生は3,000人超であるから、その比率は1%にも満たない。その志を持った者たちを、4年間で徹底的に鍛え上げねばならない。我々東大生は18歳までに机

に向かってペンを持ち続けてきた時間が圧倒的に多く、それとは裏腹に、ボールを蹴ってきた時間が他の強豪校の学生達に比して圧倒的に少ない。その差をこの4年間でいかにして埋めるのか。また、当然のことながら、強豪高校から入部してくる学生がほとんどいない以上、高校時代にトップレベルであった選手が入学してくることもほとんどない。

このような状況において東大生がよく口にする言葉は決まって「東大生のストロングポイントを活かし、頭を使って高度な戦術を駆使し、組織で勝てばいい」というもの。これについて全否定はしないが、「個の強さなくして組織の強さなし」という事実から目を背けてはならないと私は思う。すなわち、個の強化なくして、強いチームは作れないのである。しかしながら、個の強化と、戦術面ならびに組織面の強化とはトレードオフの関係ではなく、個の強化としっかり向き合いながら、チームとして自分達の強みを活かしていくような取り組みをしていけばよい。とはいえ、トップレベルを知らぬ者たちだけで日々のトレーニングをどんなにハードに行ったところで、その成長には限界がある。

加えて、指導者への報酬、トレーニングジム使用料、遠征費やサプリメント等、強化には色々とお金がかかる。聞けば、関東リーグに所属する大学の予算規模は3,000万円を優に超えるレベル。このままOB会費で運営されるという旧来型の大学運動部のスタイルにサステナビリティは確保されるのか。ア式として企業から協賛を得てユニフォームに企業ロゴを入れることが認められるのか否かが不透明な現状において、そもそも競技団体として強くもない大学の一部活動団体がオフザピッチ面での強化をいかにして図るのか、すなわち、クラブとしての財政基盤をいかにして強固なものにするのか。

そこで思いついたかたちが、「ア式を核にして、 ア式を包含するような地域に根差したクラブをつ くり、地域からの支援を取り込んだ上で、強いチ ームをつくる。そのチームとア式が合同でトレー ニングを行うことで、ア式の技術面・体力面で強 化を図る」というもの。 そのクラブがスポンサー企業の支援を取り付けて、その収入を原資に指導者をはじめとするスタッフ陣を雇用し、クラブとア式で共有すればいい。 最終的には、大学の一部活動という枠組みを超えて、スポーツを通じた教育を地域と共に担いつつ、スポーツを軸にした地域コミュニティを形成し、その運営の主体となっていくというモデルは、新たな日本のスポーツ文化のロールモデルになるのではなかろうか。

日本サッカー界の草創期から今日に至るまでの 百年間、ア式がサッカー界に多大なる貢献をして きたということは揺るぎない事実である。しかし、 この百年間で日本のサッカー界も大きな変化を遂 げている。つまり、これまでと同じ営みでは、同 じレベルの貢献にはつながらないことは明らかで ある。サッカー界の変化を捉え、ア式も時代に沿 った変化が必要ではないのか。

ア式の未来百年のモデルを思い描いたときに、 完成形は恐らく存在せず、時代とともに修正・改 善を重ね、関わる人たちによって完成を求めてい くクラブ、歩みを止めないクラブでありたい。

ア式の門を叩いてから20有余年。歳を重ねるごとに、先人に整えてもらってきた環境に対し感謝の念が大きくなっていく。現役時代はそのありがたさに気づくこともなく、自分たち学生が主役だと思い上がっていた日を、今になって恥ずかしく思う。その思い上がりへの反省が、今の自分を衝き動かしているのかも知れない。

ただ一方で、今こうしてア式に関わっているのは、単に「奉仕の精神」によるものではない。ア 式を通じて、学生と接し、OBと接し、大学と接 し、地域と接し、社会と接する経験は、今でも自 身の成長につながるものと実感できていからであ る

現役学生のみならず OB を含む多くの人たちに対して成長の機会を提供し続けることで、多くの人を惹きつけ、多くの人との関わりが生まれ、多くの人たちによってクラブが創り上げられ、絶えず進化を遂げていく。逆に、他との接点を持たず、多くの人たちに成長の機会を提供できなければア式は停滞していく。

そう考えると、ア式の未来はもはやア式だけの ものではないのかも知れない。

# 地域交流——御殿下サッカースクール 50 年を迎える御殿下サッカースクール

武田 厚(昭和45年卒)

御殿下サッカースクールは、1969年の開校で、 来年(2019年)創立50年を迎えます。東大ア式 蹴球部100年の足跡の半分を共に歩んできたこ とになります。今や100名を超える子供たちと、 その保護者が、日曜日の朝、御殿下グラウンドに 集合してサッカーに親しんでいる光景は圧巻です。 そして、それをLB会の下でア式蹴球部の部員 が運営、管理していることも、特筆に値すると思 います。

1969年の創設当時の東大は、1月に機動隊の導入による安田講堂の封鎖解除があり、そして入試が中止となって、騒然とした状況でした。当時、サッカー部の監督で東大の助教授でもあった浅見さんは、過激な学生とのやり取りをしながら「大学とは何をするところか?」と自問する中で、答えの一つが「地域に開かれ、地域とのつながりを大切にする」ということだったと述べられています。そして、その具体的な施策として、地域の子供たちにサッカーを教え、サッカーを通じてスポーツの楽しさを味わってもらおうと、御殿下サッカースクールを創設したのです。

小学生の子供たちにサッカーを教えるスクールというのは、今でこそポピュラーで違和感なく受け入れられますが、50年前の当時は、サッカースクール自体が稀な存在でした。それだけに、謂わば手探りの状態でのスタートだったと思います。

ただ、東大の地元である文京区には、大きな運動場 (グラウンド)を持たない小学校も多く、子供たちが伸び伸びと運動する場が限られているという状況もあって、御殿下サッカースクールの開設は、口コミを通して広まっていったようです。

そして、御殿下サッカースクールが、現在も多くの方々から支持を得ているのは、その指導方針なのです。スクール経験者の皆さんが異口同音に述べています。即ち、ボールを蹴って、止めて、ドリブルして…シンプルにサッカーを楽しむことに徹する。試合に勝ち、大会で優勝することを目的としていないことです。浅見さんも、「試合に出て勝ちたいのなら、よそのクラブに行くといい」と言ってはばからないのです。スポーツ(サッカー)を通じて楽しい時間を過ごす…その体験は、言葉で語る以上に、より深く、より強く、子供たちの心に刻まれていったようです。

浅見さんが、過激派の学生達と激しいやり取りをする中で、「今やれること」として実践した試みは、地域とのつながりを体現する形で、さらに現役の学生たちが運営、管理するという付加価値を付けて存続しています。そして「サッカーを通してスポーツを楽しむ」という理念は、50年経っても脈々と受け継がれて、今日に至っているのです。

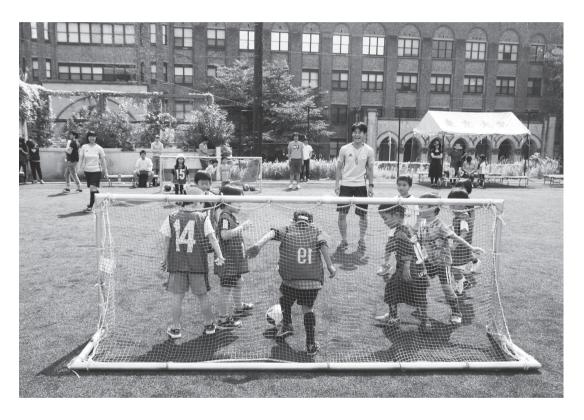
御殿下 サッカースクール 2018







御殿下 サッカースクール 2018













# 地域交流——御殿下サッカースクール "どんな時でも均等に" ——御殿下サッカースクールのモットーです

兵頭圭介(昭和50年卒)

# 御殿下少年サッカークラブの 設立と運営

御殿下少年サッカークラブが設立されたきっかけですが、創立者の浅見俊雄先生(東大名誉教授、前東大LB会理事長)からは、大学紛争で地域に開かれた大学を模索するなか、スクール創設を思い立ったと伺っております。当初は東大の実験室でスクール生の体力検査なども行っていたそうです。

設立から10年くらい運営面はサッカー部員と 東大体育科の先生方のみで、その後は現役部員が 参加せずに、順大など他大の学生や先生の協力で 運営、80年代からは佐々木務氏など元スクール 生の参加、学内外の公募による雇用で運営、90 年代に入り吉田隆氏がサッカー部監督に就任する と再び部員が手伝うようになり、1997年以降は 外部スタッフ中心に運営、OB会の法人化に伴っ てスクールがOB会の事業の一環と位置付けられ、 現在に至ります。OBの広川氏が学生の頃から部 員の参加が再開しました。施設の利用に当たって は終始東大当局のご理解を受けて参りました。

#### コーチとしての方針 一『どんな時でも均等に』

子供たちにサッカーを教える活動を始めた当時のお話です。野球と比べてサッカーは子供たちに見せるような映像のモデルがなかったので、教えるのには大変苦労しました。当時の対象は小学生と中学生で、小学1~3年生は各学年1クラスで1クラス当たり約30人、4~6年生と中学生は1クラスで1クラス当たり約30人の合計で約120人でした。この人数は在籍の数ではなく、練習に来る人数ですので在籍数はもっといたと思います。それに対して、学生コーチは1学年クラスに1人乃至2人でした。多い時は8人、少ない時は5人ほどのコーチで練習していました。

夏休みや冬休みなどの長期の休みには合宿も行

っていました。

練習内容ですが止める、蹴る、シュートなどの 基礎練習を行った後、試合でした。象徴的だった のは、"基礎練習よりもキックベースボール"だったことです。「キックベースだったらやる」と 子供たちから言われたこともあります。子供たちはサッカーの練習においても野球の形でやりたかったのでしょう。そんな独特の練習でした。

そしてもう一つ大事なことがあります。当時の 御殿下クラブの特徴は"どんな時でも均等に"と いう方針でした。当時、サッカー大会は少なかっ たのですが、強かろうが弱かろうが大会にも子供 たちを均等に出場させていました。ですから負け ることが多かったです。しかし当時の御殿下少年 サッカークラブは、コーチの方針として、全員を 均等に出場させることを徹底していました。

会員の子供たちが通っていた文京区・台東区の公立小学校は校庭がアスファルト舗装で、土のグラウンドが珍しい子供たちの中には、途中で砂遊びを始める子もいました。しかし浅見先生は「それでも良い。でもサッカーをやっている子の邪魔はするな」という教育方針でした。このあたりも他のサッカースクールとは違う特徴でした。

#### グラスルーツにおける 御殿下少年サッカークラブ

個人的には、上に繋がるような選手を育てることは、多分どこのチームでもやるだろうと思います。自分自身は選手としてのカリスマも無く、むしろスポーツで言えば落ちこぼれでした。しかしそんな落ちこぼれた人たちでもサッカーを続けられるような、サッカーの面白さが分かるような、運動が全然ダメな子でも参加できる、そんなスクールを目指していました。やってて"面白い"と思えれば、それで良いのです。途中で辞めても良い。その代わりやっている子の邪魔はしない、そ

の程度のことです。しかし中にはサッカーをちゃんとやりたい子もいます。しかし御殿下少年サッカークラブの方針である"どんな時でも均等に"ではみんなを試合に出すために勝てないので、そういう子たちは不満だったかもしれません。でも、他のクラブと掛け持ちも出来たので、そういう子たちも何人かいました。このクラブはサッカーを"面白い"と思えるような機会を与える場所になったのではないかと感じています。

#### 子供と大人が並行して サッカーをする

浅見先生は常に地域クラブのようなことを志向 されていました。

東大の OB クラブを立ち上げたのも浅見先生で す。浅見先生が名古屋大から東大に戻られたタイ ミングで、「御殿下クラブ」という社会人のチー ムを立ち上げ、一時期は関東リーグまで進みまし た。ちょうど御殿下クラブという名前で社会人チ ームが出来たのと御殿下少年サッカークラブがス タートしたのが大体同じ時期です。ですから、 "少年から大人まで"という構想を持っていらっ しゃったと思います。『子供と大人が並行してサ ッカーをする』ことを、浅見先生は生涯サッカー として当時から構想されていたのかもしれません。 学生コーチをしていた頃に、一貫して「あんま り勝ち負けにこだわってしまうとサッカーを嫌い になる子が出るから、そこはほどほどに」と言わ れていました。「負けて辞めちゃうくらいなら、 初めからそこまでなのだから、負けても負けても



次やりたい子供のほうを大事にしろ」と。「子供の頃にサッカーをやっていて良かったなという経験を持つ人がいないと、サッカーの世界が支えられない。トップのチームだけではサッカーは成り立たない」とも言われました。このような先生のお言葉や振る舞いから僕たちは多くを学んだような気がします。

#### 御殿下少年サッカークラブの これから

東大サッカー部の福田監督、利重総監督はサッカー部の地域貢献を部の強化と同じくらい重要視して下さっておられます。この方針が受け継がれていけばLB、ユナイテッド、レディースと関わりを保ちながら今後も存続が期待できます。

サッカーの普及を目指して創立された御殿下少 年サッカークラブですが、現在文京区だけでも子 供を対象としたクラブは10近くあり、普及者と しての使命は終わっていると浅見先生も仰ってお られました。御殿下少年サッカークラブは、誰で も入れるクラブということで一つの存在価値があ り、そこからさらに上を目指すのであればそれも 可能だろうと考えます。あくまで範囲は広くして おいた方が、方法や幅も増えると思います。もち ろん、良い悪いはあると思いますが。運営の面で は、今の仕方が一番合理的だと思います。という のは、東大のスタッフのボランティアでやってい ると続けるのが難しい部分があります。特に国立 の先生は相当忙しくなかなか時間を作れない現状 です。今の形は、東京ユナイテッドという民間の 組織が委託を受ける形なので、受ける組織も立派 な法人であるため、信用もできるわけです。これ はグラウンドの貸し借りなどでのトラブル回避に も繋がります。御殿下少年サッカークラブは現在 がベストではないかなと思います。

2017年10月10日、東京・池袋にて 聞き手/構成:上野直彦

御殿下サッカークラブの責任者を務める兵頭。「事務局 兵頭です。会費・入会手続き等御質問にお答えいたします。お気軽にお声をかけて下さい」と書かれたゼッケンを胸に。 (『OFFICIAL YEAR BOOK 2014』より)

# 地域交流——御殿下サッカースクール 教師となって 御殿下での学びは現在も生きています

佐々木 務

#### 御殿下サッカースクールとの 出会い

東京サッカースクールというのが四谷の上智大学のグラウンドで開いていたのです。私が小学生の時に学校へ案内が届き、前々からサッカーやってみたいなと思っていて大変興味を持ちました。ただ、私は男3人兄弟で長男、東京サッカースクールは月謝が高く3人一緒に通うのは正直ちょっと厳しい状態でした。体験入会はしましたが、その間に母がサッカー協会に連絡を取って、紹介を受けたのが「御殿下少年サッカースクール」でした。これが私と御殿下スクールとの出会いです。月謝も高くなく、ほぼ即決で決まりました。チームには指定された練習着(赤のTシャツに胸にカエデの白マーク、白の短パン、赤のストッキング)がありました。

当時の全体の指揮は、浅見俊雄先生と戸苅先生 の二人がやられていました。コーチは、千葉大の

#### プロフィール

1961年 新宿区上落合に誕生

1971年 小学4年生、御殿下サッカークラブに入部

1973年 御殿下少年サッカークラブ卒業1983年 御殿下少年サッカースクールコーチ

| 1983年 - 脚殿ドラギッッカースシールコーク | 1986年 - 日本大学文理学部体育学科卒業

御殿下少年サッカースクールコーチ終了

東京都公立学校教員に採用される

1988年 日本サッカー協会公認C級コーチライセンス取得

2001年 御殿下少年サッカースクールボランティアコーチ復帰

2008年 日本サッカー協会公認B級コーチライセンス取得

菊池先生や当時のア式蹴球部所属の選手(吉澤さんや兵頭先生)などの方々でした。

練習で印象に残っているものがあまりありませんが、とにかくミニゲームが毎回できて、楽しくてしょうがなかった思い出があります。週に1回、日曜日の午前に本郷の東大に電車とバス(当時は小学生が電車やバスを利用しているのは珍しかった)で通い、小学6年生まで所属していました。



農学物グラウンドにて。前列左端が佐々木氏。後列右端に戸苅先生。

#### みんな、のびのびと プレーしていました

当時は各学年20人くらいでした。大会とかはなく先生の繋がりでいろんなチームと試合をしました。まず入部するとスポーツテストがあり、50メートル走などやりました。今思えば戸苅先生と浅見先生がデータを欲しかったからだと思う



農学部グラウンドにて。戸苅先生や学生とともに。



農学部グラウンドにて。



御殿下グラウンドにて。

のですが、私が大学生になった時に駒場の研究室 にお手伝いに行ったら、当時のデータが残ってい ました。

私はスピード走ではチームで一番か二番に速かったので、それを生かしたポジション、フォワード(右のウイング)でした。

弟(佐々木功)がよく言うのは毎年検見川で行う夏の合宿が印象に残っているらしいです。今から40年くらい前のお話ですが、私ら兄弟全員で参加しました。

一期生は年齢が5つくらい上なのですが、現在新潮社・社長の佐藤隆信氏などがおられます。 佐藤さんの弟とは同期だったんです。これも懐か しい思い出です。

その頃は東京にはチームがほとんどなく、だいたい地方チームとの試合でしたが負けるほうが多かったです。でも、全然そういうのを気にしない先生たちで(笑)。チームの雰囲気も全く厳しくなくて、みんなのびのびしていました。このクラブの良さは、まさにこういったところではないでしょうか。

#### 指導者として スクールに戻る

1983年、私はスクールに戻ってきました。今度は指導者としてです。その時もスタートは朝10時からだったのですが、遅れてきた生徒たちが徐々に集まり、終わり頃の12時には収まり切らないくらい、人数が膨れ上がっていました。翌年からは二部制にして8時から12時までグラウンドを取ってもらい、前半(8時から10時)は1年から3年まで、後半(10時から12時)は4年から6年というように、グラウンドを区切り、学年ごとに練習をしていました。二部制にすることで全員がサッカーを楽しめる状態になりました。確か一学年50人はいたでしょうか。6年生など多すぎてAとBに分けて教えていました。また、夏休みは、山中湖での合宿(2泊3日)も実施していました。

子供たちは、私が着ていた、練習着と同じものを着ていました。また、スタッフ(コーチ、マネージャー)も指定された、ジャージや練習着を支給されました。

教える側になった時に大変だったことっていう ことはありません。それは浅見先生の考えが「環



山中湖グラウンドでの練習風景



山中湖グラウンドでの練習風景



山中湖グラウンドで。 おかあさん方も見守る。

境を設定する(遊べる場所を提供する)だけでよい、無理にサッカーをしなくてもよい」だったので、練習の最初は砂遊びで遊んでいてもいいじゃないかという感じでした(笑)。そのうちボールに触ればいいんじゃないかという流れで、本当にのびのびしていました。ただ、高学年になった頃には結構いろんな試合や大会に出場していくようになりました(背番号付きのユニホーム(2色)を作ったのもこの時期です)。

千葉県や埼玉県などいろんな場所へ連れて行きました。80年代前半はチーム力もあり、まぐれに勝利することもありました。その頃の指導は「ドリブルでどんどん仕掛けていきなさい」でした。

練習中もドリブルゲームなども積極的にやらせました。そのルールはドリブルしかしちゃいけない、パスは禁止です。オリジナルの練習メニューです。そうすると絶対にチームメイトのサポートに入るんです。ディフェンスの習慣も身に付きます。子供たちには、練習の意図はサポートや攻撃から守備の切り替えの速さの大切さなどとは、一切言いませんでした。結果的に彼らがそれらのことを分かってくれたら良いのです。

また、サッカーの醍醐味は、ゴールをし、ネットを揺さぶることです。それまではカラーコーンをゴールに見立てていましたが、ネットを揺らす喜びはありません。そこで、今では簡単に手に入る特製のミニゴールを作ったのも御殿下少年サッカークラブが初めてではないでしょうか。(2001年から指導をしたときに、その当時のものがありました)

就職してからクラブでの指導からは遠のいていましたが(クラブ主催の浅見先生や戸苅先生のお祝いの会には声を掛けていただき、顔を出していました)2001 年頃より自分の子供も遊びでスクールに連れて行くなど、2012 年くらいまでずっとボランティアコーチとして指導していました。

#### 御殿下スクールの 意義と意味

今もずっとサッカーを教えています。人数が凄く少ないスクールでもやはりトップまでいく子供はいます。関東1部リーグレベルの大学(早稲田大学ア式蹴球部2名)に所属する人もいました。私がコーチに復帰した年、わざわざ強豪の東福岡

高校のサッカー部に留学した子や、東京の駒場高校へ進学しサッカーを続け社会人では国体の東京代表になった子もいました。こういった子供が生まれることも御殿下サッカースクールの意義や意味だと思っています。

私が子供時代に習った事や経験が生きたのは、やはり指導者の道や教員の道を歩んだ時です。ボールはコントロールが大事、止める蹴ることだけをしっかりやっていけばその後も絶対にやっていけると御殿下で学びました。今の小学生には教えすぎだと思います。「今何をすべきか、どのようにするか」いわゆる「考えられる」選手にしなければならないと思います。子供の頃にもっと止めて蹴る、ドリブルをなど基礎的な個人技を(ゲームを通じて)もっと磨かなくてはいけません。これは指導していて強く思っています。

余談になりますが、我が息子は、小学校時代は、 チームに所属せずスクールのみで技術習得をさせました。ジュニアユースのセレクションで三菱養和に入り(初めてのチーム登録)その後もユースチームに入ることが出来ました。また、ユース時代は、プレミアリーグに出場の際、4種の所属を「御殿下少年サッカースクール」と書くようにコーチから言われ、掲載されました(知っている人は知っている伝統のある少年サッカークラブと言えましょう)。

戸苅先生から御紹介を受けたサッカークラブが あります。社会人になってからコーチをやったの ですが、あまりにも「教えなさすぎる」「練習は せず、ミニゲームしかしない」と言われクビにな りました(笑)。

私の原点とでもいうべきは「試合に勝ちたいのだったら、うちのクラブはやめて違うところへ行きなさい」という浅見先生と戸苅先生の口癖です。サッカーを通して楽しく遊ぶという原点は、まさにここにあります。私も教師になって、その時に習ったことは今の仕事でも生きています。

2017年12月27日、東京・新宿にて 聞き手/構成:上野直彦

# 地域交流——御殿下サッカースクール **父への想い、 少年サッカーの日々、Jクラブの仕事**

戸苅 淳 (浦和レッドダイヤモンズ本部長 (パートナー、MD 担当))

#### 父に連れられて 御殿下サッカースクールへ

僕の父はサッカーが大好きで、御殿下サッカースクールの創設者でもあります。父は東京大学教養学部に勤めており、それぐらい東大には縁がありました。

日頃から父はサッカーの研究をしたり、スクールで指導をしたりしており、僕は生まれた時から常にそばにボールがある、そういった環境でした。毎週日曜日には、父が御殿下のサッカースクールでコーチをしていたので一緒に連れて行ってもらい、いつしか僕もサッカーを始めるようになりました。実は今だから言えるのですが、僕は幼稚園の年長の時から一つ上の小学校1年生のグループに入れてもらっていたんです(笑)。

当時は浦和から通っていたので、小学4年生になってからは別の地元少年団に入ってプレーしていました。「木崎サッカー少年団」という、当時は浦和キッカーズという名前の名門のサッカー少年団でした。そこには1年だけいました。なぜ1年間しか在籍しなかったかというと、とても練習が厳しくて、言葉が合っているかどうかわかりませんがスパルタ的なところがあり、父がみかねて



戸苅淳さん(左)。お父上の晴彦氏と(1974年)。



日4年

駒場サッカー少年団というチームを紹介してくれたのです。そこはサッカーを楽しんで教えてくれる少年団だったので、移ることを決めました。こうして小学生で本格的にサッカーを始めていくこととなりましたが、そのきっかけは御殿下スクールでした。

#### 御殿下で サッカーの楽しさを知る

御殿下スクールの練習は今思い出してもユニークなものでした。最初はサッカーをしないで三四郎池で散歩をしたり、石段でランニングをしたりと導入部分から凄く楽しかった。全然サッカーをしない日があっても、楽しく家に帰ってくる。こういった練習だったので段々通うのが楽しみになっていきました。当時はスパルタ的な練習が普通、そういう時代でした。水は全く飲ませてもらえない、足も手も豆だらけ、走るのも凄い走らされる。そんな厳しい練習に出会っていたら、サッカーは、しまらないと思って途中でやめていたかもしれません。でも僕が出会った御殿下スクールは、サッカーは楽しいのが基本でした。「スポーツとは楽

しいもの」という経験が出来たのが御殿下での最大の収穫で、これは有り難いことだと思っています。だからこそ、サッカーが心から好きになれました。

もう一つ通った駒場サッカー少年団というところは強くはなかったのですが、小学6年の時に浦和市の選抜チームに選ばれ、全国で3位になりました。選抜チームのメンバーは中学に上がるとバラバラになります。だから高校に入ったら当時強豪だった浦和南高校にみんなで集まろうと約束をしたのを覚えています。

中学校の部活はスパルタ的な練習でしたが、サッカーが好きという気持ちがベースにあったので何とかそこは乗り切れました。卒業後は浦和南高校に入学したのですが、選抜メンバーは3人くらいしか来ませんでした。多くの人は帝京や武南などの強豪校に推薦で行ってしまったのです。僕が在籍していた頃、浦和南高校は全国大会に出場できるほどには強くありませんでした。県大会でベスト4くらいだったでしょうか。でも、埼玉県の高校選抜チームに選ばれ、国体では準優勝したのです。そういった経緯もあり、サッカーの実力が認められて筑波大学に入学することに。サッカー部に入って驚いたのは、1つ上の学年に井原

正巳さんや中山雅史さんなど凄いメンバーがいたことです。現在日本サッカー協会会長の田嶋幸三さんや小野剛さんがコーチでいらっしゃったりして錚々たるメンバーの中でサッカー戦術、科学的なこと、栄養のこと、睡眠のこと、様々な事を学ぶ機会を得て大学時代は貴重な体験となりました。

#### 浦和レッズに加入

実は僕は大学卒業でサッカーをやめようと思っ ていたのです。そんな時でした、浦和レッズの方 からプロ選手のお誘いをいただいたんです。大変 嬉しく思いましたが、最初はお断りをしたのです。 ピッチの上に立つよりもサッカーの周りの仕事、 ピッチを盛り上げる仕事、サッカーチームを持続 的に運営する仕事がしたい、そういう思いが強か ったのです。当時はまだ、そういったチーム運営 や経営面に興味を持っている人は極めて少なかっ たと思います。プロ選手としてオファーを受けて いるのに、選手ではなくてフロントスタッフとし てやっていく。何故そう考えるようになったかと いうと、高校時代に電通の方で頻繁に部活へやっ て来る人がいました。当時は松本暁司監督という 全国的に有名な監督がいましたので、その人の本 を出版したいと考えられていたようです。電通の 方は「ワールドカップと電通|「オリンピックと



電通」という内容で出版される前の原稿を僕に読ませてくれたのです。それを読んでスポーツをビジネス化するということが世の中にあるんだと初めて知ったのです。

選手でなくフロントでクラブに入りたい、きっかけはこういった出会いから生まれた考えでした。それで当時の三菱自動車フットボールクラブ(現浦和レッズ)の監督である森孝慈さんに相談をしたのですが、「サッカー選手をやめてから、そういった仕事をすればいい」とアドバイスを受けました。森さんにそこまで言ってもらえるならサッカーをしようと。その頃、クラブにはプロ選手としてしか加入出来なかったのですが、僕は最後の社員兼選手という形で入れていただきました。Jリーグ開幕の前の年、1992年でした。結局、選手としては1年しかプレー出来ませんでしたが、現在はフロントスタッフとして入れていただいて25年になりました。

#### 今の仕事にも活きている 御殿下での楽しさ

現在はプロチームを継続的に運営しています。 勤めている浦和レッズはアジアチャンピオンを二 度も獲得してくれました。僕はチームを運営して いくことをやり甲斐にしており、多くの人に喜ん でもらったり地域の方々に喜んでもらうというこ とを、サッカーを通じて実現しています。でも、 それはすべて御殿下から学んだ、また父の影響を 受けてのことなのです。

今でも僕は凄いなと思っていることが一つあります。それは御殿下でコーチをして下さった浅見俊雄先生が書かれた指導書です。ここに書かれているテーマが、まさにサッカーを楽しんでやる、というものでした。ヨーロッパのようなクラブを作ると当時から言っておられていましたが、当時はスパルタ的な練習が多い中で、これだけ先進的に"スポーツ"という言葉の意味を正しく理解した。スポーツというものは遊びがベースにある、そこにルーツというものは遊びがベースにある、そこにルールがあるのがスポーツだと書かれていて"プレイヤー"という語源もゲームからきているそうです。「スポーツ=競技」となるから勝利至上主義となってしまう。浅見先生は昔から本質を見抜かれていて、子供たちのスクールでは「スポーツは

楽しい」という考えを実践され、現在もこれをベースに運営されています。これは本当に凄いことだと感じています。

現在の仕事については、会社に入ってほぼ営業 の毎日です。特にスポンサーシップを中心にやっ てきました。最初はクラブの収入は数億円でした が、今は30億を超えるスポンサー収入がありま す。これは浦和レッズがJリーグでは1番ではな いかと思いますが、そのためにいろんな取り組み をやってきました。今では当たり前となりました が、Jリーグで一番最初に LED の広告用電光掲 示板を導入しました。三菱電機様にこういったも のを作れないかと話を持ちかけましたが、当時は 日本に全く現物がありませんでした。そこで設計 からイメージを伝えて日本での第1号機を製作 してもらいました。Jリーグのルールも広告看板 のルールは固定看板のルールしか当時はなかった ので、暫定的に認めてもらいました。先進的なも のが好きというところがあって、本当にいろんな ことに取り組みましたね。スタジアムに個室を 30部屋ぐらい作って前に観戦テラスを置いて、 お食事と観戦ができる部屋を作ったり。サッカー の観戦とレベルの高いお食事、そこに商談やビジ ネスをマッチングする。他の方もいらっしゃるの でお客様同士の交流の場にして頂く。これらは浦 和レッズがJリーグでは最初に始めました。今で は当たり前となりましたが、「浦和レッズはそう いったことがよく出来ているね」と褒められ嬉し く感じる時があります。僕自身はそういった新し いことをどんどん取り入れてやるのが好きなので す。

今後の日本は少子高齢化の時代を迎えます。スタジアムに健康で来られるような社会へ、サッカーで僕らが健康寿命を伸ばしていけるようにしていくべきだと感じています。例えば小学校や中学校などの施設を使って高齢者の方が運動やスポーツを通じて健康寿命を伸ばし、それによって社会保障費も削減されていく。少しでも健康で長生きする時代をサポートしていきたい。またそういう方々がスタジアムに来やすい環境をつくっていく。これらはクラブが果たす高齢化社会での大きな役割だと思っています。子供たちに関しては現在も活動を続けていますが、年間5万人くらいの子

供たちにスクールを無償で受けられるようにしています。1年365日で500回ぐらい開催しているのですが、活動ができるのも多くのスポンサーさんのお陰です。今後もそういった活動は継続してできるようにしていきたいと願っています。

本当に御殿下でサッカーを始めてよかったと思 っています。僕らが高校生の時の部活はある意味 軍隊みたいな感じでした。もしかしたら強豪校と 呼ばれるところは、当時そういった感じが多かっ たかもしれません。そこしか知らなかったら、指 導者になってもスパルタ的な指導者になってしま う。僕は、サッカーのベースは楽しくなければい けない、楽しくなければサッカーではないと思っ ています。いえ、サッカーだけではなくすべての スポーツが楽しいものなのです。スポーツの大事 なところは、まさに御殿下で教えてもらいました。 だから御殿下でサッカーを始めた人は、今でも継 続してサッカーをやっている人が多い。なぜなら ばサッカーは「競技」だけではなくて「楽しむ」 ことが1番のベースにあるからです。御殿下ス クールの1期生の方が集まって社会人リーグで シニアサッカーを始められました。やはり、ベー スは楽しいからです。

# これからの東京大学に 期待すること

今回は東大ア式創部 100 周年と聞いています。 そして来年は御殿下スクールが出来て 50 周年です。本当におめでとうございます。

これからの東大に求めるものとしては、早稲田 大学などは大学院で社会人がスポーツビジネスを 学べる機会を設けていますが、ぜひ東大の大学院 でもスポーツビジネスが学べる場所があればと思 っています。スタジアムを中心とした街づくりが できるとか、スポーツがもたらす可能性は凄くた くさんあります。それを大学とか大学院で学べる ような場所を作って頂けたら嬉しいです。

僕の祖父は東大農学部の教授でした。父も東大の教授だった。でも僕は先生の仕事には全然興味がありませんでした。人に教えることより、世の中に出ていったほうが、より多くの学びがあるだろうと考えていました。でも、ある程度歳をとったらどこかで最後は教える側になりたいと思うようになりました。今まで培ったもので世の中に貢献していきたい。僕の最後のゴールは、実はそのあたりに置いています。親子三代で先生になる、そして御殿下で教えていただいた「スポーツのベースは楽しい」ということを多くの人に知ってもらえたらと思っています。

2018年4月13日、浦和レッズクラブハウスにて 聞き手/構成:上野直彦



# 地域交流——御殿下サッカースクール 御殿下少年サッカースクール 一期生同窓会

池田吉彦 (昭和52年卒)

創立50周年を迎える御殿下少年サッカークラブの第一期生の同窓会が浅見先生、戸苅先生をお招きして2018年1月に都内で行われ、一期生幹事の竹内さんのお誘いを受けてLB関係者も出席しました(写真1、2)。スクールの創生期については既に90年誌にも書かれていますが、今回改めてお聞きした話も含めて100年誌へ寄稿させて貰います。

当日の出席者19名は次の通りです。

- 浅見先生、戸苅先生(および奥様、お嬢様)
- 一期生:竹内、新庄、佐藤、伊藤、中川、酒井、福沢、椎名の8名(敬称略)
- 青田マネージャー(旧姓黒崎さん)
- ア式現役:出戸、小尾(女子部/スクール幼稚 園コーチ)佐原(女子マネ/スクール会計)
- LB:吉澤 (S50) 池田 (S52) 和田 (S58)

一期生の皆さんからは当時の思い出とともに近 況報告で、60歳を迎えて皆でサッカーチームを 作り東京都シニアのクラウンリーグ(O-60)一部 で活躍中という話がありました。チーム名は「桐 鏡(とうきょう)グラナータ」。

「桐」は当時の教育大附属中学、「鏡」はお茶の 水女子大学附属中学、両校のサッカー部の OB が



写真1 当日のひとこま

合体したチームです。当時御殿下少年サッカーも 先ずは文京区内の国立小学校から生徒を集めたよ うです。ちなみにグラナータはイタリア語で「熟 したザクロ」という意味で、若返りという意味も あるそうです。

試合にはわざわざ北九州から駆け付けるメンバーもおられるということで、皆さんの変わらぬサッカーへの情熱を感じました。

戸苅先生は奥様、お嬢様も出席されました。お嬢様は先生と一緒に御殿下に通われ、後に大学入学後は5年間スクールのマネージャーをされました。

先生のご子息二人も同じくスクールの出身で、 お一人は現在浦和レッズにお勤めで、100年誌で もインタビュー(別稿掲載)をお願いしました。

また竹内さんからは当時の貴重な写集が披露されました(写真3)。安田講堂をバックにボールを蹴っている二人は竹内さん(右)と同じく当日出席の椎名さん(左)です。二人にとってとても大事な写真とのことでした。竹内さんからは当時のスクールの写真を頂きました(写真4、5)。兵頭さんから頂いたその後の写真(写真6)と合わせここに掲載します。



写真2 浅見先生のお話を拝聴

青田さん(旧姓黒崎さん)は東京女子大学3年の時に浅見先生から誘われスクールの初代女子マネを務められ、毎週日曜に御殿下に通い、のちには日本蹴球協会に勤め、天皇杯の決勝で野津会長(当時)の優勝トロフィー授与の手伝いをしたというお話がありました。

2016年にLBから運営を引き継いだア式の現役から、現在の生徒の登録総数は約200名、毎回80名ほどが出席し現役部員4~5名がコーチとして指導しているとの報告があり、戸苅先生が書かれた「御殿下サッカークラブの現状と課題」(『体育の科学』1971年)に創生期の生徒数が100



写真3 御殿下での基本練習。右が竹内さん、左が 椎名さん。(1970年春)



写真 4 検見川合宿。全日本選手の指導を受ける。(1969年初夏)



写真5 代々木の青少年センター(旧オリンピック 選手村)合宿。(1969年夏)



写真6 もうすぐ50歳を迎える一期生、浅見先生古 希のお祝いに。御殿下 (2005年夏)

#### 少年サッカー教室の指導にあたって(父兄の皆様へ)

御殿下クラブ 浅見俊雄

#### (要旨)

#### 少年サッカー・スクールの目的

1. 『身体活動の場として』

子供たちに存分にあばれまわってもらう場所と機会を提供すること。

- 知的能力の偏重は子供の体力の面に暗い影を投げかけている。
- ・少年時代の身体活動は単に身体の発育・発達に有意義であるだけでなく知的・精神的発達にもより良い影響がある。
- また将来の生活態度や行動形態、身体観・健康観ひいては人間観へも大きな影響を与える。
- 2. 『サッカーをより広く正しく理解してもらう場として』
  - サッカーは身体活動にとって実にすばらしい材料。
  - 世界の人々にもっとも愛好されているスポーツであるサッカーは最も優れた文化遺産。
  - 日本のサッカーが一時のブームでなく今後の生活の中に定着して欲しい。サッカーの持っている良さ、 文化としての高さをもっと多くの人に理解、かつ正しく知ってもらいたい。
- 3. 『より良き人間関係を作るために』
  - よい人間関係がスポーツの指導を通して作られるかという実験の場。
  - チームスポーツは全体の中での個人の役割、ある状況の中で自分は何をすべきかなど人間関係の具体的な表出の場。
  - そこで作られる人間関係はスポーツの中にのみ留まらず広く社会生活の中にも適用するものになりうる。
  - サッカー技術だけでなく社会性の健全な発達も指導の目標としたい。

#### 少年サッカークラブの設立を目ざして

- 1. 大きな夢:欧米にみられる「スポーツクラブ」を日本にも実現したい。
  - 地域社会を基盤とした誰でも気軽に楽しめるスポーツの場としてのクラブ。
  - 「御殿下クラブ」も将来は色々なスポーツに老若男女を問わずに参加できるクラブとして発展させたい。
- 2. その第一歩として「少年サッカークラブ」の創設を検討してきた。

この「教室」を契機として近い将来念願の「少年サッカークラブ」を実現すべく準備を進めている。

~120名、常時出席者が70~80名、そして90年誌の兵頭さん(850卒、入学以来40年以上サッカースクールを主導された)の寄稿に会員200名以上とあるのをみますと、50年にわたり毎週日曜の午前に同じ規模でスクールが開催され続けたというのはある意味驚異的で、関係された方のご苦労は大変であったと思います。

そして浅見先生からは 1969 年当時の「少年サッカースクール指導書」が紹介され、東大紛争を経て開かれた大学を目指す中で開設されたサッカースクールの目的、欧米のような「地域を基盤とした総合スポーツクラブ」を将来構想とした等のお話がありました。

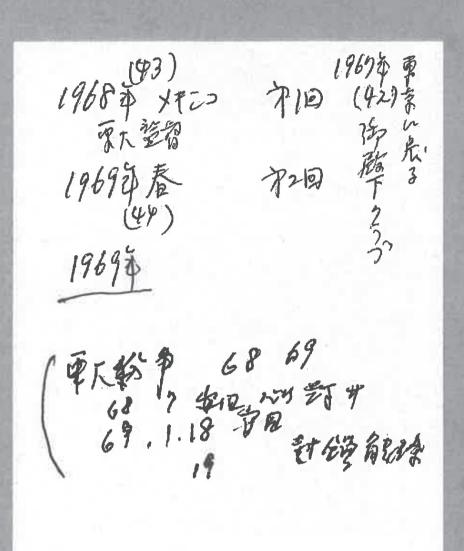
スクールのきっかけは東大紛争で、大学の意義 とは何か、勉強しているだけでいいのか、学問に 閉じこもっているだけでいいのか、地域との関係 はどうあるべきかという問いかけの中で自分たちにはサッカーがある、丁度東京サッカー友の会からも依頼があり駒場の戸苅先生、菊池先生と一緒に御殿下グラウンドで少年サッカースクールを開催されたとのことです。

スクールはエリートを育てるところではない、 健全な子供に育ってほしいという願いを方針とし て現在まで変わらずに続けてきたとお話がありま した。

末尾に「指導書」の概要を記して(池田要約) 併せて指導書の原文も掲載させて頂きます。

創立から50年を迎える御殿下少年サッカーがその創成期からの心意気を引続き継承し、浅見先生が理想としたスクールの実現に向け力強く進んでいくことを祈ってこの寄稿を終わります。

東京サッカー友の会 オ2回少年サッカースクール 指導 指導浅見俊雄



#### 筆者注:

これは指導書の表紙の裏に書かれた浅見先生の自筆メモです。ご自身の経歴と外的環境から 1969年に御殿下少年サッカーを始められた経緯がよくうかがわれます。

1967年:名古屋から東大に戻られ御殿下クラブの創設。翌年東大サッカー部監督。

1968/69年:メキシコ五輪を契機に第1回、2回東京友の会少年サッカースクールを開催。

1968/69年: 東大紛争

1969年秋:御殿下少年サッカースクール発足

### 少年サッカー教室の指導にあたって (父兄の皆様へ)

御殿下クラブ 浅 見 俊 雄

春になりました。いよいよサッカー・シーズンも開幕です。

今年も東京サッカー友の会主催の「少年サッカー・スクール」の 指導のお手伝いをすることになりました。この機会に少年達へのサ ッカーの指導についての私見をのべてみたいと思います。

#### o 身体活動の場として

最近のこどもたちの身体的な成長は目を見張るほどです。中学生でもうお父さんやお母さんの身長を追いこしてしまったなどという例はざらにみられます。しかし、外身の成長にともなって中身は充実しているのでしょうか。文部省統計などをみても、この点ははっきりと否定できます。昔に比べてとべない子、走れない子、ぶらさがれない子がふえているのです。肥満児などはその典型例といえるでしょう。

機械文明の発達は、人間の体力の面を機械によっておきかえていっています。しかも機械は人間よりもはるかに大きい力、速いスピードを出せます。労働力という意味では人間の体力は不用になっていくでしょう。しかし人間個人の健康や知的能力を支える基盤としての体力は、機械では代用ができません。

近年の教育の中での知的能力の偏重は、子どもの体力の面に暗い かげを投げかけているといえます。体力を向上させるためには身体 活動が必要不可決なものであることはいうまでもありません。少年 時代の身体活動は、単に身体の発育・発達に有意義であるばかりでなく、知的・精神的発達にもよりよい影響のあることが最近の研究によってたしかめられています。また将来の生活態度や行動形態、身体観・健康観、ひいては人間観といったものへも大きな影響を与えるものだといえましょう。「よく学び、よく遊べ」という言葉は、子どもの教育にとって実に適切な表現だと思います。

1

ところで、この「よく学び、よく遊べ」という生活習慣を、現在の社会の中で、特にこの東京の都会の中で実践できるでしょうか。 道路は車に占領され、広場も少なく、学校の校庭もそう自由には遊べません。昨年友の会の牛木君が、サッカー・スクールの件で本郷近辺の小学校をまわったところ、ほとんどの校庭が「自転車乗り、野球、サッカー禁止」だったと苦笑していました。狭くてしかも舗装されているので危険だというのでしょう。子どもたちにとってのびのびと思い切って体を動かせる場所はほとんどないといえます。

この少年サッカー・スクールの一番の目的は、子どもたちに存分 にあばれまわってもらう場所と機会を提供することにあります。学 校教育以外の場所での子どもの身体活動について、われわれはもっ ともっと関心をはらわなければならないと思います。ですからそこ でやることは何もサッカーでなければならないということはないの です。

#### O サッカーを正しく知ってもらうために

ではなぜサッカーをやるのか、答えは簡単です。このような考えをもっている私自身にサッカーなら指導できる能力があり、そして 私のまわりのサッカー仲間に同じような考えをもち、情熱をもやし ている連中が沢山いるからです。前述のような考えをたゞ問題提起 して投げかけるだけでなく、私自身が実践できる分野でその問題 の解決にとりくむことのできる教材がサッカーだということなのです。

そして(このへんは我田引水の気味はありますが)、サッカーは子どもの身体活動にとって実にすばらしい材料だという信念が、もう一つの大きな理由でしょう。学校教育以外の場での身体活動は、子どもが強制されていやいややるようなものでなく、自発的に、興味をもっておこなえるものでなければ、効果も、永続きも期待できません。その意味でサッカーは、歩くことさえできればまったく技術がなくても、老人も幼児も楽しめるゲームであるといえます。そしてさらに技術が高ままるにつれて一層興味は深まるといったゲームです。ふだんは身体の移動にしか使っていない足で、まるいボールの動きをコントロールしようというところに、一番動きの器用な手の使用を禁止しているところに、技術的な深みがあるのだといえます。スポーツは人類の作り出した偉大な文化ですが、その中でもサッカーはもっともすぐれた文化遺産だと思います。世界の人々にもっとも愛好されているスポーツはサッカーであるという事実が、このことの最良の証明でしょう。

日本のサッカーも、たんに一時的なプームにわいているのではなく、今後の生活の中に定着していくものと私は信じています。サッカーの持っている良さ、文化としての高さをもっと多くの人に理解してもらいたい、それも正しく知ってもらいたいというのが、この教室のもう一つの狙いです。こゝで身につけたものが、将来の生活しの中で役立ってくれるであろうことを期待しているわけです。



#### o よりよき人間関係を作るために

そしてもう一つ、よい人間関係がスポーツの指導を通して作られ るかという実験の場として考えてみたいと思います。よくスポーツ をしさますればよき人間関係がえられるなどというますが、それは 間違っています。スポーツの総本山である体協のみにくい派閥争い をみれば、このことはよくわかると思います。しかしスポーツ、特 にチーム スポーツは、全体の中での個人の役割りとか、他人との 協力とか、ある情況の中で自分は何をすべきかなど、人間関係の具 体的を表出の場であります。それを単にスポーツの場での現象とし てとらえる の で はなく、社会の中での現象の一つの具体例として とらえて指導するならば、そこで作られる人間関係は、スポーツの 中でのよき関係にのみとどまるのではなく、広く社会生活の中にも 適用するものになりらるのではないかと考えているのです。私や私 の仲間にそれだけの能力があるかどうかはうたがわしいのですが、 単にサッカー技術の指導というだけでなく、社会性の健全な発達と いうととをも目標にして指導したいと思っています。

以上のように、身体活動の場として、サッカーをより広く正しく 理解してもらう場として、よき人間関係を作る場としてこのサッカ ー教室を考えていますが、今回の6回の指導ではそのいずれもが中 涂半端どころか、入口にもはいれないで終ってしまうかも知れませ ん。この目的を達成するためには、どうしてももっと長期の「教室」 が必要でしょう。



↑ o 小年サッカークラブの設立を目ざして

私たちは以前から大きな夢をもっています。それは欧米にみられ

るような「スポーツ・クラブ」を日本にも実現してみたいということです。学校や企業の枠の中でのスポーツではなく、地域社会を基盤とした誰でもが気軽に楽しむことのできるスポーツの場としてのクラブです。御殿下クラブも、そうした意味でのクラブとしてできたものです。現在のところ若手のサッカーと、中・老年のゴルフの2種目しか行なっていませんが、将来はいろいろなスポーツに、老若男女を問わず参加できるクラブとして発展させたいと願っています。その第一歩として昨年から「少年サッカー・クラブ」の創設を種々検討してきました。そこえ東京サッカー友の会から今回の「サッカー教室」の話がきたものですから、喜こんでお引き受けした訳です。この「教室」を契機として、近い将来念願の「少年サッカー・クラブ」を実現すべく、準備を進めております。その節は、以上のような趣旨に御賛同下さる方々が御参加下さることを期待しております。

以上長々とのべて参りましたが、要は楽しくのびのびと体を動かす中で、正しさを狙ってサッカーを指導していきたいということです。一応対象は少年少女と限っていますが、身体活動は大人にも必要なものですので、お父さんお母さん方も、子どもたちと一緒にボールにたわむれることをおすゝめします。近頃あちこちで子どもとお母さんチームのサッカー試合が行なわれているのを見たり聞いたりしますが、なかなかほゝえましいものです。

こうして親子<u>緒に遊ぶ中からも、よき人間関係が助長されるも</u> のと思います。

大風呂敷を広げたような文章になりましたが、日標の達成、夢の 実現のためへの努力をわたくしたち自身に強いる文章として御理解 下さい。指導にあたりながら、わたくしたち自身もいろいろ勉強し ていきたいと考えておりますので、よろしく御鞭撻のほど関係各位 にお願い申しあげます。 - 6 -

# 地域交流——御殿下サッカースクール 御殿下少年サッカースクールでの思い出

#### 藤井幹也

東京大学ア式蹴球部が設立から百周年を迎えられたとのこと誠におめでとうございます。私、藤井幹也と申します。息子の大稀(たいき)が御殿下少年サッカースクールでお世話になっておりました。今回、吉江先生から寄稿の機会を頂きまして大変光栄に思います。

息子の大稀は2015年12月(3歳)から2017年8月(5歳)までの約2年間お世話になっておりました。2016年4月からは山本コーチの指導体制に変わり、他の部員の方々とも協力しつつ子供の気持ちを上手にリードした、とても楽しいサッカースクールでした。

就学前の子供はまだ集中力が短いところ、山本コーチは子供にとって面白い様々なメニューを用いて、いかに楽しくサッカーができるかを考えてくださったように思います。ボールを蹴るだけでなく、ボールを持ちながら走ったり投げたりと子

供がボールで楽しく遊ぶこと、また、ミニゲーム でも点を取る楽しさを教えていただきました。お 陰様で息子もサッカーが大好きになりました。

当時、山本コーチは学生でいらしたと思いますが、毎週日曜日の午前中をコーチ業にあてるのは、自分の学生時代や仕事で接する学生と比較しても強い責任があるからできることだと感心しておりました。

現在は大阪に越してきてしまい御殿下サッカースクールには通えなくなってしまいしたが、大稀はこちらでもサッカーを続けています。いつか、また山本コーチと会える日があることを家族共々願っています。

最後になりますが、御殿下少年サッカースクールを運営してくださった皆様にお礼申し上げます。 本当にありがとうございました。今後、ますます の発展をお祈りしております。



大稀くん(藤井さんのご子息)と山本コーチ

# 地域交流——御殿下サッカースクール 座談会:御殿下サッカースクールのこれから

#### **山本 健**(平成 30 年卒)

#### 1995年12月8日生まれ。2014年 入学、現在ア式蹴球部には0Bコ ーチとして関わり、御殿下少年サ ッカークラブでは2016年から1年 半、学生コーチリーダーを務めた。

### 細井 隼 (学部3年)

#### 1996年8月13日生まれ、2016年入 学、機械工学専攻。現在大学3年生。 御殿下少年サッカークラブでは現 在学生コーチリーダーを担う。

# 利重孝夫(昭和63年卒)

ア式蹴球部総監督。2016年4月 からは御殿下サッカースクール責 任者としても、毎週日曜朝の学生 コーチ陣と地域の子供たちとの交 流を見守り続けている。

# 浅見先生、兵頭先生の 教えを今も受け継ぐ

――まず前半は現役学生の御二人にご質問させて いただきます。いつからサッカーを始められ たのですか。

山本 7歳の時からです。リレーの選手になりたかったのですが、足の速い友達がいて普段何をしているのかを聞いたら「サッカーをしている」と答えたので始めました。そこからサッカーにハマりましたね。

細井 僕は小学3年生から始めました。

――ア式蹴球部でのポジションは。

山本 右サイドバックです。でも、大学3年生の6月には選手からスタッフに転向しました。自分の実力が不足していてAチームに出られないことで辞めるか続けるかを悩んで、一度休部をしたのです。でも"ア式で勝ちたい"という思いが日に日に強くなり、自分の出来ることをスタッフとしてやろうと決意してスタッフに転向しました。

**細井** 僕はミッドフィルダーです。ア式蹴球部に入った時の印象は正直言って東大生なのに意外と みんな上手いなと感じましたね。

山本 僕はもともと入るつもりでいたので、レベルの高さは知っていましたね。

**細井** 僕は、福井県から出てきたので全くア式のことは知らずに入部しました。

――山本さんは、御殿下サッカースクールではど ういう仕事をされていたのですか。

山本 学生コーチ陣のリーダーとして運営を引っ 張ってきました。大学2年生の終わり頃から約2 年間です。

――浅見先生や兵頭先生がおっしゃっていたのですが"技術がどうとかではなく、とにかく楽しくやろう"という考えのもとスクールを運

営していたようですが、山本さんの関わって いた2年間はどうでしたか。

山本 変わらずその考えでやっていました。まずはサッカーを好きになってもらう。上手くなってもならなくてもよいから、とにかく楽しんでサッカーを好きになってくれればと。サッカーの楽しさと一言で言いますが、人それぞれあるので何でもよいと思っています。なかにはサッカーがもっと上手くなりたくて、他のクラブに行っちゃう子もいましたよ。だから文京区のクラブが集まるよんでする。でもそれはコーチとして、嬉しいことですね。

一一何歳くらいのクラスを担当していたのですか? 山本 僕は、一番下のクラスです。年齢的には早い子で3歳や4歳から入っている子もいます。主に年長さんから小1くらいまでの子供たちでした。 全体的には現在3クラスあり、幼稚園クラス、小学生低学年のクラス、高学年と大人クラスという分け方です。おおまかな分け方ですが、基本的には子供たちが行きたいクラスに行くという感じでしたね。

細井 僕は、低学年のクラスでした。

# いろんな子供がいますが、 それでいい。

――サッカーの指導をすることに初めは戸惑いませんでしたか。

山本 おっしゃる通りで、最初は子供たちとどう接したらよいのかさえ分かりませんでした(笑)。でも子供たちと関わっていく中で学んだのは、遠慮はいらないということです。子供は勝手に楽しんで、勝手に上手くなっていきます。泣きじゃくっていても、そのまま少しの間見ていると自己解

決をしている。本当に危ない時などはもちろん対 応しますが、基本的には自由にさせていましたね。

あとはいろんな個性の子供がいるなと感じました。コーチのことが好きな子もいれば、友達同士 で遊ぶのが好きな子もいる。サッカーそのものが 好きな子もいれば、親が好きな子もいる、本当に 様々です。ですから子供に合わせて声かけなどは 変えていました。

細井 僕が担当していたクラスの年代は、割と反抗してくるヤンチャな子がいて、指示の声も聞かない子がいっぱいでした。それを統率するのは大変です。1人が聞かないと、2人3人と聞かない子同士で絡みだすのです。そういう時は大きな声で"聞いて!"と。コーチが3人ほどいるので1人が説明して、後の2人は子供たちを集める係になるなど工夫をしました。

――指導をしていて、逆に子供たちから学んだことはありましたか。

山本 選手として僕自身が苦しんでいた時に、スクールではコーチとして子供たちにサッカーを教えていたんですね。その時に子供たちを見て、サッカーって純粋に楽しいものなんだなとつくづく感じました。それは今も毎回スクールに行くたびに実感しますね。あとはスキルとしてですが"空気を読む"ということを学びました。子供の顔を見ると、付とが盛り上げなきゃいけない場面や、盛り上げは必要ない場面などと様々な場面があるんですね。しっかり準備をしていくんですが、準備通りには絶対いかない。そこで臨機応変に対応が出来るようにはなりましたね。臨機応変に子供のリアクションを見て盛り上げどころなどが本能的に分かるようになりました。あとは、大らかになりました。何をされても許せるようになりましたね。

――コーチをしていて楽しかった、忘れられない 経験はありますか。

細井 ある保護者からの声です。ウチの子は運動が苦手だったけど、御殿下サッカースクールだと楽しくサッカーをやってくれるので助かっていますと言われ、本当に嬉しかったです。あと、ある男の子がずっと内気な性格で消極的だったけど、体育の授業でサッカーをする時に手を挙げてキャプテンに立候補したというお話も聞いた時はビックリしましたね。とても感激しました。サッカーを通して明るくなれたと。

――練習メニューもかなり受け継がれているので

すか。それとも今風にアレンジされていますか。 山本 アレンジしまくりですね。練習メニュー自体を始めたのも、僕が受け継いでからの2年前からなので。それまではずっと試合しかやっていませんでした。初めての子にとってはいろいろとやった方が良いかなと考えて、その場その場でアレンジして行っています。

――ちなみに現在はどのような練習を主体にして いますか。

**細井** 基本は自由に出来ることを意識していて、厳しいルールを決めず、子供たちが自由に何でも出来る環境で進めています。ゴールが2つあるので空いている方を攻めてほしいという意図は大きな声で伝えながら、あとは自由に考えさせてやっています。

練習内容は完全にオリジナルの時もありますし、 サッカーのコーチングの本を読んで参考にしてい ます。工夫してオリジナルに自由度の高いものに していますね。

例えば、椅子取りゲームのボールをドリブルするバージョンの練習です。円の外を子供たちにドリブルさせて、円の中に複数の色のコーンを置いて、コーチが笛を吹いて色を指定して、その色のコーンに一番早くついた子供が勝ちというゲームです。これは結構盛り上がりましたね。

一練習や試合以外で何か他の活動はありますか。 山本 合宿ですが、今シーズン僕たちがコーチになって初めて行きました。去年の8月です。山中湖の東大セミナーハウスに2泊3日の合宿です。 最後、子供が帰りたくなくて泣くぐらい楽しい合宿となったんですよ。

そもそも場所が良くて、湖でも遊べますし、グラウンドもずっと使えます。夜はBBQや花火もやって。なかには合宿だけ参加の子供もいて、その2週間後には入会していましたね。本当に好評だったので今年もぜひやりたいと思っています。

──公式戦を含めて試合はどのようなものがある んでしょうか。

山本 毎年3月にライオンズカップという大会があります。参加したい人だけが参加するんですが、毎年子供の数が集まらなくて出られない時もあるんですが、今年は早めに集めたら全学年参加が出来ました。

やはり御殿下サッカースクールは技術よりも楽 しくやることを目的にしているので、あまり強く なく勝てないんですけど、今年は初めて勝利した んです!何十年ぶりかの勝利だったんですよ。

# コーチとして 目指すものとは

──指導者の何気ない一言で、子供の態度や姿勢 が変化していくのが目に見えて分かることは ありましたか。

山本 僕が特別何かを教えたということはないのですが、一週間で勝手に上手くなる子がいたんです。きっかけは不明でしたが、明らかに変化した。例えば消極的だった子が突然積極的にプレーしたりなどもありました。ゴールを取るのが楽しいと知った時や、ドリブルが出来るようになった時など、そもそも何か新しい体験をして変化している場合が多いですね。

――コーチが大変というより、楽しまれている印象を持ちますが。

山本 そうです。実際それほど大変だったことはありませんでしたね。指導というより、事務的なことでメールの対応などは大変でしたが、実際にフィールドで教えることにストレスはありませんでした。逆に、僕のストレスの解消になっていたかもしれませんね(笑)。

――スクールの子供さんとは卒業後に連絡を取ったり、会ったりなど交流はありますか。

山本 僕の場合、一番下のクラスの小さい子供たちを教えていたので、卒業して連絡をくれる子はそんなにいないです。だけど、この間小1で辞めちゃった子に、コーチのことは好きだったよと言われたんです。サッカー自体はあまり合わなかったみたいですが、僕のことは好きだと。嬉しかったですね。

# 2019 年に 50 周年を迎える 御殿下スクール

――御殿下サッカースクールは来年 50 周年を迎えます。これからも続いていくなかで、実際にコーチを体験して課題は何でしょうか。

山本 まず、グラウンドのキャパシティーが課題です。今は気軽にサッカーを始めたいという子供たちが多いのですが、特に文京区は子供たちの教育に力を入れているので子供達が想像以上にたくさんやってきます。それは大変嬉しいのですが、御殿下グラウンドの全面ではなく半面で100人く



細井隼(左)、山本健(右)

らいが練習している状態なんです。そうすると結構広さがかつかつなんですね。グラウンドが小さくて人と人との距離が近いと子供の場合怪我も増えちゃうので、グラウンドが課題ですね。

あとは、僕らは学生ということもあって親御さんとのコミュニケーションが結構雑になることがありました。直接話す機会があまりなく、メールでのやり取りが多かったんですが、1回で上手く伝わらなかったことが何度かあります。親御さんから不安な点などメールで頂いたりするんですが、実際現場を見てみないと分からないことが多いですね。ですから、子供たちを連れていらした時に実際会って直接コミュニケーションを取れる機会が増えればと思っています。

細井 僕が課題だと思っているのは、御殿下サッカースクールは練習が週に1回しかないので、他のサッカースクールと比べると頻度が少なくて、そのせいで子供同士が名前を覚えられなくて仲良くなれないことですね。僕たちコーチは子供たちの名前は覚えるんですけど、子供たち同士は新しい子もどんどん入ってくるので覚えられていないことも多い。小学校だと毎日会って遊びから覚えるけど、スクールは週1回です。せっかく集まっているから、サッカーを通して縁を広げていってほしいと思いますね。

――今後、御殿下サッカースクールをどうしてい きたいですか。

**細井** 子供たちが僕らを憧れるというか、僕たちみたいになりたいと思って東大に入学して、自分が育ったサッカースクールで次はコーチとして子供たちを指導するような、そういう子が出てきたら嬉しいですね。

山本 僕の場合は文京区のサッカー少年少女が全

員御殿下サッカースクールを経由してサッカーを始めてくれたら、意義がもっと分かるんじゃないかと思います。サッカーを始める、その一番最初に御殿下サッカースクールの存在があれば凄くいいなと思います。他のクラブよりも凄く楽しんでサッカーをしているのは実際にコーチをやっていて強く感じます。サッカーをしなくても、見るのが好きでもいいんです。文京区の子供たちが御殿下を通して、将来サッカーを続けなくても好きな子が増えていくだけでいいんです。ぜひ、OBの方の子供さんや、OBの方にも一緒にプレーしていただきたいですね。

細井 そうですね。御殿下サッカースクールは楽しむことが第一。文京区の子供たちにとって気軽な遊び場所みたいになって、日曜日の朝に来てほしいです。年に1回ライオンズカップがあり、その試合で他のチームの子のプレーなどを見てもっと上手くなりたければ、移籍する子がいてもいいと思います。御殿下サッカースクールをどんどん経由していってもらったら嬉しいですね。

山本 あと、もっと女子が増えたらと。現在は5 人ほどしかいませんし、だいたいは小学校に上が る時に辞めちゃうんですね。今は女性コーチの導 入など対応を進めています。

利重 実際に練習を見に来てもらえればすぐ分かると思いますが、山本に限らず学生コーチがいい感じで子供たちからイジられていて。御殿下サッカースクールは「東大LB会」の事業という括りになっていますが、今後もOBはスクールの活動にコミットし続けていきます。

――子供たちを指導していて、子供は何を望んで スクールに来ていると感じますか。

山本 子供によって大きく異なると思います。サッカーが好きな子、上手くなりたい子や友達やコーチに会いたい子、親御さんに連れて来てもらっている子など様々だと思います。強いて言えば、サッカーには楽しい要素がたくさんあるので、サッカーを楽しみに来ているのだと思います。

細井 子供たちにとっては思いっきり身体を動かして遊べる、その環境を一番望んでいるのだと感じています。僕は福井県の小さな田舎町で育ちました。家を出れば大きな庭があって道路も滅多に車が通らないので、子供の頃は近所の友達と毎日外で鬼ごっこをしたり、サッカーをしたりと外で遊べる環境がありました。一方で東京は、人通り

も交通量も多いので子供たちはなかなか外で遊べません。御殿下サッカースクールは、そんな子供たちのために、日曜日の朝の短い時間ではありますが、開放的に遊べる場を提供することが1つの大事な目的と考えています。

利重 今も子供同士、親同士の口コミや紹介で入ってくれる子が増えていて、それがスクールの自信にもなります。子供たちの心に響いているんだと思うと、これほど嬉しいことはないですから。文京区の子供たちにとっても、東大の学生にとっても、今後も学びの場になっていければ良いなと。実にサッカーならではの交流機会だと思いますし、サッカーのチカラだと思っています。

――現代は子供たちのニーズも多様です。コーチ側 はどのように応えようと取り組んでいますか。

山本 要望の多くは、サッカーへの参加という点でした。自分は幼稚園を担当していたので、体格やレベルが大きく異なり、サッカーを楽しめない、参加できないという問題がよく発生します。子供一人一人に対して働きかけを試行錯誤し、性格に応じて対応を変えるようにして楽しめるようにしました。サッカーに参加出来ない子供用のコートを即席で作ったりもしましたね。

細井 その点は御殿下サッカースクールの課題の1つだと思っています。このスクールは他のサッカークラブと違って、上手くなることよりも楽しむことを重要視しています。サッカーが上手い子にとっては、少し物足りなさがあるかもしれません。でも、運動が苦手な子でもこのスクールではサッカーを楽しめるところが、最大の特徴でもあり、実際に親御さんからも感謝の声をたくさんいただいています。今後もこのような形でスクールを続けていきたいと思っています。

利重 親御さんへの対応なども学生が中心になって進めています。基本的にコーチたちで話し合って、考えて対応していく、これが大事かなと思います。来年はスクールが創設されてから50周年を迎えますが、浅見先生や戸苅先生、兵頭先生の教えを引き継ぎながら、常に新しいことにもチャレンジしていきたいですね。大学が運営するサッカースクールとして、地域に根ざして、地域に開かれた形で、これからも子供たちや親御さんとの交流を進めていけたらいいですね。

2018年4月26日、ア式蹴球部部室にて 聞き手:上野直彦

# 次の 100 年に向けた新たな動き6

# この10年の軌跡

次の 100 年に向けた新たな動きとして取り上げた、生涯サッカー、国際交流、女子部創設、地域交流という4つの大きな流れと、その活動を補完し、支える動きがあった。その主なものを、文字通り「この 10 年の軌跡」として取り上げた。

とくに「新部室の建設」は、足掛け5年に及ぶ大プロジェクトであり、LB 会の総力をあげて取り組んだもので、図らずもこの創部 100 年の年に供用開始となったものである。長きにわたる大学との折衝を通じて、大学側の、ア式蹴球部とLB 会の対する信頼は、さらに強固なものとなった感がある。この点では、5年という歳月を要したものの、ア式蹴球部のこれからの歩みに大いに貢献するであろう足跡を残せたのではないか。 (武田)

## この 10 年の軌跡①

# 新部室完成に至る長い道のり

吉澤伸明(昭和50年卒)

現在(2018年4月)の部室は、東大LB会が建設費の大半を負担して完成し、3月にお披露目をしたばかりのピカピカの新部室である。旧部室は、LB会と大学がほぼ半額ずつ負担しあって、1989年、平成元年3月に完工したもので、わずか30年足らずで使命を終えることになった。その顛末を以下にたどり、多くのLB会員の協力のもとで、長い困難を乗り越えてやっと新部室ができたことを、LB会・ア式蹴球部の歴史の一コマとして、皆さん、特にこれからの現役諸君に知ってもらえれば、有り難い。

#### 2013年(平成25年)

#### 新部室建設の気運~寄付のよびかけ

3月の総会で、武田副理事長と宮路事務局長の 2人が新任理事として選任され、これに筆者が加 わり新部室建設プロジェクトを担当することにな ったことから始動することになる。

その大きな要因は、前年(2012年)に、大学当局が、東京都から、建築確認申請を怠った未申請建物を撤去せよとの要請を受け、その一つである旧部室を、5年以内に撤去するとの決定を行ったからである。一方、サッカー部サイドとしても、築25年(補修は一度もせず)を経過し、前年の秋



完成した新部室の外観

の大雨の時に雨漏りが発生。またテニスコートの間の樹木が成長して、屋根の庇を損傷するなど、補修個所が目立ってきたこと。さらに、部員が100名を超え手狭になっていたことなど、新部室への機運が盛り上がっていた。

旧部室が建設されたときに、未申請とした責任は、すべて大学にあるものの、大学の財政事情は(独立行政法人になって以来)非常に厳しく、課外活動向けの予算は縮減されるばかりの状態であった。そのような中で、LB会として、建設費の半分程度(5千万円と仮置きして、2500万円)を寄付して、大学を動かし、早急に建替えを行うことが最善と判断した。

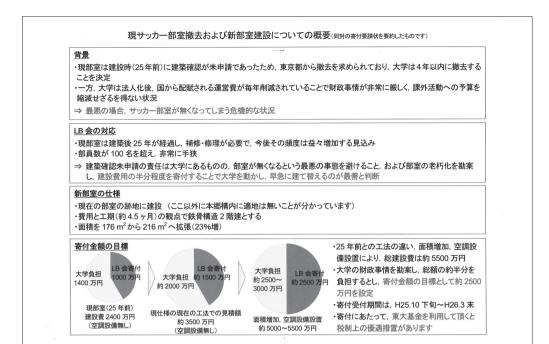
8月には、浅見理事長と鹿園部長連名で、当時の長谷川(学生担当)理事・副学長宛に「ア式蹴球部部室建替えの要望書」を提出し、LB会からの寄付金を活用する前提で、大学予算の確保を強く要望した。

10月になり、LB会員全員に宛て、浅見理事長、 鹿園部長の連名で、「東大ア式蹴球部部室建替え 資金ご寄付お願いの件」<sup>(注1)</sup>を発送。半年を目途 に 2500万円を目標に、税制優遇のある大学基金 を活用した寄付活動を開始した(寄付金額は「1口 5万円として二口以上を原則」とした)。場所は現在の 所に建替えで、面積は 2 割増し(176 → 216 m²)、 2 階建て鉄骨構造。10月、12月に年度別代表者 会議を開催し、寄付を呼び掛けた。

(注1)配布した鹿園部長作成の「現サッカー部室撤去および新部室建設についての概要(同封の寄付要請状を要約したもの)」を、別紙として添付しています(次頁)。参考までにご参照下さい。

# 2014 年 (平成 26 年) 大学との膠着状態〜打開の働きかけ

1月には、2500万円の寄付目標を上回り(160人)、LB会として多額寄付で、大学へ働きかけを



別紙「現サッカー部室撤去および新部室建設についての概要(同封の寄付要請状を要約したもの)|

強めたが、2014年度の大学予算に、建設費の半分を計上することは実現できなかった(他部との公平性から、ア式のみに予算配分は難しいとのこと)。そのような中で大学から、5年以内とした撤去期限は絶対ではなく、現部室の維持は大学として確約する一方、旧部室も含め本郷の課外活動拠点を第二食堂(二食)の増改築で吸収したいとの別案が出るなどの動きがあった。

LB会としては、しばらく部室は使えることにはなったが、依然、建替えの必要はあるので、寄付金(3月末で3000万円を達成)を、大学基金やLB会口座で大切に保管する一方で、4月以降も寄付の受付は継続する(3月末で、一つの区切りとして理事長名の礼状を発送)ことを3月の総会で決議し、以下のお願いをLB会員に行った。

- ①大学の財政状況はますます厳しくなる中で、 全額寄付による建設も視野に入れることが必 要。
- ②従って、4月以降の寄付の継続、とりわけまだ寄付を頂いていない6割強の会員への協力をお願することとした(この時点で、寄付者は基金で183名、28百万円弱、LB会口座で51名、3百万円弱、合計31百万円弱が集まった)。

大学側からは、キャンパス計画(2010年頃作成したもので、ア式やテニス部部室、テニスコート、農学部グラウンドの一帯は、将来、学生・教職員などの防災上の避難場所として緑地にする計画)があり、この計画変更の手続きが必要。また二食の増改築案では、ア式の大所帯を収容することは困難であり、弥生地区で、課外活動拠点の建設が必要であるが、用地手当ては極めて難しいなどの議論が出た。

そのような中で、LB会としては、大学に対して、以下の4点を見解として伝えることで、膠着状態の打開を図ろうとしたが、うまくいかなかった。

- ①違法建築であることは明らかであり、早期の 建替えを望む。
- ②寄付金は37百万円に達しており、大学の負担が難しいのであれば、全額負担での建替えをしたい。
- ③現在の場所での建替えをしても、景観の保全、防災、敷地の有効利用等の観点からみて、キャンパス計画の基本理念に抵触するとは考えられない。隣接のテニス部部室は、わずか10年前に建設されたもので、確認申請もしっかり行っており、撤去し、緑地にすること

は、現実的でない。

④寄付行為は、大学との合意を得て始めたものであり、新部室のための多額寄付を長期に放置しておくのは、大学として問題。納得のいく説明が必要。

#### 2015年 (平成 27年)

### 建替の正式承認~再度の寄付のよびかけ

前年に続き、2015年度の大学予算にも建設費の半分の計上は実現できず、大学の財政状態の改善が見込めない中で、袋小路に入った状態が3月まで続いた。

4月に五神新総長、南風原新学生担当理事・副学長への執行部交代が決定し、多額の寄付が集まりながら、2年以上に亘り放置しておくのは問題であり、何とかしなければとの思いが、学生支援課体育チームの赤井氏や渉外本部の石岡氏の間で高まり、二人のアドバイスを受けて、以下3点を3月の総会で決議した。

- 建替え資金は LB 会が全額寄付する (大口寄 付の見込みがある、まだ寄付をしていない会員 が 6 割近くいる、一部会員から再度の寄付もあ りうる等から全額寄付は可能と判断した)。
- 現在地での建替えを第一とする(ダメな時は、 大学に代替地を確保させる)。
- 寄付金の保全には万全を期し、交渉の内容を、 今後も都度、理事会に報告し、必要なときは 臨時の総会を開催して、方針を確認していく こととする。

この方針のもとに、LB会として新執行部への働きかけを強め、上述の赤井、石岡両氏が、学内で精力的に動いてくれた結果、8月になり、学生支援部から、①建替え費用全額の寄付、②確認書(当該部室の位置づけについては、大学と協力的に協議の上、大学の方針に基づくことを確認する)の提出の2点を条件に現在地での建替えを認めるとの提案がなされた。

LB会として早速8月23日に理事会を開き、確認書について議論し、学内の新規建物には一般的に義務化されていること、また、将来、万一立退きを要求されても、必要資金と利害関係者の多さから現実的でないなどの理由から、提出に応じることとした(浅見理事長、鹿園部長名で、南風原

理事副学長宛に提出)。

これを受け、9月1日の五神総長以下が出席した大学の役員会において、建替えの正式承認がなされた。ここに足掛け4年に亘る新部室建設について、学内承認が得られた。9月7日には南風原理事・副学長から浅見理事長に正式に伝えられた。大学としての正式決定を受けて、LB会として10月25日に臨時総会を開催し、以下の議論から、

入学としての正式状定を受けて、LB会として 10月25日に臨時総会を開催し、以下の議論から、 再度の寄付のお願いをすることにした。11月に 「東大ア式蹴球部部室建替え資金ご寄付再度のお 願いの件」をLB会員に発送した。

- ①建設費は、隣接の公衆トイレを建替えて、その2階部分を女子部の更衣室・シャワー室に充てる計画とし、その結果(現状の2割増しの)216m²から更に拡張した237m²にしたことと、及び、2年前に比べ資材費や工賃の値上がりがあり、従来の55百万円(撤去費除き)が65百万円強に高騰。
- ②一方、寄付金は約4千万円(254名)に達しているが、基金の15%は大学に納入する必要があり、(10%分のスポーツ基金への納入分については、建替えに使えるように交渉中ではあるが)、使用可能額は33百万円しかない。
- ③建設費 65 百万円強との差額 33 百万円を目標として、再度寄付をお願いせざるを得ない。

# 2016 年(平成 28 年)

#### 煩雑な手続き〜設計・施工業者の決定

振り返ってみると、2016年は、前年の大学の 正式決定を受け、学内の手続きを一歩一歩進めて いくうちに、各種の課題が噴出して、文字通りそ の対応に追われた1年であった。学内で建築物 を建てるためには、キャンパス委員会の下の植栽 部会の OK が必要。また埋蔵文化財調査が義務付 けられている。大学基金を使う際には、LB会の 全額寄付であるにもかかわらず、手続きがきわめ て煩雑で時間を要したこと。また、東京都との事 前協議で、隣接の地震研3号館の防火対策の不 備が発覚し、建設場所をテニス部寄りに変更せざ るを得なくなったこと(結果としてテニス部の倉庫 の移設が必要になった)等。これらに学内の各種 手続きや都との交渉にほぼ1年かかり、12月に やっと東京都の審査会に建築確認申請をできるま でになった(これがまた延期となるのだが…)。

まず寄付に関しては、昨年11月以来70名、566万円の寄付があり(内平成世代が18名、76万円)、寄付の総額は、大学基金に41百万円弱、LB会口座に460万円、計4540万円(寄付者は276名)に達した。3月の総会で、寄付については、寄付者が600名以上いる会員の半分には達していないので、今後も寄付の受付は継続することとした。

また、基本設計業者は、この3年間、設計や見積もりに協力してきた日東工営(株)が大学から指名され、基本設計が3月下旬に終了し、キャンパス委員会で承認された。以下が設計の主な内容である。

- 新部室の位置は4メートルほどテニス部寄りに移動(地震研3号館の防火不備で法定距離確保のため)。
- ・この移動に伴い、テニス部倉庫、物置小屋、 公衆トイレをすべて撤去し、そのスペースを 活用して、現部室 176m² から5 割増しの 257m² に増床することにした。1 階に部外者 用ロッカーと公衆トイレ、2 階に女子部の更 衣室・シャワー室及びミーティングルーム (小)を設置することとした。

その後の各工程は、実施設計、キャンパス委員 会承認、都・区との協議、建設工事業者の入札、 工事業者との工事価格決定、確認申請、新営工事 と多岐に渡るので、遅れが予想されるが、リーグ 戦終了後の着工を目指す。

なお寄付の継続とともに、大学に対して①撤去費の全額負担(未申請は大学の責任であるため)、②部外者ロッカー室と公衆トイレは公共部分なので、それらの建設費用の負担、③スポーツ振興基金に吸い上げる10%部分を建替え費用に充当させる、の3点を要求して交渉を行った。

その後、大学から、今回は小規模な建物であり、全額寄付金による工事であるため、実施設計・施工一体で業者を決定でき、決め方は、公開入札、特命契約 (注2) のいずれかを LB 会が選択できる、との開示があった。理事長・副理事長・事務局で検討の結果、特命契約を選択し、建替え検討開始以来 4 年間、状況が変わるたびに設計や費用の見積もりなどで LB 会に協力してきた日東工営 (株)を指名することにした。

(注2) 特命契約は以下のように行われる。

- 寄付者である LB 会が業者を指名する。
- ・設計・施工価格はLB会と業者との間で決める。
- ・大学は以上に基づき業者との間で設計・施工契約を結び、基金への寄付金により支払う。

特命の場合、価格は一業者との交渉になるので、 妥当性の判断が難しく手間も掛かるが、安心して 工事を任せられる業者を指名することができる、 着工もより早期に可能になる、などの点を重視し、 特命契約を選択した。特命契約選択の場合には、 ア式蹴球部支援基金への寄付金のうちスポーツ振 興基金に上納される10%部分についても、部室 建替えに使用できるよう学内合意を得たい、との 大学からの示唆があったことも特命の選択を促し た。この示唆は実現し、通常であれば基金への寄 付金のうち85%しか使用できないところ、95% まで使用できることとなり、基金への寄付金額7 千万円とすれば700万円の効果を得られること になった。

一方、LB会と日東工営との価格交渉は、この時点で合意できずに持ち越しになった。3月のキャンパス計画委員会で承認された基本設計に基づく日東の概算は、7,870万円、消費税込みで8,500万円。LB会は消費税込みで6,800万円を提示。交渉の結果、日東からの回答は消費税前で6,800万円であり、消費税分544万円が差として残った。

LB会が提示した消費税込み 6,800 万円は、寄付をお願いした 3 年前の目論見価格(解体費含む)5,500 万円から 1,300 万円、24%弱増加しているが、床面積が 216m² から 257m² に 19%増加したこと、および 3 年間の資材費、工賃の上昇分を加味したことなどによるもの。日東は、回答額の7,344 万円について、これ以上の値下げは、資材調達費の引き下げや仕様の変更をしない限り難しいとの考えを示し、引き続き交渉を継続することになった。

大学に対して解体費と公共性を有する部分(トイレや部外者ロッカー室)の建設費の負担を求め、交渉してきたが、財政状況が厳しく、上記の通り基金への寄付金について85%ではなく95%まで建替えに使えることになったことが、得られた精一杯の大学からの支援となった。

寄付金に関しては、建替え資金全額寄付を目指す際の後ろ盾となってくださった高額寄付者から、3千万円の寄付が行われることとなり、大学基金に72百万円、LB会口座に480万円、合計で77百万円もの金額が確保された。使用可能額としては、基金の95%分とLB会口座分を合計して72百万円弱となった。

# 2017年 (平成29年) 東京都による承認の遅延〜解体・着工

前年の12月に都の審査会に建築確認申請を行い1月着工する予定であったが、都から大学に対して以下の二つの指示が出され、その結果、大幅に遅れることになった。一つは、弥生地区構内にある多数の建築確認未申請建物すべての撤去計画の提出、いま一つは、同構内107棟の建物全ての日影規制確認のため高さや周長などの資料を提出すること。資料の作成に時間が掛かるため、大学は3月22日に開かれる審査会での受理を目指して作業。着工は4月、完工は9月となり、上記に比べ約3カ月遅れとなった。解体工事は2月20日に取り掛かり、2月末に終了し、3月1日には第1回の埋蔵文化財調査も完了。3月22日の東京都の建築確認申請を得るための審査会を待つばかりとなった。

しかしながら、審査会は OK が出たが、その後 東京都の建築課の担当者の人事異動により、再度、 各種の質問が出され、そのやり取りに大幅な時間 が掛かり、また同時に申請している野球部のブル ペン工事の質疑等に手間取った。

結果として、都の内部での承認が得られて、消防に回り、また都に戻って最終の建築確認申請の手続きが終了したのは7月末になり、大幅に遅延することになった。それから鉄骨等の材料を発



解体後の更地のテニスコート側に樹木6本あり(2017年4月3日)。

注し、お盆明けに最終の埋蔵文化財の立会を行い、 基礎躯体の工事を8月21日に開始した。この時 点で当初の計画から、実に8カ月遅れとなった。

その後工事は順調に進んだが、9月になり基礎 躯体工事中に、テニスコートとの間の樹木6本 (当初の計画では周囲の景観保全のため、保持が求め られていた)を、倒壊の危険があるということで、 安全確保を優先して伐採せざるを得ない事態となった。この伐採に関しては、施設部から日東工営 が、報告書の提出(10/13)と植栽部会長への説明(11/7)を求められ、かつ伐採費用(77万円) もかかり、大事になった。大変ではあったが、 2012年にテニスコートとの間の樹木が大きくなり、旧部室の庇が壊れ、雨漏りの原因となったこ とがあり、樹木が伐採できたことは、今後の維持 管理上、極めて有益であった。

# 2018年 (平成30年) 完工とお披露目〜関係者への感謝

その後工事は順調に進捗し、1月末に完工した。 2月8日に東京都の消防の検査があり合格。2月 13日には武田理事長による施主検査が行われ、 我々の要望通りの建物が完工していることを確認 した。翌日大学による検査、27日東京都による 検査に合格。各種什器、ロッカー、製氷機、電気 製品、寄付者銘板・看板等の搬入・据付けを経て、 3月13日に部員が引っ越しを行い、3月17日待 望のお披露目会を迎えることができた。

なお、東京都による新部室への検査済証の発行 に関して、年初に問題があることが判明した。新 部室そのものは、昨年3月に都の審査会でOKが 出て、正式な建築確認申請書をもらい工事着工に 至っている。しかしながら、東大構内全体に、ま だ未申請建物が多数あり、6年前から改善が進ん でいないことから、他の新築建物も含め、東京都 は今回の部室や野球部のブルペンに関して「仮使 用」しか認めないとの意向を示してきた。このこ とに関しては、1月12日に武田理事長が施設部 の保全課長に面会し、正式な検査済証の取得を強 く要請したが、大学としては都の意向に逆らえな いとの判断であった。従って、新部室は当面(建 築基準法上は) 仮使用にならざるを得ない。しか しながら、正式な検査済証は発行されない即ち仮 使用であっても、今後の新部室の使用に関しては、 全く問題ないとの見解を大学からは得ている。な

上:中央の横長の建物が新部室。左は農学部 グラウンド。

下左:清潔な男子トイレが新部室には併設された(女子トイレも同じ様式であり)。

下右: 女子の更衣室 (ロッカー 18人分、シャワーブース 4 基)。







お、できるだけ早期に、大学が、都から正式な検 査済証を得るように LB 会としては強く要請済で ある。

また、新部室の最終的な建設費に関しては、日東工営から、追加工事(テニス部への電気、給排水、ガスなどの接続工事)や樹木伐採等で 496 万円の追加請求があり、上述の消費税分差額 544 万円とあわせ 1000 万円以上を対象に最終交渉を行った。結果 841 万円で決着。基金から 6719 万円、LB 会から 841 万円、合計で 7560 万円(日東への支払分)となった。さらにロッカーや机・椅子などの什器類、製氷機、銘板・看板、空調機などの備品類を 370 万円分購入したので、総額では7930 万円となった。すべて、LB 会員(291 名)並びに個人 (7人)と企業(10社)からの寄付によって賄われた。寄付者の方々のご芳名は、新部室の階段踊り場の壁に、銘板にして掲額している。

思い返せば、2012年に新部室建設への機運が

盛り上がり、そこから足掛け7年。幸いにも百 周年の年に完成し、これから現役や LB 会の皆さ んに使ってもらえるようになった。しっかりメン テして大事に使ってもらえれば、今から50年で も、それ以上でも使える建物ができたと自負して いる。これもひとえに、LB会の皆さんが結束し、 7千万円以上の多額の寄付を集めることができた こと、またその協力を支えに大学 (スポーツ施設 に関しては全く予算も配慮も不足している組織)と の気の遠くなるような交渉に我々事務局も辛抱強 く柔軟に臨めたこと、によるとあらためて実感し ている。浅見前理事長、武田現理事長、宮路前事 務局長のリーダーシップと行動力があってこその 7年であり、影の恩人である大学職員の赤井、石 岡氏、また、7年の長きにわたり辛抱強く付き合 っていただいた日東工営(株)の小暮部長、設計 の加藤さん、現場監督の白石さんをはじめ、多く の関係者に、ここに深く感謝の気持ちを込めて、 結びとしたい。

### この 10 年の軌跡②

# 田嶋幸三日本サッカー協会会長講演

# 東京大学ア式蹴球部 100 周年特別記念講演

(2018年5月20日、東京大学五月祭)

節目の年をむかえての五月祭、「東京大学ア式蹴球部創部 100 周年特別記念講演」として公益財団法人日本サッカー協会(JFA)田嶋幸三会長をお招きし、日本サッカーの未来についてお話し頂きました。

# 『ベルリンの奇跡』で果たした 東大ア式蹴球部の役割

1925年に「ア式蹴球東京カレッジリーグ」という名前で現在に至る関東大学リーグの前身にあたるリーグが発足しています。その中心となったのが、まさにこの東京大学のア式蹴球部でした。それぐらい歴史がある部であります。

みなさんは『ベルリンの奇跡』という本をご覧になったことがあるでしょうか。1936年のベルリンオリンピックに出場したサッカー日本代表を綴った本です。この大会は日本サッカー史に「ベルリンの奇跡」と刻まれています。理由は、当時無名に近いアジアのチームが優勝候補だったスウェーデン代表を3-2で破ったからです(日本はベスト8進出)。ファーイーストの日本から一週間以上をかけてシベリア鉄道でロシアを横断し、さらにベルリンまで行くという長旅でした。このチームがスウェーデンに勝った戦い方が素晴らしい。

メンバーは東京帝国大学、早稲田大学、慶應義塾大学など大学生を中心としたチームでした。東京帝国大からは種田孝一さん、竹内悌三さん、高橋豊二さんの3選手に加え、日本サッカー界で重要な役割をなされた竹腰重丸さん(東京帝大LB)が選手兼コーチとして日本代表に入られました。みなさん、ドイツ語ができた。その語学力で新聞や様々な文献を読み、相手の選手やシステムを研究した。まさに日本が現在でも得意とするスカウティングを徹底してやっているのです。今と違って情報量も少ないですし、何も入ってこない。トレーニング方法にしろ、システムにしろ、様々なものを英文やドイツ語で理解して情報を得る能力



田嶋幸三JFA会長

があったこと、それを咀嚼して伝えていく能力を 当時の選手たちが持っていたことが、本の中に書 かれています。

ベルリンオリンピックでのスウェーデン戦はオリンピックでの日本サッカーの初勝利となり、大きな節目となりました。

# クラマー氏の招聘での 野津元会長の貢献

次の日本サッカーの大きな節目になるのは、1964年の東京オリンピックです。これは、日本が、敗戦から復興した自分たちの姿を世界にアピールする場となった大会です。サッカーもなんとか頑張ろうと準備を進め、大会を4年後に控えた1960年にヨーロッパへコーチを探しに行っています。その時、渡欧されたのが、東京帝国大出身で、当時、日本サッカー協会(JFA)会長を務めていらした野津謙(ゆずる)さんです。

野津さんは現地でデットマール・クラマーさんと出会います。その時の西ドイツサッカー協会の会長はゼップ・ヘルベルガーさん。映画にもなっている方で、1954年のFIFAワールドカップ・スイスで優勝を果たしたときの西ドイツ代表の監督です。その人に野津さんはお願いし、素晴らしいコーチを私たち日本に紹介して下さいと頼んだ。そこで紹介されたのが、西ドイツサッカー協会で指導者をしていたクラマーさん。初めて会った時にスポーツ・シューレ(スポーツ学校)の壁面に掲げられていた言葉が、まず野津さんの目に入ったそうです。

"Das Auge an sich ist blind.Das Ohr an sich ist taub. Es ist der Geist, der sieht.

Es ist der Geist, der heort."

(目、それ自体は見ることができない。耳、それ自体 は聞くことができない。ものを見るのは精神であり、 音を聞くのは精神である)

野津さんはドクターでもあったので、そのドイツ語をしっかり読み、こういう言葉を掲げられる人だったら間違いがないと確信された。そして、すぐ派遣してほしいと西ドイツサッカー協会にお願いしました。同年にクラマーさんの給料は全て西ドイツサッカー協会が支払ったといいます。その意味で我々は多くの人々に助けられて今日があるわけです。クラマーさんがいなかったら現在の日本のサッカーは、どうなっていたかわかりません。そのクラマーさんの招聘に尽力された一人が野津さんなのです。

私は、サッカーを始めた中学生以降、竹腰重丸 さん、岡野俊一郎さん、浅見俊雄先生に刺激を受 けてきましたが、お三方もサッカー界の発展に多 大な貢献をされている方々です。つまり、日本の サッカー界を牽引してきたのが東京大学ア式蹴球 部なのです。

今ここにいる学生の皆さんにとって試合の勝ち 負けは大事でしょうが、様々な分野で日本のサッカー界に貢献してくれたらと願っています。

# 「夢があるから強くなる」という 日本サッカー協会のスローガン

私たち JFA は「JFA2005 年宣言」というもの を発表しています。JFA の理念は"サッカーを通 じて豊かなスポーツ文化を創造し、人々の心身の健全な発達と社会の発展に貢献する"ことです。この理念を具現化する活動をより推進させようという目的で、2005年の元日に「JFA2005年宣言」を行い、「DREAM 夢があるから強くなる」というスローガンを掲げました。

JFA の会長として、サッカー強化に努め、日本代表が世界で活躍することで人々に勇気と希望と感動をもたらす。トップの日本代表チームから老若男女、プロからアマチュアのサッカーまで、すべてにおいて僕は責任を持ってやらなければなりません。そのベースとなるのが「DREAM 夢があるから強くなる」なのです。

私はサッカーをはじめ、スポーツには力があると思っています。人を変える力であり、社会を変える力であり、地域や国を変える力も持っている。特に、世界で最も愛されていると言われるサッカーは、そういう力があると感じます。時に良い面も悪い面も出たりしますが、そういう力があることを私たちは認識し、責任を感じながら、JFAの活動を推進していきたいと思っています。私たち



当日、田嶋会長よりパワーポイントで示された「JFA2005年宣 言 ~ DREAM 夢があるから強くなる~」

は継続して社会貢献活動を行っていかなければなりません。やはり約560万人のサッカーファミリー、それを応援してくださる方々のためにも責任を持って行動していかなければなりません。

# 歴史をリスペクトするから、 未来をリスペクトできる

今年 2018 年は東大ア式蹴球部 100 周年、JFA も 2021 年に創立 100 周年を迎えます。そういったことを考えますと、先人たちが残してくれた足跡や実績というものを本当にリスペクトしていかなければなりません。歴史をリスペクトするからこそ、未来をリスペクトできる。前任者のやったことを否定して次のステップに進む、そういう方法もあるでしょう。でも、JFA はこれからの歴史や文化を作っていかないといけないわけで、しっかりとしたものをブレずに作っていきたいと考えています。

昨年、国際オリンピック委員会 (IOC) のトーマス・バッハ会長がおっしゃったことですが、「かつてないほど急速に変化する現代社会において、過去の成功は未来を約束するものではない。確固たる 100 年の歴史を踏まえ、現在直面している課題に加え、予測される課題に対して今すぐ取り組まなければならない」と。これを僕はサッカー界にも置き換えてやっています。東大ア式蹴球部の皆さんも是非、自分たちのこととして考えてみてください。今、何をしなければならないの

か。皆さんの先輩方が中心となって東京ユナイテッドFCという新しい試みをされています。そういう新しいものにどんどんトライしていくのは大切です。変化の追従者ではなく、率先して変革するリーダーでありたいと思っています。そして、決して先延ばしはしない。このことを僕らは100年の節目にあたってお互い考えていかなければなりません。ましてや東大ア式蹴球部の100年の歴史は、サッカー協会より早く立ち上がった。そういう意味でもどんどん新しいものにトライして、尚且つ、過去の伝統や文化は受け継いでもらいたいです。

この国の先人たちには本当に賢い方がたくさん いらっしゃって、吉田松陰はこう残しています。

夢なき者に理想なし 理想なき者に計画なし 計画なき者に実行なし 実行なき者に成功なし 故に夢なき者に成功なし

まさに夢を持つというのは、吉田松陰の言うとおりだと思います。協会の会長として、夢の実現のために行動していきます。是非皆さんも今後サッカーの様々な分野に関わっていただいて、これからの100年をもっと素晴らしいものにして頂きたいと願っています。そして、日本のサッカー界に貢献して頂ければ大変嬉しく思います。



左から、福田監督、利重総監督、田嶋会長、浅見前LB会理事長、武田LB会理事長。

## この 10 年の軌跡③

# 文京区長 成澤廣修氏に聞く

# スポーツと地域の発展

聞き手:武田厚、福田雅、糸谷歩

東京大学の本郷キャンパスが位置する文京区。区長である成澤廣修氏(52歳)は、実は御殿下サッカースクールの卒業生である。さらに文京区は東京ユナイテッドFCや文京LBレディースの本拠地であり、成澤区長は様々な面でバックアップしている。区長のサッカーはじめスポーツへの考え、現状の課題、そして未来に向けた取り組みなど、そのすべてを語ってもらった。

# 「すごく楽しい日曜日だった 記憶があります」

――子供時代に通われていた御殿下サッカースクール、そちらでの体験話や感想をお聞かせください。

**成澤** いろんな記憶が思い出されます。確か当時は僕や現在ボクシングのカメラマンをやっている 友人など同じ暁星小学校に通っていた3人の仲間でスクールに行っていました。

うちの父は法政大学のバスケットボール部の監督を20年くらいやっていたのですが、なんか東大で始まっているらしいぞ、というのを聞きつけたらしいんです。当時はホームページも何もない時代です。何より今のように子供たち向けのサッカースクールが数多くあるような状況ではありません。サッカースクールそのものが東京に幾つあるのかという時代でした。そこで友人たちと通うようになったのがきっかけになりました。

何年生ぐらいから通われたのでしょうか。練習の時間帯や内容はどのようなものだったのでしょうか。

成澤 多分ですが、小学校低学年頃からだったと思います。高学年の時には一緒に入った二人は暁星小の「アストラ」という小学生年代の選抜でつくられるチームに選ばれ、そちらでも活躍しました。その内一人はその後ずっとサッカーを続けて高校時代にインターハイ3位となりました。そういったこともあったので、入ったのは1~2年生ぐらいだったと思います。

練習時間は10時から12時までの2時間ですね。 低学年なので、ほとんど遊びのようなところから 始まって、ドリブルしたり、パスしたり、ミニゲ



#### なりさわ ひろのぶ

文京区長。1966 年生まれ、明治大学公共政策大学院修了。 1991 年、当時全国最年少の25歳で文京区議会議員に初当選、 区議を4期務めた後、2007年4月に区長に初当選(現在3期 目)。2010年4月、地方自治体首長初の育児休暇を2週間取 得し、話題となった。現在、特別区長会幹事、東京都子供・ 子育て会議委員、跡見学園女子大学兼任講師、明治大学公共 政策大学院ガバナンス研究科兼任講師等も務める。

ームみたいなものもあったんじゃないかと思います。ボールに馴染むというか遊びでしたよね。楽 しく基礎技術を身につけるみたいな感じだったか と思います。

現在の御殿下はユニフォームがないと聞きましたが、僕たちの時代は入ってすぐにユニフォームを購入したんです。真っ赤なユニフォームに白でイチョウのマークが入っていて、白パンを履いていたような気がします。

――その年代ではボールに慣れ親しむのは有用な 練習だと思います。当時の御殿下のグラウン ドは、どうだったのですか?

**成澤** 当時は土のグラウンドでした。グラウンド に行くのに普通は竜岡門から構内に入るのですが、 僕は消防署の脇のほうから入って、七徳堂のほう から御殿下に行っていました。練習が終わると、 消防署前のわが家へ帰って、風呂に入って昼食を 食べる。すごく楽しい日曜日だった記憶がありま すね。

1 学年で 10 人から 20 人の子供がサッカースクールにいたと思います。地域の子たちや大学の OB のお子さんたちが来ていたと思います。僕たちが通っていたのは区立の学校ではなかったので地域の子たちに友達がいなかったのですが、スクールのおかげで毎回泥だらけになって、一緒に仲良く楽しんでいましたね。

最近は小学校に上がる前からプール教室へ行かせるなど当たり前にやっていますが、当時はまったく整備されていなかったですし、今でこそ公立の体育館は指定管理者が運営していましたが、その頃はまったくなかったですから。子供の年代から競技人口を増やそう、あるいはサッカーを好きになる子供を増やしていこうなど、そういう出発点になったような事業だったと思っています。

成澤 私もそのように聞いています。その後ですが、私は選抜チームには入れず、その段階でスクールは辞めたと記憶しています。それにしても、今から約50年前に地域に対して開かれたスクールが始まっていたというのは凄いことだと思います。

──現在、文京区では小学生のクラブチームは幾 つくらいあるのでしょうか。

成澤 数でいえば10チーム弱ぐらいでしょうか。今は野球、サッカー、バスケットなどどれも人気があります。どのチームも子供さんの数が増えているので、どこもなかなか試合に出いれないそうです。人が集まらなくて困って田のです。水泳スクールなど月謝を払って通うようなところもキャンルなど月謝を払って通うようなところもキャンが、親子参加型の釣り教室のような事業は人が集まらないから、どん応募が増えています。体験型や参加型も人

気があります。

――今も増え続けている御殿下サッカースクール の人気の理由は何だとお考えでしょうか。

成澤 御殿下は大会にあまり出場していないじゃないですか。それなのに子供さんが来るというのは摩訶不思議といいますか、今の風潮とはちょっと違いますよね。大会で勝ち抜いて、ということに全く重きを置いていない。競い合うより、ボール遊びして楽しい時間を過ごす。僕らの頃から50年間変わっていないのに、今も人気なんです。

# 部活とはまた違う、 スポーツを楽しむということ

一一日本のスポーツの多くは部活動です。体育の延長の部活ではありますが、競技志向という部分が強いです。スポーツを楽しむ、生涯スポーツとして楽しむというニーズに合致したクラブや活動が、現在はまだ少ないかと思います。

成澤 逆にそういうところは、数多く大会に出場しないとチームのモチベーションを維持できないのではないでしょうか。なので、絶えず大会を目的としたものとなります。それとは逆の存在が御殿下なのかもしれません。今は子供の遊び場がなかなか少ないので、週末に東大へ行くとバギーを引いたお父さんやお母さんがものすごく多い。30年、40年前にはあまり見られなった光景ですね。学生運動が終わった頃の東大は騒然としていて、とてもそんな雰囲気ではなかった。ところが最近は地域にも開かれ、多くの家族が入れるようになっている。そういう人たちに現役の学生がサッカーを教えているというのは、誰でも気になりますよね。



# 開かれた大学 とは何か

区長という立場から見て以前の東大と比べて変わったことは何でしょうか。東大自身にも昔より開かれた大学にしようという取り組みがあります。

**成澤** 今はカップルなんかも東大校内を散歩して、何十年も前とくらべて東大はまったく変わったなと感じます。年配の方々の観光地にもなっています。

今年の五月祭も多くの人が来られていました。 かねやすのところから三原堂のほうへ人が溢れて いて、本当に増えたなと思います。東大自体、何 かが変わってきていると感じています。

例えばですが、東大前にある本屋さんが、コピー機がない時代に学生のアルバイトを雇ってノートの書き写しをするという商売があったそうです。「大学ノート」も東大近くの文房具屋さんが発祥と聞いています。赤門前の八百屋さんが、少し時間が経ったサツマイモに砂糖を混ぜて売り出したら、「大学芋」だといわれるようになった。「大学芋」は"東京大学の芋"で、つまり発祥の地であると我々は聞いています。だけど、今やその名残がまったくなくなりました。また、東大の前にある「落第横丁」は旧制一高の時代から、みんなでトコトン飲んで、勉強しないから落第してしまう人がいっぱいいるので「落第横丁」と呼ばれるようになりました。

ところが今は東大の中に多くの店舗が入っています。それはそれで便利でいいところはあると思いますが、区全体で考えると、東大生や関係者をお客さんにしていた店はどんどんなくなっていった地域が衰退していきます。大学が綺麗になって、地域が衰退していきます。大学が綺麗になって便利になったのと同時に、都市開発が進んで、文京区の人口が増えて東大の周りもマンションがいっぱい増えることによって、逆に地域に遊び場がなくなった。それで、東大の中で子供たちが遊がなくなった。それで、東大の中で子供たちが遊がなくなった。それで、東大の中で子供たちが遊がなくなった。それで、東大の中で子供たちが遊がなくなった。それで、東大の中で子供たちが遊がなくなった。その地域の人たちも中に集うようになって、そのあおりを受けて地域の商店街はますが、乗しい部分もありますね。

――開かれた大学というものは、両方の面がある わけですね。

成澤 つくづく感じるのは、大学というのはすご

く多様な組織の集まりだということです。東大の場合、総長が地域連携と言って地域連携室ができました。でも実際は、例えば地域と東大ア式蹴球部との関係ができて、区内の子供サッカー大会に東大のサッカー部の方々がたくさん来てくれるところから始まり、文京LBレディースができ、東京ユナイテッドFCにつながっていく。むしろ、こういった取り組みのほうが現実的に進んでいます。

こういった個々の地域との連携はとても有意義なので、いろんな分野で研究をしている研究者の人たちなど、どんどん地域に入ってきて欲しいですね。

# 文京 LB レディース、 東京ユナイテッド FC の活躍に期待

書さにお話に出ました文京 LB レディース、 東京ユナイテッド FC は文字どおり文京区を 本拠地として、新しい形の地域クラブを目指 して活動しています。

成澤 文京 LB レディースの誕生はすごくドラマ チックでしたよ。2014年に東大サッカー部女子 が発足しましたが、女子部員は7人しか集まらな かった。「このままじゃ単独での存続は無理だし、 潰れちゃう」と。一方で、女子サッカー部が誕生 したというニュースを聞いて、地元の女子中高生 から何件か問い合わせがあって、練習だけでも参 加させてほしいという要望がありました。要は皆 さん男子と一緒に練習をやれなくなって、サッカ ーを辞めてしまう人が多い。まさに夏のカイザー 杯で東大サッカー部のお手伝いをしている時です が、僕も開会式に行かせて頂いて、当時アカデミ ー推進部部長の小野沢さん、課長の古谷さんもい らして、僕が「このままだと東大女子サッカー部 が潰れちゃう。それを救いたいし、もっと言うと、 文京区としての女子のサッカーをやりたい と言 いました。そこから動き出しました。

――ここから大学と地域が一緒となったチームが 誕生していくわけですね。課題も多かったか と思いますが。

成澤 最初のうちは一チーム分くらいの選手が集まった東大生と地域の方たちの合同チームのような形で、試合に出場することは可能な状態でした。ただし部活動として継続するのは難しいと思いました。そこで、もう完全に地域クラブにして、東

大女子サッカー部がそこに包含される形で地域と一緒に歩んでいく。そういったビジョンを描いたんです。そこからは早かった。2015年のことでしたが、8月か9月には正式な提案書をJFAに提出して、年末には準備を始めて、1月にはメンバーを募集していた。信じられないくらいの速さで進み、文京LBレディースは生まれたんです。

JFA をはじめ、あの時関わって下さった皆さんは今でも恩人のように思っています。今後も女子も男子も応援していって欲しいですね。

## 文京区から「なでしこリーグ」へ、 という夢

――いずれ、なでしこリーグ入りも夢ではありませんね。女子の場合はJリーグ入りほどハードルが高くありません。もちろん簡単なことでもありませんが。

成澤 選手を補強すれば可能性もあるのではないでしょうか。ホーム会場が人工芝なども認められるところも女子ならではですよね。ただ補強するといっても、強いチームをつくりたいわけではありません。彼女たちは、今一生懸命頑張って自分たちでチームのレベルを上げてきているじゃないですか。それに応えていきたいだけです。

――例えば文京区で非常勤採用のスポーツ枠をつくって、文京区役所の非常勤として朝から働いて、夕方からはLBレディースで練習するというのもあるのでは。

成澤 プロ契約でなくてもやっていけるのではないでしょうか。文京LBレディースがなでしこリーグへ、というのは実はいろんなところから言われています。文京区からなでしこリーグへ。実現

することができたら、区全体で盛り上がるでしょ うね。

ただ現状課題なのは、ホームグラウンドに観客 席がないということですね。これはネックですの で、なんとかしないといけません。

— これからの 100 年に向けて、東大ア式蹴球部、東京ユナイテッド FC、文京 LB レディースにどのような期待がありますでしょうか。

**成澤** 100 周年を迎えて、過去も大事ですが、これからの将来をどうつくっていくのかを我々は大事にしています。

文京区民にとって東大はもともと誇りだったけれども、正直あまり近い存在ではなかったわけです。そういったところが今回のようなア式蹴球部とのつながりから、特に女子チームをつくって下さったお陰で、区民がサッカーを続けられること、地域に東大の学生たちが手伝いに来てくれるということで、遠い存在から身近な存在になってきました。大学の将来としても、その方向性に進んで行くのは素晴らしいことだと感じますし、我々としてもこの方向性を大切にして、逆にしっかりと応援できる関係を築いていかなければと考えています

チームの実力を上げて試合に勝つというのは選手の悲願です。それとは別に立派なアスリートとして、立派な社会人として、自分の学習を積み上げられる活動をしていって欲しいのです。そういう面でア式蹴球部とタイアップしながら、我々もご期待に応えるように努めていきたいです。今後も、今の動きを一段と強化してやっていければと思っています。

構成:上野直彦



成澤区長を中に、福田(左)、武田(右)。2018年5月24日、文京区役所にて。

## この 10 年の軌跡4

# 東大と日本サッカー協会がスポーツ連携協定を締結

(LB 会報 No.17 (2017年5月)より転載)

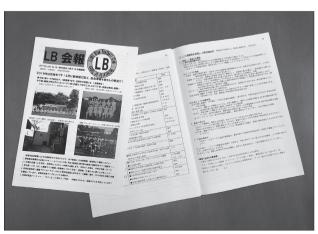
東大の「学内広報 No1492」(2017,2,22) に掲載された「日本サッカー協会との連携が Kickoff!」とのタイトルの記事から抜粋したものです(鹿園部長の尽力により、東大広報課の許可を得て、掲載しています)。

この記事をLB会報に掲載したのは、学内に、 以下のような拠点が設立されたことや、サッカー 協会との連携が成立したことで、今まで認知度の 低かったサッカーやスポーツ全般に関して急速に 関心が高まっている状況を LB の皆さんに理解し て頂きたかったことにあります。一つの事例とし て、今年3月の卒業式で、五神総長の式辞に、何 と「スポーツ」という単語が20回以上も登場し ました。サッカー協会との連携や FIFA のボバン 事務総長代理のクロアチア代表としての活躍に触 れています。従来は、知や科学技術といった単語 しかなく、スポーツが登場したことは、ほとんど なかったと思います。今後この動きが、どのよう に展開していくかは、我々 LB 会や現役の努力次 第でもありますが、是非この機会をとらえて、学 内外での活動強化に繋がればと考えています。な お、この日本協会と東大の連携協定締結に関して

は、福田監督が仕掛け人として、境田理事に働きかけ五神総長と田嶋会長を引き合わせた結果であります。

東大では、2016年5月に、「東京大学スポーツ 先端科学研究拠点 | を開設しました。この拠点の 目的は、スポーツ・健康科学、ロボット工学等を 活用して①高齢化社会における健康寿命増大、② 障がい者の QOL (Quality of life) 向上、③バリア フリー化推進、④学生やトップアスリートの運動 能力向上、競技力強化等を、実践的、分野横断的 に推進し、社会へ還元することです。学内にスポ ーツに関して、従来にない画期的な組織ができた のは注目すべきことです。この拠点の活動の手始 めに、5月に日本障がい者スポーツ協会の鳥原会 長(S42 卒、LB)及び日本スポーツ振興センター 大東会長(前Jリーグ会長)と五神総長が連携協 定書に署名し、2020年のオリンピック・パラリ ンピック東京大会に向けたバリアフリー化や選手 強化に向けて各種サポートを推進していくとのこ とです。

その第2弾として……(以下は学内広報の2ページからの抜粋記事です)



LB会報近号

2016年12月16日、東京大学と日本サッカー協会(JFA)は、スポーツ医科学研究の推進などに関する連携協定に調印、記者会見と記念式典を安田講堂にて開催しました。JFAの現会長と元会長、スポーツ庁長官、国際サッカー連盟(FIFA)会長、そして往年のスター選手までもが本郷キャンパスに集結するなか、連携開始のホイッスルが響き渡りました。これまで深い関係を持ってきた東大と日本サッカー。これから始まるパス交換とそこからのゴールに注目です。(福田監督が司会を務めました)

## FIFA 会長

UEFA(欧州サッカー連盟)から2016年に第9代FIFA会長に。スイス出身。挨拶では、「最初の調査」と題してクラブW杯決勝の結果を聴衆に訊ね、「鹿島が勝つだろう」と予想。



左はFIFAインファンテイーノ会長、中は五神真総長、右は JFA田嶋幸三会長

# 浅見理事長

国際審判員として国内外で20年以上活躍後、 JFA審判委員長としてサッカー界に貢献。東大ア 式蹴球部では主将として、1967年からは監督と しても活躍した本学名誉教授。



浅見LB会理事長

#### FIFA 事務総長代理

クロアチア代表と AC ミランの 10 番として活躍。チェス好き。聴衆から AI とサッカーについて聞かれ、「AI より選手の知性を信じる」と答えた。



FIFA ボバン事務総長代理

#### 境田理事

弁護士時代、日本フェンシング協会の補助金問題、バスケットボールのリーグ分裂問題など、スポーツ界の問題解決に取り組む。今連携の実現に尽力。



東大 境田理事

## この 10 年の軌跡(5)

# 「日本サッカーと東大」十大トピックス

東大の「学内広報 No1492」(2017,2,22) の3ページに掲載された記事。90年誌をもとに浅見理事長が編集したものです。

#### 天皇杯を3回も制覇! -

天皇杯全日本サッカー選手権大会は、日本のカップ戦の最高峰です。96回の歴史を誇るこの大会で、1931年の第11回、1946年の第26回、1949年の第29回と、3度も栄冠に輝いているのが東大(1925年の第5回は準優勝)。これはジュビロ磐田や名古屋グランパスをも凌駕する回数です。

#### OB12 人がサッカー殿堂入り! ---

日本サッカーの発展に尽力した功労者を讃える「サッカー殿堂」。73人いる掲額者のなかで東大出身者は12人にのぼります。さらに、唯一チームとして掲額されている1936年ベルリン五輪日本代表チームのうち、4人は東大出身です。その功績は日本サッカーミュージアムで確認できます。

#### OB 4人が「ベルリンの奇跡」に貢献! —

ベルリン五輪で、優勝候補だったスウェーデン 代表を相手に、五輪初出場の日本代表が0-2から の逆転勝利をおさめた一戦は、「ベルリンの奇跡」 として語り継がれています。種田孝一さん、竹内 悌三さんは先発として、竹腰重丸さん、高橋豊二 さんは控えとしてこの勝利に貢献しました。

#### 国際タイトル初獲得の主力に!

サッカー日本代表が初めて獲得した国際タイトルは 1930 年に明治神宮外苑競技場で行われた第 9 回極東選手権。チームの主力は 19 名中 12 名にも及ぶ東大勢で、主将も東大の竹腰重丸さんでした。当時の最強チーム・中国との決勝戦は 3-3 のドロー。協議の結果、両者優勝となりました。

### 関東大学リーグ6連覇!-

関東大学サッカーリーグ戦ではこれまでに9回も優勝しており、そのうち1926年から1931年までは怒濤の6連覇を達成しています。26回とぶっちぎりの最多優勝回数を誇る早稲田大学でも連覇となると4連覇が最高(他に慶應義塾大学と専修大学も4連覇の経験あり)。不滅の金字塔です。

#### JFA 会長を 4 人輩出!

初代会長の今村次吉さん(法学部)を筆頭に、4代会長の野津謙さん(医学部)、5代会長の平井富三郎さん(法学部)、9代会長の岡野俊一郎さん(文学部)の4人が日本サッカー協会会長として活躍しました。これは出身大学別で見ると最多の数字です(2位は早稲田と慶應の各2人)。

#### 日本代表監督を2人輩出! -

ハリルホジッチ監督の大先輩にあたるのが、竹腰重丸さんと岡野俊一郎さんです。竹腰さんは1951年に代表監督に就任。後に東大教養学部の教授も務めました。岡野さんは1970年に代表監督となり、後にIOCでも活躍。2月の逝去の折には国内外のスポーツ人から弔辞が寄せられました。

#### 検見川が日本代表の合宿地に!

1964年の東京五輪に向け、日本代表が1年間に及ぶ強化合宿を行ったのが、検見川総合運動場でした。その後も、福島のJヴィレッジができるまでは日本代表の合宿といえば検見川が定番。日本サッカー史上に燦然と輝くメキシコ五輪の銅メダルももちろんここでの練習の賜物でした。

#### Jリーガーを 2 人輩出! -

東大 OB 初の J リーガーとして J2 のファジアーノ岡山でプレーするのが久木田紳吾選手(ファジアーノの木村正明社長も東大 OB)。そして久木田選手に続いたのが、J3 の藤枝 MYFC に 2015 年から所属する添田隆司選手。都民の東大人は岡山vs 町田・東京 V、藤枝 vsFC 東京 U23 に注目を!

#### サムライブルーの由来に!? -

単独チームが日本代表を務めていた昔、シャツの色はその都度違いました。選手を複数チームから選抜するようになったのは先述の第9回極東選手権から。東大勢が主力のため、淡青色のシャツを着て臨んだ日本代表は見事初戴冠。以降、日本代表のシャツは青になりました(一時除く)。文献がなく断定はできませんが、サムライブルーの源流に東大の淡青色があることは確かです。

## この 10 年の軌跡⑥

# 2017年五月祭パネルディスカッション "これからの「サッカー」の話をしよう"

(LB 会報 No.18 (2017年12月)より転載)

日時;2017年、5/20仕) 11:00~12:45

場所;法学部一号館一階 22 番教室 主催;東京大学運動会ア式蹴球部

昨年に引き続き、今年も五月祭にてパネルディスカッションを行った。今回は創部 100 周年を来年に控えた特別企画となり、これまでの 100 年の歴史に敬意を払いつつも、これからのア式蹴球部とサッカー界に焦点が当てられた。様々な形でサッカー界に身を置くパネリスト達が独自の視点でサッカーを語り、現役部員も登壇した。男子部、女子部それぞれの代表者が、普段からリーグ戦のピッチで感じていることや、学生の思う今後の展望を述べた。

会場には企画に興味を持った学生や社会人、OBの方々など100名余りが集まった。質疑応答の時間には、多くの質問があり、サッカービジネスに関することから岩政コーチのキャリアについての質問まで多岐にわたった。

#### 第一部

# 東京大学サッカー部を、 地域に根差した強豪チームへ

パネリスト

福田雅(東京大学運動会ア式蹴球部 監督) 岩政大樹(東京大学運動会ア式蹴球部 コーチ) 沢登孝介(東京大学運動会ア式蹴球部 2017 年度主将) 工藤航(東京大学運動会ア式蹴球部 2017 年度副将) 大坪 佳夏子(東京大学運動会ア式蹴球部女子 2016 年度主将)

ファシリテーター

清水 克洋(名古屋グランパスエイト 社長付主査)

#### ●ア式蹴球部が強くなるために

今年からア式蹴球部のコーチに就任した岩政コーチは、「誤解を恐れずに言えば、ア式を強くしようとは考えていない」と話した。サッカーに内

包される様々な要素を学び、今後の人生に生かすことこそが、現役部員に必要なものだと感じているようだった。例えば、サッカーにおいて大事なのは個人の判断である。その集合としてチームが作られるのであり、チームとしての枠組みを先に作っても意味はない。社会に出ても同じような課題が存在すると述べた。

それを受けて男子部主将沢登、副将工藤の二人は、シーズン当初はチームとしてどう戦うかを軸にしていた考えが、岩政コーチによって個人の力や特徴に立脚したものに変わったと話した。岩政コーチは、一つのプレーに対しても、理由や動機を徹底的に追及するそうだ。そのような指導を受ける中で、サッカーに特効薬はなく、個人の日々の積み重ねが強いチームを創ることを実感している様子だった。

続いて岩政コーチに、どうして現在の環境を選んだのかという質問が投げかけられた。岩政コーチはサッカー選手をキャリアの一つのステップととらえており、将来を見据えた選択として、「選手兼コーチ」を選んだという。さらに、ア式蹴球部を巻き込んだ「東京のど真ん中にビッグクラブを」というクラブの取り組みを「面白い」と感じたと語った。

東京ユナイテッドには、岩政コーチと同様にその理念に共感する元プロ選手や強豪大学出身選手が多く名を連ねる。沢登は改めて、チーム強化の観点において、ユナイテッドとの合同練習は非常に重要だと話した。チーム力の底上げのためには、よりレベルの高い選手と日々練習することが、個人の成長の上限を引き上げる。現役部員は新たな環境での自分の成長を強く実感している様子だった。

#### ●地域に根差したチームとして

また、強化だけに留まらない多彩な活動が紹介された。ア式蹴球部女子は、地域コミュニティの

一つとしての活動を重視しており、文京区公認女子サッカークラブである文京 LB レディースの運営も行っている。昨年度主将の大坪を含めた女子部員はこういった活動から多様な刺激を得ている様子だった。男子部では、オフシーズンに全国から進学校を招く高校サッカー大会(東大サッカーフェスティバル)や、日曜朝に小学生以下の子供を指導する、御殿下サッカースクールでの地域貢献などが紹介された。これらの活動ではほとんどの部員が運営に携わり、サッカーへの貢献を日々学んでいる。

#### ●ピッチ内外の活動がもたらす新たな価値

沢登は、こうしたピッチ外での様々な活動がア 式蹴球部の魅力を創り、ひいてはピッチでの勝利 につながると語った。また大坪は、地域コミュニ ティの一つとしての女子サッカー部の活動が、地 域のスポーツ文化を醸成し、健康寿命の延伸、社 会保障費の削減などの社会問題解決につながれば と期待を込めた。

岩政コーチはこれらの話を受けて、生涯スポーツというテーマで日本が大きく動き出そうとしている中で、東大ア式蹴球部の卒部生に是非貢献してほしいと話し、現在のア式蹴球部の活動を高く評価していた。

企画を傍聴した現役部員も改めてそれらの重要 さに気づかされた様子で、今後の部活動に向け気 持ちを新たにした。

#### ●100年への敬意と新たな挑戦

前半の最後には総括として、福田監督からア式 蹴球部のクラブデザインについての説明があった。 福田監督によると、東京ユナイテッドを巻き込 んだ構想の狙いは主に下記のようにまとめられる。 1. オンザピッチでの成長

レベルの高い選手と練習することで個人の成長 を促す。

#### 2. 部活運営の限界の打破

都リーグ参加や環境整備など、部活の運営費用 がかさむ中で、ア式蹴球部が核となって一つの地 域クラブを運営し、資源を共有することで金銭的 な問題を解決する。

3. 東京大学サッカー部としての新たな価値 現在までの100年の実績に敬意を表しつつ、 今後は競技力とは違った部分での価値提供が求め られてきている。地域コミュニティのハブになっている女子サッカー部がいい例であり、地域との繋がりにおいて重要な役割を担っている。

#### 第二部

日本の"成長産業"、スポーツ界を 東京大学はいかにリードしていくべきか パネリスト

利重 孝夫(東京大学ア式蹴球部 総監督) 福田 雅(東京大学ア式蹴球部 監督) 清水 克洋(名古屋グランパスエイト 社長付主査)

後半はスポーツビジネスに深く関わる三人の指導者・経営者が登壇し、フリートークという形で、よりマクロな「サッカー」が語られた。冒頭に改めて三人の自己紹介が行われた。福田監督はア式蹴球部と東京ユナイテッド運営の傍ら、JFA(日本サッカー協会)の監事を務めており、利重監督はシティフットボールグループで国際的なサッカーの潮流を身近で感じている。また、清水氏はヴィッセル神戸などJリーグ所属チームの経営を通じ、サッカークラブ経営という現場の経験を数多く持つなど、三者三様の視点が明らかとなった。

#### ●日本スポーツ界における変化

初めの話題は清水氏による問題提起で始まった。 近年サッカーを取り巻く環境は非常に整備されて きており、大学サッカーにおいても同様だという。 旧来アマチュアと呼ばれた場所に、多くの「プロ」が侵食してきており、それが上記のような環境を生み出していると話した。日本政府もスポーツ産業を基幹産業にしようと取り組みを増やしており、スポーツ未来会議や日本版NCAAが話に上がった。

福田監督は日本版NCAAについて言及し、日本スポーツがアメリカと同じようなNCAA創設により急激に発展することは、比較的困難だと述べた。日本の文化・慣習などを考慮すると、大学スポーツが直接、商業的に儲かることは難しいと話し、だからこそ地域と連携して競技を盛り上げることや、優秀な人材を輩出することの重要性を主張した。そのような中での自身の活動にも触れ、OBチームが東京ユナイテッドの母体であった慶應や東大などは人材の宝庫であり、その中から自身の後進となる人材、将来のスポーツ産業を担う

人材を育てることが自身のテーマの一つであると 述べた。

利重総監督は、スポーツは世界では成長産業で ある一方、日本では市場規模も比較的小さく、改 善の必要があると述べた。

#### ●東京ユナイテッドの挑戦

日本スポーツの財政規模が小さな原因として、特にサッカーにおいて都心にビッグクラブが存在しないことがある。利重総監督によると、Jクラブには大きく分けて二種類が存在し、

親会社があり、経営規模が比較的大きなクラブ 親会社が存在せず、経営規模の小さなクラブ と大別できる。総監督は、東京ユナイテッドの経 営はどちらでもない全く新しいものを目指してい ると述べた。親会社がないため自由な意思決定が 可能であるだけでなく、大規模なスポンサーシッ プなどにより経営規模を大きく保とうとしている。 清水氏は、人材育成という視点で東京ユナイテ

清水氏は、人材育成という視点で東京ユナイテッドを評価し、個人のファーストキャリアとしてのJクラブへの就職はハードルが高い中で、東京ユナイテッドと東京大学ア式蹴球部とのコラボレーションは非常に価値があるとした。商業的、経営者的な視点をもって活動ができる部活は非常に珍しく、在学中からどんどんクラブ経営に触れてほしいと学生に呼びかけていた。

#### ●東大ア式から「基幹産業」を担う人材を

続いて清水氏は人材というテーマについて、自身のキャリアと照らし合わせながら東大ア式蹴球部員への期待を語った。Jリーグは創設 25 周年を迎えようとしており、一般的に最初の 10 年は選手のプロ化、次の 10 年が指導者のプロ化、次の 10 年が指導者のプロ化、次の 10 年が指導者のプロ化、次の 10 年が運営のプロ化とも言われている。しかしクラブ経営に向けたキャリアパスは未だ不透明であり、その事実がサッカー界の停滞感につながっていると警鐘を鳴らした。そのような過酷な環境の中で、東大ア式蹴球部などを卒部した学生が、自分でキャリアを切り開いていく必要性があると強く訴えていた。自身は東大卒業後、キャリアを模索する中で、Jクラブ社長などを経験し、今後も自分自身で道を開きながら、後進がたどる道を用意したいと話した。

一方で利重総監督は、人材を輩出する先はクラブだけでないと述べた。スポーツが社会に大きな

影響を与えるためには、クラブや協会だけでなく、 企業・クライアントサイドにもスポーツへの理解 が必要だ。今後は、スポーツマーケティングを理 解し、リーダーシップを発揮する人物を一般企業 などに輩出することがより重視されると強調した。 具体例として、五月に発表されたトヨタ自動車と JFA (日本サッカー協会) のスポンサーシップを挙 げた。このスポンサーシップは単に企業がスポー ツ組織に広告費としてコストを支払うだけでなく、 企業側にとっても、うまく利用すればスポーツを 通した能動的な商業活動が可能となる良い例であ るということだ。これは企業側にスポーツマーケ ティングについてのリーダーシップが存在したか らこそ実現した提携であり、クライアントサイド に優秀な人材を輩出することでこのような取り組 みが増加してほしいと、利重総監督は述べていた。

最後に福田監督は、シンポジウムの締めくくりとして、ア式蹴球部員に向けてメッセージを述べた。上述のような人材の育成・排出が期待される中で、ア式蹴球部員が今やるべきことはアスリートマインドを鍛えることだという。これからの日本スポーツを担うのは「アスリートマインドを持ったビジネスパーソン」であり、将来日本をリードする人材になるためにも、常に目の前のリーグ戦にこだわって、勝利を掴んでほしいと話した。

#### 終わりに

来年で100周年を迎える東大ア式蹴球部に在籍する私達は、このクラブが今まさに一つの転換期を迎えようとしているのを感じている。過去に積み上げた伝統や栄誉に対する憧れと渇望は、メンバーがいくら入れ替わろうと毎年尽きることがない。毎年レベルが上がっているように見える大学サッカーの世界で爪痕を残すためには、東大ならではの伝統と、同じく常識を打ち破る力が必要となる。

一方、そうして必死に勝利を求める中で、底知れぬサッカーの価値に気づく。私達は、サッカーに惹かれ、サッカーに繋げられ、また教えられている。ピッチ内外に充満するその価値をあらゆる場で感じ、考え、体現する。まさに、「リードする」ことが今後の自分たちに求められているのを感じる企画となった。

文責:東京大学運動会ア式蹴球部4年 俣野泰佑

# この 10 年の軌跡⑦

# 2018 年ホームカミングデイ

(2018年10月19日)

#### 武田厚

今年のホームカミングデイは、創部100年の特別 企画ということで、2011年の東日本大震災で津波 の被害にあった宮城県亘理町の子供たちを招待した。

小学校3~6年生31名(内女子7名)とコーチ9名を乗せたバスは、早朝に亘理町を発って、12時に二食前のロータリーに到着。まずは中央食堂での昼食。ボリウムのある学食に満足した彼らには、ア式蹴球部若手の案内で、安田講堂、図書館、赤門、三四郎池などを巡り、本郷の雰囲気を体感してもらった(1)。

その後一服して、いよいよ御殿下グラウンドへ。 糸谷マネージャーが中心となり、ア式部員が指導 する形で特別メニューの練習をこなし(②③)、 その後、ゲームに臨んだ(④)。子供たちは、元 気よく快活で、伸び伸びとサッカーを楽しみ、ア 式部員とも、すぐに打ち解けた様子であった(⑤)。 試合後は、ア式の部室に移動して、みんなで賑 やかに夕食を共にした(⑥)。

みんな! これからもサッカーをやり、一層学業に励んで、将来、ア式の門をたたいてくれよ!

